UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 073393297

292

石原道博著

東亞史襍攷

生活社刊

序

本書の著者石原道博君は、東京帝大に於いて東洋史學を專攻された篤學眞摯な少壯學者である。夙に我が國と東亞諸國との關係、特に明末清初に於ける日支關係の研究に力を傾けられ、幾多の精緻なる業績を公にされた。その一部を成す「鄭成功」は既に出版され、「日本乞師の研究」も近く刊行を見んとしてゐる。然し石原君はかゝる專攻部門にのみ跼蹐することなく、東洋史の各時代に亙り、種々なる問題に就いても廣く興味を持たれ、或は重要事項に關する學界の動きを迹づけ、或は斯學に於ける內外の名著を紹介し、更に或は些事ながらも史趣淺からぬ佚事異聞の類を錄して一般世人に傳へ、その史的感興を誘ふにも努められた。

凡そ學者の本務が獨創的な研究に從ふに在ることは云ふまでもないが、一面深遠な專門的研究の成果を平易に傳へて廣く世に之を普及せしめることもその一半の任であらう。こ

のことは敢て學者の手を煩はさないでも濟むかのやうに思はれ勝ちであるが必しもさうではない。坊間に行はるゝ通俗の書に遺憾なものゝ少くないのは著者に根柢ある學殖のないのに依る場合が多いことを思ひ合はすと決して閑却出來ぬ問題であつて、そこに學者の出動が強く要望せられる理由がある。石原君は所謂筆まめな人であり、かゝる方面をも得意とせられる適材であつて、その發表せられたものゝうちにはこの意味に於いても珍重すべきものが少くない。本書に收むる諸篇は石原君としては專門的研究の餘瀝に過ぎず、著者自らは敢て重きをおかれぬ所かも知れないが、東洋史學の普及に便し、その興趣を喚起せしむるものとしては効少からぬものと考へる。

石原君は自序にも記された通り、昨秋臺北へ赴任の途に上らるゝに際し、戰時下途中不慮の變を思ひ、またいつ召命を拜して戰場に向はれるかも知れないことを期して、今までに書かれたものを集め、一二の書冊として之を世に留めんとする意を漏らされた。私はその決心を壯とし、その一冊の上梓を生活社に謀つて幸に快諾を得たが、石原君は豫て期せられたる如く、臺北への渡海を前にして急に召に應じて軍務に就くことゝなり、筆を劍に

代へて踴躍出動、今まさに遠く異域に在つてその任に精勵してをられる。その發程に臨み、君は本書の排印校正等の一切を擧げて私に託せられたが、私の同學にして同僚、且つ石原君と親交のある鮎澤信太郎君は更に私を助け、劇務の間、寸閑を偸んで私のなすべきことの殆ど全部を代行して本書を世に出すに努められた。これは著者も必ずやその勞を多とせらるゝことゝ思ふが、私も鮎澤君の友情に敬意を表すると共にその努力を深謝したい。些か石原君の紹介を兼ね、本書の特色とその成るの由來とを述べて序に代へることゝする。

昭和十九年中夏

石田幹之助

はしがき

本書に收むるものは首尾一貫した研究ではない。研究雜誌にのせた比較的短い研究や講演概要などを蒐錄したもので、もとより研究の名にそはないものがあるかも知れないが、學術的良心には背かぬやう書いたつもりである。本書上梓の直接の動機は、このたび揣らずも三十年の東京生活に一應きまりをつけて、臺北に赴任することになつたので、急に思ひたち、私がここ十年近くの學究生活のうちから、かたい論文以外の、いはば史的隨筆ともいふべき若干の史說を選んで一書とするに至つたのである。

私は東洋史の研究に專念するやうになつてから、支那中心の東洋史に慊らず、日本中心の東洋史といふものに特に心をひかれてゐたから、研究の對象も自然日本と東亞諸國との交涉に重點をおいてきた。むろん私は東亞各國、各地域自體の歷史を研究闡明することの根本的にして至要なことは、十二分に承知してゐるが、しかしわれわれ日本人としては、同時にまた日本中

心の東亞史としての東洋史觀を確立することも、重要な問題の一つであらう。この點は從來の西洋史についても言へることと思ふ。

しからば、如何なる方法により如何なる史實をとりあげて、日本中心の東亞史、乃至は日本中心の世界史を樹立すべきかが殘された問題となららう。本書は、もとよりこれに答ふるために書かれたものではないし、正直のところ私自身にもいまだ確信はない。ただ私はさういふ方向を、たえず見つめ求めてきたことだけは事實である。したがつて本書にのせた小論は、それが一見日本と無關係のやうな記述であつても、その背後には、つねに日本のことを顧慮して書いたつもりである。

さて本書の內容は、これを四部に分つ。

第一部「大東亞と日本」は、昭和十二年十二月以降、各種の雜誌によせた小論十四篇を蒐めたものであり、第二部「讀史覺書」は、昭和十二年七月以降、歷史學研究・史潮などによせた著書論文の紹介十二篇であるが、できるだけ動向風に記述したつもりである。第三部「研究餘

滴」は、昭和十一年六月以降、東京帝國大學の史學會、東京文理科大學の大塚史學會、および歴史學研究會において連年發表した講演概要十五篇であり、いはば私の學究生活の一面を物語るものである。第四部「史料點描」は、昭和十二年九月以降、すなはち私が主として歴史學研究會の幹事をしてゐたところ、編輯の都合で資料欄によせた小論八篇と、東京朝日新聞および東京日日新聞によせた小論四篇、計十二篇を收錄したものである。

以上大小五十三篇は、すべて發表の年月順にしたがつて配列し、いづれも篇末に發表雜誌・新聞などの年月・卷數號數を附記した。史料典據を明示しない考説については、その發表機の性質上、おほむねその煩をさけたためであり、前著「鄭成切」（三省堂）、および近く刊行すべき拙著「日本乞師の研究」（冨山房）などには、これらに關し史料的に詳說した論文もあるから、併せ參照せられんことを望む。

卷末の附錄「東亞史關係邦書目錄」は、目下刊行されつつある「國史辭典」（冨山房）の姉妹篇として、昭和十六年四月以來、羽田亨・和田淸兩博士監修のもとに「東洋史辭典」の編纂が着々進められてゐるが、私も選ばれて編纂員の職を汚し、項目蒐集に際して私の協力者市古

宙三學士が、その參考文献として作製した書目を基礎とし、これに筆を加へたものである。漢籍洋書論文を省略したのは、本書の性質上、あまり厖大かつ專門になるのを惧れたからである。なほ日本を中心にした東亞史關係の著書は、氣をつけて蒐錄したつもりであるが、なほ遺漏多きことと思ふ。

回想すれば、十一年前、意氣込んで入學した東大史學科ではあつたが、私の貧薄空虛な理想の歷史觀は、たちまち重厚精緻な現實の講義演習によつて粉碎せられ、あるひは圖書館の開館を行列に俟つて歷史哲學書を耽讀したり、あるひは晝の休みに隣りの一高（現帝大農學部）に出かけ、トラックの草の上に仰向けになつて、たどたどしい冥想を繰りかへしたりしたものである。かかる苦惱の際に「一に勉强、二に勉强、三に勉强」と諭された恩師和田清博士の御言葉は、いまも忘れることはできない。

大學も三年になり、苦しんでやうやく決めた卒業論文の題目は、日支交涉史のうち、はじめは大化改新ごろまでの古代を取扱ふつもりで、かうするのが研究の順序と考へてゐたが、和田

先生から「なるべく史料の多い、複雜なところをやる方がよからう。さうすれば史料の少いところは、後になつてずつと樂にできる」といふやうに諭され、結局、急に明清の間を研究することに變更したが、當時は正直のところ實に辛らかつた。しかし今になつて、先生の御言葉の有難さをしみじみ感じてゐる。

東京を去るに臨んで、もつとも心ひかるるは未完成の研究と純情の教へ子とである。

今憂及于君父、豈臣子安臥之時歟。

眞に苛烈悽愴、皇國の興廢を賭す大東亞の一大決戰下、本書の出版できる國恩に感謝し、恩師諸先生の學恩を偲びつつ、今後も一意、學究と教育の兩道に精進したき念願である。

昭和十八年九月

臺北赴任を前にし、法政大學教授室にて

石 原 道 博

〔附記〕本書の出版校正などについては、石田幹之助先生と日本大學助教授鮎澤信太郎氏の御高配を蒙つた。記して深謝の意を表する次第である。

目次

はしがき

第一部　大東亞と日本

支那漕運史研究の覺書……（一）
一　まへがき……（一）
二　漕運史の概觀……（三）
三　漕運關係の研究論文……（七）
四　あとがき……（三）
向陵朱舜水碑の筆者について……（二七）
鄭成功の江南攻略と滾江龍……（三三）

目次

一　朱成功の江南攻略……（三二）
二、定海・寧波攻略と滾江龍……（三三）
三　瓜州・江鎭攻略と滾江龍……（三五）
四　滾江龍の構造と効用……（三九）
五　餘　言……（四一）

海南島と鑑眞和上……（四四）

一　古くから日本と關係……（四四）
二　鑑眞和上の東征……（四六）
三　揚州の新河發船……（四八）
四　海南島漂流……（五四）
五　上陸と各地の巡錫……（五四）
六　歸船——あとがき……（五八）

忠臣藏の漢譯・歐譯本ついて……（六三）
一　まへがき……（六三）
二　假名手本忠臣藏以前……（六五）
三　假名手本忠臣藏以後……（六七）
四　忠臣藏の飜譯……（七一）
五　あとがき……（七三）
大東亞共榮圏と「倭寇」……（七六）
國姓爺合戰……（八一）
昭和十五年皇紀二千六百年の東洋史學界……（八七）
葦の髓から……（九二）
一　西曆二千年と日本……（九三）
二　支那稱呼の統一……（九四）

三　史學部の獨立……（九五）
日本刀歌……（九九）
大伴部博麻の尊皇愛國……（一〇一）
元寇をめぐる日支外交の一面……（一〇六）
大日本洲……（一一一）
支那文化の日本への影響……（一一四）
一　日本文化の逆輸入……（一一四）
二　宋文化の影響……（一一八）
三　元・明文化の影響……（一二五）
四　明清の鼎革と日本……（一三三）
五　清文化の影響……（一三五）
六　むすび……（一四〇）

第二部　讀史覺書

我が國における東亞史の概說書……（一四四）
有高巖博士の「概觀東洋通史」について
漢　籍　解　題……（一五一）
田中慶太郎氏の「羽陵餘蟫」について
西力東漸史の一齣……（一五五）
張天澤氏の Sino-Portuguese Trade について
清末日支外交史上の諸問題……（一六〇）
矢野仁一博士の「日支關係史上の若干の重要事實について」
清朝史の入門書……（一六七）
稻葉岩吉博士の「支那近世史講話」について

東西文化の交流に關する西洋人の二著書……………………(一七四)
ヒューズ氏「西洋文化の支那傳入」(Hughes, The Invation of China by the Western World) と勞弗爾博士「中國耶教藝術」(Laufer, Christian Art in China) とについて
日本人の南方發展……………………………………………(一八三)
岩生成一教授の「南洋日本町の研究」について
近代における日支文化關係…………………………………(一八八)
實藤惠秀氏の「日本文化の支那への影響」について
東洋を背景とした國史概說…………………………………(一九七)
志田不動麿氏の「東洋史上の日本」について
目錄の學は學中第一の緊要事なり…………………………(二〇三)
東方文化研究所の「東洋史研究文獻類目」について

明代における支那人の日本研究……（三一一）
渡邊三男氏譯註の「日本考」について

第三部　研究餘滴

明末清初の琉球請援……（三一六）
明末清初の南海請援……（三一八）
明末清初鄭氏の呂宋招諭……（三二〇）
鄭錦舍の名字に就いて……（三二三）
鄭成功の江南經略……（三二六）
張煌言の江南經略……（三三〇）
閩粤攻略の「倭寇」……（三三三）

日本船の南支漂流と海南島……（二三四）
明末遺王の復興運動……（二三六）
明末における支那人の日本觀……（二三八）
明末清初の海外請援について……（二四二）
明末に於けるる桂藩のイタリヤ遣使……（二四四）
明末清初の南方經營……（二四六）
元寇失敗の一面……（二四八）
清史稿日本志について……（二五〇）

第四部　史料點描

鐵人と象隊……（二五四）

督戰に就いて……(二五七)
日本國志と吾妻鏡補……(二六〇)
海南島攻略の「倭寇」……(二六四)
異稱日本傳の海外流傳……(二六七)
禦侮儲言に見えたる「倭寇」……(二七〇)
洗禮を受けた鄭芝龍……(二七三)
東瀛詩選と東瀛詩記……(二七五)
南海の「倭寇」……(二七八)
富士山の詩……(二八〇)
蘭人を驅逐した鄭成功……(二八二)
報時自鳴鐘……(二八四)

附録

東亞史關係邦書目錄……（二八五）

第一部　大東亞と日本

支那漕運史研究の覺書

一、まへがき
二、漕運史の概觀
三、漕運關係の研究論文
四、あとがき

一　まへがき

私は漕運については全く門外漢であるが、ある事情で外山軍治氏の「唐代の漕運」（「史林」第二十二卷第二號）と、星斌夫氏の「明初の漕運」（「史學雜誌」第四十八篇第五・六號）とに就いて紹介することになつたので、早々兩者を一讀してみたところ、唐と明とを論ずるには、その間に隆替興亡せる宋・元等の漕運についても是非理解する必要を感じたので、ここにその任に非ざるを

顧みず、兩論文の紹介を兼ねて、從來わが國に於て發表せられた漕運に關する若干の論文を檢索して、動向風のものを記してみたのである。それは或は「彰往察來」（「易經」繋辭傳下）といひ、或は「溫故知新」（「論語」巻一、爲政第二）といふ學究的努力こそは、たとへそれが如何に貧しかららうとも、われら協力の目的であり、連帶の責務であると平素より信ずる故であるが、忽々數日中にものしたる本稿の如きは、單なる筆者の覺書に過ぎないもので、大方の御指敎を願ふ次第である。

二　漕運史の概觀

研究論文の紹介に先立ち、まづ支那歷朝漕運の概略を一言してみよう。これには第一に「漕運」の意義を規定しておかなければならぬ。いま明代についてこれをいふならば「明史」に於ては卷七十九食貨三に漕運の條があり、卷八十六河渠四運河下に海運の條があつて、前者は專ら運河または自然河川による運輸のみをさしてゐるが（「萬曆會典」明の王圻「續文獻通考」も同じ）他方また明の朱健「古今治平略」（二種あり(1)三十三卷、崇禎十二年序(2)訂增、三十五卷、康熙三年序）卷八

の漕運篇（漕運略）、淸の谷應泰「明史紀事本末」卷二十四、河漕轉運等の條には、海運をも併叙してゐるから、後者の場合をとり「河運」と「海運」とを併せて廣く「漕運」と稱することとする。また租稅として米粟絹錢を一方的に地方より京師に運輸するといふ意味のみでなく、反對に京師より地方へそれらを輸送するといふ意味にも解することとする（例へば邊境の戍兵に供し、都市の商工に糶賣し、饑餓の窮民を賑恤するなど）。

さて支那に於て水路を利用し「汎舟以輸粟」「開渠以通糧道」といふことは、既に春秋時代より行はれたらしく、秦の始皇帝は海路による運糧法さへ用ひたが、「國都之漕、尙未講也」といふ狀態にあつた（明、丘濬「大學衍義補」卷三十三、漕輓之宜上）。然るに漢の高祖が天下を統一して都を長安に奠むるや、年々「漕轉關東（即ち河南・山東地方）粟、以給中都官」すること數十萬石、宣帝年間には約四百萬石に上り（「前漢書」卷二十四上、食貨志）、「漕運」の名もこの頃から用ひられたやうである。後漢を經て魏晉南北朝時代になると、所謂江南の地方が大いに開發せられ、主要なる米粟供給地として關東に替り、世に「蘇常（或は蘇湖・蘇松・東南）熟、天下足」（南宋、陸游「渭南文集」「四部叢刊集部」卷二〇・同、范成大「吳郡志」卷五〇等）といはれる基を確立したのであるが

これは支那史上の劃期的一大變化であつたから、これらの事情並びに南支北支の比較等の問題については、わが國に於ても注目せられ、大正三年に桑原隲藏博士が「晉室の南渡と南方の開發」（「藝文」第五年第十號）を始めとして、同八年にも「歴史上より觀たる南支那の開發」（「雄辯」第十卷第五號）を發表せられ（兩論文は昭和二年刊行の「東洋史說苑」にも收錄）、同十二年には中山久四郎博士が「南支北支の歴史及び地理的考察」（「中央史壇」第七卷第五號）、翌々十四年には桑原博士が再び「歴史上より觀たる南北支那」（「白鳥博士還曆記念東洋史論叢」所載、なほ同博士「東洋文明史論叢」にも收錄されてゐるが、民國でも楊筠如氏が節錄翻譯して「由歴史上觀察的中國南北文化」と題し、「地理雜誌」第四卷第三期に揭載してゐる）の力篇を公にせられ、そののち昭和三年にも淺野利三郎氏が「歴史地理的に見たる支那の南北」（「歴史地理」第五十二卷第三號）なる一文をものされてゐるほどである。

さて南北兩朝を統合した隋が、まづ當面した大問題の一つは、この江南地方の米粟運漕策の大變革であり、江南と黃河河畔の京師とを連絡せしめた山陽瀆・通濟渠・永濟渠・江南河等の開鑿は（「隋書」卷一高祖上、同卷三煬帝上等）當時の百姓を塗炭の苦しみに陷れたとはいへ、かかる問[題]

の解決策であつたから、やがて居になり、初めは二十萬石程度で事足りた京師の漕米が、玄宗朝以後、諸經費の膨脹とともに頓に增大しても、裴耀卿・劉晏等によつて江淮より每年一、二百萬石の漕米を得（「新唐書」卷五十三、食貨志第四十三）、また北宋になつても四百萬石、最盛期の眞宗朝には七、八百萬石に上る米粟を運漕しえたのである。（「宋史」卷百七十五、食貨上三漕運）。元は京師を黃河河畔より大都燕京に遷し、河海陸運によつて輸漕したが、世祖の至元十九年に海運を始め、同二十六年に會通河を開鑿して河南と京師とを結んだが、遂に海運を「一代之良法」と定めて每年三百乃至三百五十萬石を北運した（「元史」卷九十三、食貨志一海運・同卷六十四、河渠志會通河等）。明代の漕運は元代の後をうけて初め海運を用ひたがのち改めて江淮より北京に至る一大運河を確立して河運に成功し、連年四百萬石前後を漕運してこれを淸朝に傳へた。而して淸朝はその中期以後、諸種の事情で北京に於ける米粟の需要が減少し、每年一、二百萬石を出でず、而も多く銀納に變り、また、外國との通商が開け汽船輸送の盛なるに隨つて海運大いに興り、河運は漸次顧みられなくなつたのである（「大淸會典事例」卷一九四―二一三、「光緖東華錄」卷一六九、J. Edkins, The Revenue & Taxation of the Chinese Empire. Shanghai, 1903 等）。

以上の記述により漕運の變遷を要約すれば、京師と主要供給地との關係は、黃河河畔の京師が關東及び江淮の粟を求めた時代と、北京のそれが江淮の粟を求めた時代とに分ちうべく、その運法は河運—海運—河運—海運となるべく、その轉換期に立つた王朝はそれぞれ隋・元・明・淸といふことが出來よう。蓋し江淮の豐凶は支那全國の食料問題と緊密な關係があり、その米粟漕運の可不可は政治、社會、經濟の各方面と重大な關聯をもち、歷朝國家の命脈に直接影響を及ぼす大問題であつたのである。然らばかくの如き漕運に關する硏究は從來わが國に於て如何やうになされて來たか。これがわれらの次の問題である。

三　漕運關係の硏究論文

便宜上、歷朝の年代順に述べるのを避けて、おほむね硏究論文の發表せられた年次に從つて概觀して行くこととする。但し「まへがき」に引用した外山・星兩氏の論文はやや詳しく紹介するつもりである。

筆者の寡見では、わが明治時代に支那漕運の問題を最初にとり上げたのは淸代の漕運らしく、

明治二十一年に井上陳政氏の「禹域通纂」上下二卷が大藏省より刊行せられ、卷上漕政の條（五百九十六―六百十二丁）に於て「各省徵收漕糧定額」近年北京運漕額等について述べられた。のち明治の末より臨時臺灣舊慣調査會第一部報告として「淸國行政法」が發刊せられ、明治四十四年の第五卷（三〇八頁以下）、大正二年の第六卷（三一八頁以下）、翌三年の第一卷上（二五九頁以下）等にも漕運に關する記述がなされたが、これを專門的に論ぜられたのは有高巖博士の「元代の海運と大元海運記」（「東洋學報」第七卷第三號）ではないかと思ふ。博士は大正六年の「鄭和の南海經略」（「歷史と地理」第一卷第二・四・五號）等によつて知らるる如く、最初に明初の南海交通の硏究に從事してをられたが、次に元代の海運に溯り、同年右の論文を發表せられ、既に大正三年「藝文」第五年第十一號及び同八年「東洋時報」二一四號等に陳べられた意見を援用されつつ、丞相伯顏及び海賊朱淸・張瑄及び羅璧等の海運の事情をのべ、淸の胡敬が「永樂大典」の殘本より抄出した「大元海運記」（國學叢刊卷三・四）上下二卷の紹介批評をなし、河運海運の是非論に論及された。なほ海運については、同十四年の藤田元春氏の論稿「元明の海運について」（「歷史と地理」第十五卷第一號）が擧げられる。

さて支那內地南北水路交通は、海運にもまして重要視されるものであるが、この水路舟運の交通については、同九年に中山博士が「廣東の商胡及び廣東長安を連絡する水路舟運の交通」（「東洋學報」第十卷第二號）のうちに、長安―渭水―黃河（及び洛水）―汴水―泗水―淮水の運河―揚子江―洞庭湖―湘水―灕水―桂江―西江―珠江（又は粤江）―廣東に至る交通路について述べられ、同十四年十二月には前節にも引用した如く、桑原博士が「歷史上より觀たる南北支那」を發表され、同三年・八年にものされた二論文をも綜合統一され、このうちに支那歷朝の漕運に關しても論じてをられる（「白鳥博士還曆記念東洋史論叢」四〇七―四一〇頁及び註（63）以下參照）。同十五年には藤田元春氏が「支那大運河の地理的考察」（「史林」第十一卷第三號）に於て、古代の河渠、大運河通漕の事情及び會通河・黃河の難、制閘過壩の必要なること、從つて漕運にも巨費を要し糧米の耗消する理由等について述べられた。昭和三年に西山榮久氏は同じくこの問題に關し「支那大運河の古今の異同に就いて」（「地理敎育」第七卷第六號、第八卷第一・二號）と題し、隋唐宋金元明淸の歷朝に亙る運河漕運について概說され、翌四年には同じく運河に關し、岡崎文夫博士が「江淮運河小記」（「支那學」第五卷第一號）を公にされたが、これは主として「史記」河渠書と「漢書」溝洫

志との禹の治水の記事の解釋を中心として取扱はれたものであつた。さて、昭和三年には淸水泰次教授が「明代の漕運」（「史學雜誌」第三十九編第三號）を發表されて、漕運の內容も次第に明かにされてきた。教授はまづ明代の北京・遼東漕運を分つて（一）洪武年間の海運期（二）永樂元年以後の海運陸運併用期（三）永樂十三年以後の海運期の三期となし、（三）の河運期を更に（1）洪熙元年以後の支運（2）宣德六年以後の兌運支運併用（3）成化七年以後の改兌の三期に分つて、各期に於ける創始年代の考定及び民運より漸次官運に遷りゆく狀勢を究明された。尋いで同六年には靑山定雄氏の「唐宋汴河考」（「東方學報」京東第二册）が公にされたが、これは隋唐宋各時代に於ける汴河の位置等に關する精密な考說で、大村欣一氏の「支那運河の硏究」（「東亞攷究會々報」第四號）等の說をも批判し、また運河の構造についても論及されたもので、直接漕運のことには觸れてをられぬが、唐宋時代の漕運に關する硏究の一の基礎ともなるものであつた。かくて翌々八年には同氏の二論文が前後して發表された。即ち一は八月の「北宋の漕運法に就いて」（「市村博士古稀記念東洋史論叢」）であり、他は翌九月の「唐宋時代の轉運使及び發運使に就いて」（「史學雜誌」第四十四編第九號）である。前者は朱慶永氏により「論北宋漕運法」と題して飜譯せられ「淸華週刊」

第四十一卷第十期に掲載されてゐるが、汴河による南方漕運を述べられたもので(一)地方京師間に倉庫を設けて各地の漕物を納め、更に別船をもつて京師(北宋は汴京)に運する「轉般法」の施行狀況と採用の理由、(二)この轉般法が如何なる遠因近因によつて廢止され、これに代るに地方京師間を直送する「直達法」に變化したかを述べ、轉般・直達兩法の得失批判を以て結ばれたものである。因みに轉般法は宋初より徽宗の崇寧年間に及ぶ殆んど北宋一代を通じて施行せられ直達法は仁宗神宗の交より崇寧以後全般的に施行せられてゐる。次に後者は友莊氏により「唐宋時代的轉運使及發運使」と題して同じく飜譯せられ「淸華週刊」第四十二卷第一期に掲載されてゐるが、これは唐代專ら南方の漕運を管掌し、のち變化して宋代では最高の地方行政區劃たる路の漕運財賦その他一切の民政を統轄する地方長官となつた「轉運使」と、唐末に起源を有し轉運使に代つて南方漕運の專官となつた「發運使」とについて、その沿革並びに關係を考察されたものである。ついで翌九年には濱口重國氏の「唐の玄宗朝に於ける江淮上供米と地稅との關係」(「史學雜誌」第四十五篇第一・二號)が發表され、開元・天寶の頃、江淮の上供米が如何なる財源に出でたかを考察して、これが本來上供すべき租粟に非ずして變則の地稅が大部分であつたことを

指摘し、その理由は節度使と群牧使とに對して毎年巨額の物資を國庫收入のうちから支給せねばならなかつたため、その増收の一方法であつたことを述べられた。

以上の諸論文により唐宋元明時代の漕運の事情は大略明かにされたのであるが、今年四月に京都の「史林」に外山氏が、五・六月に東京の「史學雜誌」に星氏が、東西相前後して力作を發表されたことは喜ばしい對照であり、これによつて唐明兩代の漕運の事情が一層明確になつてきた。兩者は未だ紹介されてゐないと思ふので、前掲諸論文よりやや詳しく述べてみたいと思ふ。

まづ外山氏の「唐代の漕運」よりはじめる。全文四十一頁「序言」に於ては唐朝が特に國都長安に於ける食糧問題に惱まされ、漕運の可不可が官民に重大な影響のあることを述べて唐代漕運の重大性を指摘し、第一章「漕運事業發達の由來」に於ては、漕米の重要視されるに至つたのは玄宗朝からで、これは「國勢の隆興につれて官吏の數が劇増し、之に要する食祿、其他の物資が夥しい額に上つた」ことと、「唐初行はれてゐた府兵制度が崩解して兵隊が次第に傭兵化し、その兵糧を官給しなければならなかつた」(二六九頁)こととのために國用が増大した點にあると述べ(「史學雜誌」第四十一編、第十一號、濱口重國氏「府兵制度より新兵制へ」參照)、以下かかる漕運制度

確立の要望に應じて出でその才腕を振うた二人物として、第二章に玄宗の開元時代に活躍した裴耀卿、第三章に代宗徳宗の治世に活動し、後世までも漕運の大家として賞讃された劉晏の漕運法を主眼として論述されてゐる。即ち第二章「裴耀卿前後の漕運」に於ては、更に四節に分ち、第一節「裴耀卿以前の漕運」に於ては「新唐書」「通典」所載の彼の上奏文等を引用して(イ)汴淮より洛陽までの漕運(水運、民運・長運・長綱・直達法)と(ロ)洛陽より長安までの漕運(陸運―洛陽陝州間、水運―陝州長安間、何れも官運)との狀況を明かにする。第二節「裴耀卿の漕法」に於ては、開元二十二年に實施した改革について述べ、即ち前節(イ)の民運は河口(汴河が黃河より分流する地點)までに短縮して後を官運とし、洛陽に送るべきは黃河乃至洛水、長安に輸すべきは黃河を溯り、(ロ)洛陝間の陸運を廢して、僅に三門底柱の險のみ北山を十八里開鑿し東西に二倉を設けて陸運とし、他は從前通り水運とした(北運・轉般法)。この結果、水運に於ては遲延損害を輕減し、北運に於ては陸運の冗費を省きえて、人民の負擔は別としても政府には相當の增收となつたこと、及びその漕船を利用して損傷し易い義倉米を轉輸するのに成功したことを述べらる。第三節「裴耀卿以後の漕運」に於ては、北運々法も三年の壽命で開元二十五年には廢止

され崔希逸はもとの長運を實行したらしく、韋堅は天寶二年に長安より渭水の南側に漕渠を作り尹裴迥は洛陜陸運をやめて黄河河畔に多くの宿場を設け水運で遞送した事情を示される。第四節には「江淮の民の負擔」として、租米納入及び義倉米轉輸に於ける運費の自辨、耗米損缺の際の賠償等を擧げ、更にこれを口實として搾取の行はれたらしいこと、從つて次第に損缺補塡能力の乏い豪農富戸が運米に當るやうになつた事情に言及されてゐる。次に第三章「劉晏及びその後の漕運」に於ては、ほぼ前章と同樣の趣旨の下に五節に分ち、第一節「安史の亂と漕運」に於ては、安史の亂が漕運系統を混亂せしめ、汴河を用ひず、江・漢―梁・洋（陜西南鄭・洋縣）の運道を用ひたが能率上らず、加ふるに代宗の初には吐蕃・回鶻の侵寇あり、軍糧も增大したため關中は極度に窮乏し、他方節度使の跋扈によつて貢錢入らず一層困却した事情をのべ、第二節「劉晏の漕法改革」に於ては彼が二十餘年鹽鐵運使として、廣德二年に汴河を疏浚して汴河による漕運を復舊し、韋堅の法を改め、始めて官船を以て漕運に充て、鹽は官般官賣の方針を以てこれより得たる利益を漕運に當て從前より著しく大規模で統制的な官運をはじめたことを述べ、次に漕米高に關して「新舊唐書」「資治通鑑」「唐會要」「陸宣公翰苑集」等の記事を批判して「劉晏の當時

も百十萬石を河陰に運び、その半ば以上を河陰倉・太原倉に留め、その餘の四十萬石を關中に送つた」（二九〇頁）とされる。ついで「自是關中、雖水旱物不翔貴矣」といふ成功の所以を檢討すべく、第三節「劉晏の漕法批判」に論をすすめ、鹽利の一部を漕運事業に充當して斷然官業としたこと、轉般法を採用し、鹽利を融通充當してなされた諸種の施設と相俟つて完全な機能を發揮し得たことをのべ、この漕運施設として(一)運船の造營・漕夫の養成(二)武夫の部送と綱の組織及び巡院の列置(三)運夫の官傭をあげ、また荷造りを函詰から囊入りにしたこと、北宋時代の如く漕船を米鹽兩用に供したであらうと推定され、官營を强行した理由については「外族の侵寇による軍備の擴張、藩鎭の跋扈による貢賦の減少等に苦んだ唐室が、江淮の漕運に倚賴すること從前に比して益〻切なるものがあり、運米を得るに最も確實な方法を望んだが爲めに外ならぬ。しかしかかる事業は劉晏の如き手腕家の出現を俟つて始めて順調に行くのである」（二九八・二九九頁）と述べられる。次に第四節「劉晏以後の漕運」に於ては、後の轉運使は何れも彼の遺法を繼承したが、藩鎭の跋扈は關中の運米をいよいよ難澁ならしめ、叛軍討伐軍に給糧する必要上、江淮より直接駐屯地に漕米したことをのべ、僖宗の光啓年間には中央の命に服するは僅か數道にす

ぎず江淮漕運は全く杜絶するに至つたので、唐室は中央に好意を有する節度使に發運使なる官職を與へて貢奉を促したが、その復舊をみずして唐の世の終ることを明かにされる。第五節「江淮の民の負擔」に於ては、裴耀卿時代と比較考察し、劉晏時代の方がやや輕減されたらしいこと等をのべ、最後の「結語」に於ては、唐が長安に都したのは軍事的理由で經濟的理由ではなかつたから、祿廩、兵食支給の劇增、消費者階級の集中等のために、物資の得易い地方に遷都しない限り、如何に制度を改革しても根本的な解決がつくものではなく、まして、國威不振、地方分裂等の形勢に於ては國家の命脈に關することとなる。これ唐以後の王朝一として關中に都するもののなくなつた主な原因であると結ばれてゐる。（「史林」第二十一卷第一號、宮崎市定氏「讀史劄記」五代の國都參照）。

次に星氏の「明初の漕運について」に移らう。これは二號に亙る全文百一頁の長篇。前文に倣ひ章節を追うて紹介してゆくこととする。まづ著者は「序言」に於てその意圖を要約し「江淮に於て徵收される稅糧が（一）如何なる方法で（二）如何なる人によつて（三）如何なる狀態で北運されたかを、明初洪武より宣德に亙る約六十年間に於て究めようとするものである」（五六〇頁）とな

し、さきに清水教授が採られたとほぼ同様の形式で叙述をすすめられる。第一章「海運期」に於ては三節に分ち、第一節「海運への發展」に於ては、初め洪武帝は金陵に都したから、京師への運糧狀態はその地理的關係より比較的容易に主として水路による民運であつたらしく、その運道は大體揚子江・浙江・淮河・黄河等によつたが、「洪武年間に於ける漕運の意義は、實に北元勢力の覆滅策に隨伴する軍餉の運般に存し」(五六六頁)、その運道は汴梁(開封)—衞河と、元の會通河を利用するものとあり、他方、湯和をして明州(浙江明縣)に於て海舟を造らしめ、海路直沽(天津附近)に運輸せしめんとしたことは、遼東海運への發展が窺はれ、これは遼東經略の敢行せられるにつれて洪武四年より實行され、元一代の良法を踏襲して、江蘇太倉の港劉家港より山東の突端、登州、牛家庄(遼河河口)の運道が用ひられたことを示さる。第二節「海運狀況とその當事者」に於ては、當事者は衞所軍士で、海賊や浮浪の徒等に海上訓練を施したこと、軍士の報酬は宋代より優遇されたらしく、月糧と行糧とのあつたこと、次に船、積載量、乘組員數をのべ、海運の艱苦については、覆溺、倭寇の危險のほか、遼東到着後も集團的勞働力が用ひられたことを擧げる。第三節「海運と屯田」に於ては、かく遼東海運には種々の缺陷があつたので、その需

要を現地に於て供給することが最善であり、ここに屯田が始められたが、これは太祖の溺沒者に對する憐憫の情及び潭沒による莫大な損害、また數千の船を動員する運糧費の浩繁を節減する意味もあるが、早くより給餉策として屯田に注目してゐた結果である。然し海運は吳適・陳權の督運後、張赫・朱壽等によつて連年六・七十萬石に增漕されたが、これは一つには屯田の機能を十分發揮してゐない結果であつたから、軍事行動が一段落を告げると、屯田による軍餉供給の恒久策を確立して大いに成功し、全軍餉を賄ふに足り、海運はその使命を全うして洪武三十年に廢止される事情に及ばる。因みにこの問題に關しては淸水教授の「明代の遼東經營」(「東亞」第八卷第一號、昭和十年)があり、このほか明代の屯田・軍屯・軍餉問題等については同教授に「明代の屯田」(「東亞經濟硏究」第四卷第三號、大正九年)、「明代の軍屯」(同上第八卷第二號、大正十三年)、「明代に於ける軍屯の展開とその組織」(「史學雜誌」第四十四編第五・六號、昭和八年)、「明末の軍餉」(「市村博士古稀記念東洋史論叢」、昭和八年)等の論稿のあることを申添へておく。次に第二章「海運より河運へ」に於ては二節に分ち、第一節「海陸兼運」に於ては、永樂帝は故地北平を國策遂行の中心地となし、衰退した自國の勢力挽回に乘り出したので、百官の費用、軍餉の需要は頓に

増大して、その北運は緊急不可缺となり、洪武の海運に從つて北運したが、遼東屯田の發達により初めの數年にして廢されたらしく、北京漕運は連年百萬石を輸送した。但し洪武の遼東海運がただ京師より地方（遼東）への出糧に過ぎないのに反し、永樂の北京海運は、事實上の京師たる北京への運糧で、言はば國家經濟の大動脈であつたからこれではなほ不十分で、別に河運の活用が考慮されてくる。卽ち江淮と北京とを連絡せしむる運道として淮河・沙河・黃河・衞河の自然河川が利用され、また河南・山東地方よりも運糧された。次にこれらの包藏する缺陷として、海運には風濤の險、倭寇の患があり、陸運には道順の甚しい迂回、途中數種の船を使ひ分けて積み代へる煩瑣、從つて運道運費の厖大等があげられる。第二節「會通河の開浚とその後」に於てはこの不備を除くものとして、洪武二十四年に淤塞じた元代の會通河を永樂九年に開浚して、北は臨濟に於て衞河に達し、南は濟寧を經て淮河に通ずるに至り、ここに南北一道の完成を見、明一代の良道となつた事情を述べ、終りに河運に用ひられた「淺船」、乘組員數等に言及されてゐる。第三章「河運期」に於ては、まづ河運を定義して廣義の漕運に含め、狹義に使用した「明史」食貨志の漕運と同意義とし、以下これを二節に分ち、更に各を二項に分けて運法の三變について順

次のべらる。第一節「支運期」の第一項「支運の方法」に於ては「正德會典」「續文獻通考」「明史」等の記事を比較し、支運の法を始めるに當つて水次倉の設立地が目まぐるしく變更されたことを示し、次に運糧者については、淸水敎授が「正德會典」の記事により通州までは民運で、ことより官運となり、これを支運（軍民分擔）の最初の形態とされるのに對し、「萬曆會典」「憲章錄」「學菴類稿」等により、「軍民接運地點は、支運施行の當初から、通州のみでは無く運道筋の諸水次倉所在地であつたらう」（七二八頁）とされ、また支運は永樂十三年に始められたが、時恰も非常時局に直面してゐたので忽ち混亂に陷り、幾くもなく復活した民運の補助運法に過ぎぬ觀を呈した事情を指摘された。第二項「民運狀況とその當事者」に於ては、洪武年間、金陵を中心に行はれた民運の直接運務に從つた糧長が、永樂年間もその職務に服したこと、また民の經濟負擔は、依然運費耗米の自辨があり、運般途上の艱苦にも變りがなかつたから、陳瑄の如きは北京江南往復に一年以上を費すのは、民の農業に勵みえないこととなり、國家存立の基礎を脅かすものとしてその弊害を除かんとする意向を示した結果、宣德四・五年には淮安・徐州・臨淸・德州等の地に於て支運されるやうになつた事情を述べらる。第二節「兌支併用期」に於ては、第一項

「兌運の方法」に、淸水教授が兌運及び改兌の方法を解釋された過程を批判して「明史」漕運志の誤謬を指摘し「同志は、宣德六年兌運施行當初の形態として、數年後に變化して浙江・蘇・松等の民に對して行はれた瓜・淮に於ける特殊形態の兌運を、その地方が江南に於ても漕運糧額は首位を占めてゐたので、これを重視するのあまり、この形態を以つて江南一般の地方に及ぼすもののやうに感ぜしむる如く記載したのである」（七四八・七四九頁）とされた。次に兌運施行の理由については、宣德に至つて漸く政治的安定期に入り、國力の發展に伴ふ國費の增大が眞因で、これにからむ民運の農民生活に及ぼす影響が副因であり、兌運は要するに附近衞所官軍への直運（直達法）で、最初江南に行はれたが、漸次江北にも及び軍民何れも便宜とした運法であつたと述べらる。第二項軍運狀況とその當事者に於ては、兌運には衞所軍士が從事し、衞所內にあつて職掌的に獨立してをり、宣德七年には十六萬人にも達した。その待遇は海運軍士と同樣に月糧行糧があつたが比較的惠まれず、海運の如き溺沒の憂ひは薄くなつたとはいへ、その艱苦には變りがなかつた。他方彼等は國家權力の保護を濫用して、一般民衆に對し動もすれば例へば不當徵收の如き橫暴を敢てした。次に宣德に初つた所謂兌支倂用が、兌運の合理的な特徵を發揮するに及

んで次第に支運を壓倒し、成化年間に所謂「改兌」となつた事情をのべ、兌運も改兌も民運を含まず全然軍運である點に於て差違なきこと、從つて改兌は兌運の一變型で「長運」の稱呼も兩者の統一的名稱であり、兌運が大部分を占めてゐたので長運は兌運の名に代へられることも多く、而してこの運法が支那漕運史上、明朝の劃期的業績として今後明一代の漕運法として用ひられたと述べ、最後の「結言」に於ては、上述せる漕運の沿革を要領よく纏めてをられる。

以上縷說紹介した外山・星兩氏の論文により、從來の漕運史研究の上に新しい力が加はつたのであるが、筆者の臆測を以てすれば、外山氏は青山・濱口兩學士の論文、星氏は清水敎授の論文等により示唆されることが多かつたらうと考へる。蓋し研究の成果が逐次正確精密になることは學究の自然の道ではあらうが、事の成るはその成るの日に成るに非ず、僅かながらも學究の道がいかに荊棘の道であるかを味ひ知る筆者には、そのかみ未開の荒野に敢然鋤を入れられた幾多の先輩諸先生の遺德を忘れることは出來ない。

四　あとがき

如上の記載は單に論文の羅列に過ぎず、或は言ふべくして看過省略した點や、或は意あつて言足らず正鵠を失した點も多々あつたであらうが、至らざる點は凡て未熟な筆者の罪である。然しこれらの研究を回顧することによつて多少なりとも、わが國に於ける漕運研究の現狀と將來の展望とに資するところがあれば望外の幸である。

蓋し支那に於ては前引の如く諸種の研究文献があり、德宗の光緒二年には載齡等の奉旨纂修せる「欽定漕運全書」九十六卷などもあるといふが、わが國に於てはこれに匹敵するやうな著作はないやうである。我が國に於ては運道運法等に關する研究は比較的詳細なやうであるが、それでもいま研究の範圍を時代別に眺めると、概して唐以前の古代と明以後の近世とに不十分な點があるやうであり、中世に於ても五代・金時代が缺けてをり、またこれら歷朝に於ける各國の分裂對立時代、乃至は漢民族對異民族關係等より觀たる漕運の變遷、或は商工百姓に及ぼす影響等、單に漕運自體の究明に止らず、これを政治、經濟、社會、交通、對外關係等と關聯して考察するときは、一部を除き未だ十分とはいへぬであらう。廣義の漕運に於ける東洋諸國間の比較研究なども緒に就いてゐないと思ふ。

また汽船・鐵道の頓に發達を遂げた今日に於ては、或は明の神宗萬曆初年に於ける黃濬や、憲宗成化末年に於ける丘濬等の河運海運の是非論の如きも（「圖書編」卷五十三・卷五六、「大學衍義補」第三十四）、或はわが國に於て寛文年間に河村瑞軒が奥羽の米を江戸に運漕するのに、支那に於けると同樣「河漕陸運備極艱辛、勞費最多而漕利未廣」（「新井白石全集」第三、「奥羽海運記」五九三頁）との理由で、奥船が奥州―下總銚子―利根河―行德―江都の東海道を用ひずして房總の沖を廻り羽船が羽州―越前敦賀―江州鹽津梅津―琵琶湖―大津の北海道を行かずして北陸山陰山陽南海を迂回したが、海運はこれまた「雲氣風候一失占視、覆沒隨之、人穀俱沒。或雖船僅存、穀已投弃其所亡固多矣」（同上）といふやうな事實も、一場の昔語りとなつたとはいへ、民運官運等の問題は、いまなほ民營と官營、自由と統制等の問題と關聯して、政治上、經濟上、社會上、敎育上の重要な問題として提示されるであらう。

更に繙つて支那に於ける北平、寧波間を連ぬる南北の一大水路、卽ち北平―通州（四〇支里、以下同じ）―天津（三〇〇）―臨淸（九〇六）―南旺湖（二五〇）―淸江浦（七〇〇）―揚州（三三六）―瓜州（四五）―杭州（四五〇）―寧波（四〇〇）の交通路は、これと交はる江河の二長流を始めとし

て、無數の大小河川湖沼と互に相聯絡してゐるから、或は鐵道の敷設により、或は汽船の發達により、或は河道の淤塞等によつて、その國家的利用價値は往昔の比ならずとも、現今なほ盛に利用せられてをり、これを近世的に利用しうべき天然的要素にも富んでゐるから、これら河運網の適當なる改修活用こそは、支那の開發、就中いまや戰雲深き黄河平原の農耕開發のためにも重視すべき點であらう（西山榮久氏「支那大運河の古今の異同に就いて」參照）。

昨日の是も今日の非となるかも量り難い。そこには熾烈な議論も鬪はされようし峻厲な反駁も交されようが、これも畢竟、眞理を希求して已まざる熱情の迸りに過ぎず、かくしてわれらは貧しいながらも一歩々々眞理に近づくことができるのであらう。而してこの眞理の花こそは、古今東西、貴賤貧富を問はず、萬人の前に共通公平に惜しみなく咲いてをり、これを摘みとると否とは各人の全き自由のうちにある。而して苟くもかけがへなきこの一生を賭して眞理を追究せんとするものにとつては、純粹と徹底とが否應なしに强要される。これは正しく覆沒か否かの大困難に相違ないが、少くとも我ら學に志すものに最も緊要なことは、たとへそのうちに生硬未熟の雜草が生えてゐようとも、眞理の追究に對して常に謙遜に、而も倦まず斷えざる眞摯の熱情と意氣

との萠芽を、枯さぬやう育て上げる點にあるのではなからうか。一言蕪雜な所感を附加へて結びに代へる次第である。

（昭和十二年十二月・歴史學研究七ノ十二）

向陵朱舜水碑の筆者について

一

私はさきに一高同窓會報第三十五號（昭和十二年十一月）において「朱舜水と向陵」なる一文を草し、朱舜水傳の研究、朱舜水と向陵、朱舜水碑と向陵碑と楠公碑等について卑見をのべたのであるが、その際も附記しておいたやうに、前稿については揣らずも諸先生の御配慮御教示を賜はつた。竹田復先生のお話によれば、本稿の題目とした向陵朱舜水碑の筆者について私がさきに不明としてゐたのが、拙文に對する種々なる御教示の端緒となつたとのことであり、私が不明としてゐた朱舜水碑の筆者は、多分、靑山鹽谷時敏先生であらうとされた（「朱舜水と向陵」九頁下・十一頁下參看）。因みに向陵の朱舜水碑とは、いふまでもなく明治四十五年六月二日、舜水の日本渡來二百五十年を記念するために、朱舜水記念會によつて、その終焉の地なる現帝大農學部（舊一高）構内に建てられてゐる「朱舜水先生終焉之地」なる碑をさすこと勿論である。

二

ところが昨年（昭和十二年）の暮、拙文を讀まれた先輩篠塚春世氏（大正二年一部丙卒）より十二月二十二日附で左の如き書信をいただき、果然朱舜水碑の筆者は鹽谷青山先生ではなく、前田侯爵家の家職石川龍三氏であつたことが判明したのである。

（上略）一高同窓會會報第三十五號所載の貴稿「朱舜水と向陵」の一文は丁度小生在學當時に建碑のことがあつた關係上、興味を以て拜見したのですが、あの中に朱舜水碑の筆者を鹽谷青山先生であるとしておいでですが、……小生の記憶ではあの碑の筆者は鹽谷先生ではなくて前田侯爵家の家職石川龍三氏だつたと覺えて居ります。小生鹽谷青山先生には特別に可愛がつて戴き、よく御宅へ伺つたものですが、あの當時先生が小生に向つて、石川氏のあの揮毫が大變名筆であるのを稱揚されたのを承つたことがあります。またその青山先生の御言葉を石川氏に御傳へした記憶があります。石川氏は石川縣出身の方で隱れたる名筆家であり、時に無刀流の劍をよくせられ、當時小生は緣あつて此の劍の上で石川氏の教を受けて居たのです。青山先生

も石川氏とは劍の上の御交際がありました。（下略）

三

私は一面識もない篠塚先輩よりかくも細々と御教示をえたことに對して深謝すると同時に、早速前田侯爵家に石川氏在職の有無を問合せたが、氏はすでに職を退かれて金澤に悠々自適されてをることが判明した。そこで私はこんどは石川氏に、篠塚氏よりの右の事情を報告して御感想を伺つてみたところ、新春（昭和十三年）一月十八日附を以て左の如き書面に接し、朱舜水碑の筆者は石川氏に相違なき確證をえたると同時にあるひは不問のまま葬りさられるかも知れなかつたこの間の事情をいろいろと承ることができたのであつた。

（上略）陳ば朱舜水先生の石碑に付御尋を蒙、轉思出深き事に御座候。同鄕人にて今は故人となりし中川忠順氏より（文學士にて國寶調査委員、帝大の繪畫史かの講座をなせし人）右石碑を德川慶喜公の御代筆にて篆文を以て書く樣と依囑相成候得共、小生は拙劣に候故辭退候へとも兎も角も書く樣との事に候故、即篆書に書候處、御代筆の事は取止、更に楷書に改め、且

題名不致事に相成、現在の通書候事に相違無之御座候。（下略）

四

四月十七日は復活祭の日曜であり、たまたま舊暦にて朱舜水の忌日（天和二年・一六八二、年八十三。陽暦に換算すると五月廿四日に當る）に相當するので、私は新綠濃き舊向陵に再び朱舜水碑を訪れた。碑前に立つて靜かに眼をあぐれば、すでに石川氏の筆蹟を書信において知悉せる私にとつては、一目ただちに氏の筆なること一點の疑ふ餘地もない。雄健端正なる「朱舜水先生終焉之地」の九文字は、あたかも當時を語り顔に碑面に躍つてゐるではないか。碑陰の「明治四十五年六月二日建之　朱舜水記念會」の十八字ももとより氏の筆である。

顧みれば、かつて心の赴くままに草したる渺たる拙文が、揣らずも先輩諸先生の御教示によつて光を添へられ、かつ種々の未知なる事情が闡明されたことは感謝のほかなく、私の喜びこれに過ぐるものはない。

ここに右の報告を結ぶにあたり、篠塚氏、石川氏に對して深甚の謝意を表するとともに、本稿

においても種々御高配を賜はつた竹田先生に深謝する次第である。

（昭和十三年六月・一高同窓會々報三七）

朱成功の江南攻略と滾江龍

一、朱成功の江南攻略
二、定海寧波攻略と滾江龍
三、瓜洲鎮江攻略と滾江龍
四、滾江龍の構造と效用
五、餘　言

一　朱成功の江南攻略

國姓爺として有名な朱成功が明淸鼎革の際、福建の廈門を根據としてこれを思明州と改め、神宗萬曆帝の孫明王由榔の正朔を奉じて累次に及ぶ淸の招諭にも應ぜず、毅然として明室恢復に盡瘁したことは殘明掉尾の活躍として異彩を放つてゐる。殊に永曆十二、三年すなはち淸の世祖順治十五、六年における朱成功の長江打入りは乾坤一擲の大決心のもとに敢行されたもので、前年は羊山（卽ち洋山）の覆沒により その出鼻を挫かれたが、翌十三年（後西天皇萬治二年・一六五九）

には捲土重來、浙江の沿岸を北上して定海關（鎭海）を攻略し寧波（鄞）に突入、さらに長江に進撃し瓜州・鎭江においては一大決戰を試みて清軍を殲滅、ついで南京を圍んでその運命も風前の燈とみえた寸前惜しくも敗績し、多數の勇將猛卒を喪ひ血涙を掩うて思明州に歸つたのであるが、（註1）右の江南經略中、定海關及び瓜州附近において清軍が滾江龍あるひは滿洲木城等と稱する障碍防禦物を作製設備して鄭軍の舟師を阻んだことが史書にみえてゐる。右のうち滾江龍とは如何なるものであつたか、これを攻略戰況とあはせ考察するのが本稿の目的である。

二　定海寧波攻略と滾江龍

永曆十三年四月、浙江の磐石衞（樂淸縣西南五十里）附近に舟師を集結し長江進撃の態勢をとつた延平郡主招討大將軍朱成功は、同月十五日に來る十九日を期し進征することに決し各提督統鎭を集めて「大師進取南都（○南京）」ことを議した。この間の事情は成功の戸官であつた楊英の「從征實錄」が最も詳らかに傳へてゐる。すなはち成功は「我欲先取定關（○定海即ち鎭海）、牽其船隻、用藉配兵、資其粮餉、賴以飽騰、起手制勝、先聲奪人」といひ、これはまさしく「使虜罷於奔命、以逸待勞

百戰百勝之道」であつたが、これといふのも清兵の堅守する定關には「倘有虜船百隻。萬一出沒阻我往來、船隻或擁??集尾後、使我長慮却顧、亦非全勝之道」といふ事情によるものであつた。かつ定海關に堅固な二炮城があり、またここに問題とする滾江龍なるものが江中に張られてゐたから成功は寧波攻略についてこの點にも諸將の注意を喚起した。

但定關有二炮城、船隻俱泊在炮城内。又有滾江龍、横江爲限。須奪其城、斬斷滾江龍、揚帆直抵寧波港、兜牽燒船隻、然後攻其城池。此擧諸將以爲何如。（百十葉前四—六行）

これに對し諸將は「藩主○成功の尊稱等無遺策。—當領機宜而行」と全幅の贊意を表し、かくて四月二十八日を約して齊しく定關攻略を決行した。成功は自ら首程を督して梅山港（鎭海縣東南十里）より登岸、定關炮城に到つた。「時炮城有守虜五百□倘敢擊炮。」成功は傳令して伏兵每に柴一把を取らしめ火攻の計をめぐらし、翌二十九日には「柴草擁疊及城」んだが、清兵は逸早くこの焚燬の計を覺つてか「其守將繇○由滾江龍浮水而走」（百十葉後二—三行）り、成功は右提督（即ち馬信）をして往いてこれを招かしめ、なほ存する守兵三百は俱に降つた。かくて「其水師進斷滾江龍、進入寧波港牽取船隻」（同上三—四行）し、またその船を焚いた。たまたま鄭軍のうちに「叛逃歸虜」するものなどが

あつたので同地の攻略はこの程度にとどめて即夜抽回下船し、舟山に向つたのであつた。
これが滾江龍に關する定海寧波攻略の大要であるが、（註2）右の記事より考察すれば滾江龍の張られてゐたのは定關炮城附近の大浹江（南江）中であつたことが知られるし、また成功が「既奪炮臺、斷滾江龍、又焚其船。可無後患」（同上五丁六行）とて收兵北上したことより推察すれば、滾江龍は清軍にとつて炮臺、軍船とともに鄭軍舟師の攻略を阻む重要な役割を演じてゐたことが知られる。因みに定海關攻略については鷺島道人夢蕣の「海上見聞錄」江日昇の「臺灣外記」等にもみえてゐるが、「從征實錄」の記事はもつとも詳しくまた滾江龍のことに言及してゐる唯一の史料である。

三　瓜州鎭江攻略と滾江龍

途中の經路の事情を割愛して直ちに瓜洲鎭江戰の大略に及びたいと思ふ。六月十四日焦山に到つた朱成功はまづ「京都之門戸」瓜鎭及び譚（○譚一また談）家洲炮臺を攻略することに決し、翌十五日及び十六日に互つて神速果敢な攻略戰を展開、つひに清の操江軍門朱衣佐を生擒し遊擊左雲龍を斬つた。ついで、援勦後鎭劉猷及び監紀柯平をして瓜州を鎭守せしめて直ちに鎭江を攻略。同二十日

登岸。二十二日夜半より翌二十三日にかけて壮烈豪快な一大殲滅戦をくりひろげ、鄭軍未曾有の「一大勝」を博したのであるが、(註3)この攻略戦に於ても清軍が同じく滾江龍を江中に張りめぐらしてゐた事が諸書によつて知られる。次に、史料をあげてこれを考察してみよう。まづ「従征實録」をみると六月十四日焦山における成功の諸将に諭す言のうちに、

瓜鎮京言之門戸、峙立兩岸、必有重兵鎮守。又有譚家洲炮臺、與瓜州柳堤炮臺對擊。又有滾江龍、把截未易輕敵須分一枝綵水攻取譚家洲。奪其大炮、另撥陳大勝善泅水者、斬斷滾江龍。又以大師搗其瓜州、使虜左右支吾、聞風膽破、瓜鎮不日克下矣。(百十五葉後五—八行)

とあるから、瓜州附近に滾江龍のあることは前の定海關攻城の際と同様すでに成功の承知してゐたところらしく、また譚家洲の炮臺と相並んで水陸における瓜州の護りであつたらしい。このことは「臺灣外記」巻十、永曆十二年戊戌四月の條にかけて、成功が江南攻略の計畫を凝議した記事のうち中提督甘輝の進言として、

輝(○甘輝)聞瓜鎮限鐵鍊。此則船之艱於前進。兩挺砲臺密佈。此則陸之難於登岸。(筆記小說大觀本・第三冊四葉後八・九行)

と記されてゐるのは注意すべく、この鐵鍊といふのは所謂滾江龍のことに相違あるまい。次に、

「從征實錄」の翌十五日の條をみると、鄭軍は作戰通りまづ譚家洲の大炮を奪ひ滾江龍を斬斷した事情を傳へてゐる。

十五日、隨進師札瓜州北岸。傳令進師、委刑官程應璠催督右提督（○馬信）・前鋒鎭（○余新）等各水師船進取潭（○譚）家洲大炮。令戴罪材官張亮督泅水瀉船、刻限斬斷滾江龍。令張兵部（○煌言）・水師羅蘊（○章）督轄兵候斷滾江龍、即直進據瓜州上流、焚奪滿洲木浮營（○木城）（百十六葉後三—五行）

すなはち前に記す陳大勝の名はみえぬが、材官張亮・兵部張煌言・水師羅蘊章等が活躍したことが知られる。次に翌十六日の條にも滾江龍を斬斷した記事がみえて、何れも瓜洲攻略の有力な手懸りとなつた事情が窺はれる。

虜守將操江軍門朱衣佐（○祚・また助）同遊擊左雲龍、率滿漢兵馬數千、屯札瓜州城外迎敵。本藩（○朱成功）得左右武衞（○林勝と周全斌）居中、中提督（○甘輝）・左先鋒（○楊祖）居左、左提督（○翁天祐）・五軍（○張英）居右、令後提督（○萬禮）抄進□□之後、埋伏楊州大路、以絕援虜並防剿殺敗虜。兩陣相對只隔一小港。銃矢交擊、俱未合陣。時水師進斷滾江龍、揚帆兩岸對擊。本藩（○成功）揮兵大進。（百十七葉前五—八行）

「海上見聞錄」卷一、六月十六日の條には「水師進斷滾江龍」の事情を右とほぼ同樣に記して

ゐるし、黃宗羲の「鄭成功傳」七月（六月の誤）癸卯（十四日）・甲辰（十五日）の條も、また楊陸榮の「三藩紀事本末」卷二十一、鄭成功之亂、七月（六月の誤）の條もその內容は大同小異である。梅村野史の「鹿樵紀聞」卷中、鄭成功之亂には、己亥（永曆十三年）夏にかけて、

抵焦山、先奪譚家洲。時王師（○清軍）於金・焦間、用鐵索橫江、號滾江龍、成功使張亮先斷之、據瓜洲上游、而自率大隊薄城。守兵方拒戰、而張亮自上流、至習流將（○右武衞）周全斌、率銳卒帶甲銜刀、浮江而渡、腹背夾攻。守兵不能支。瓜州陷。

と傳へて前後の事情が參考となる。次に「臺灣外記」をみると六月十四日の前にかけて瓜洲攻略の作戰陣容を起し「或取木營（○木浮營）或取欄江壩、或取談（○譚）家洲、或抄瓜州之後而攻其城」（同前六葉後四―六行）と記し、ここにいふ欄江壩とはまさしく滾江龍のことなるべく、これは次の六月十四日の條にかけて鎭江操江軍門朱衣佐が「恃江中有滾江龍之欄」（同前七行）と記されてゐるのによつて推察される。右提督馬信は談家洲を環攻し、清の守將羅明昇は「分頭死拒、力戰至炮盡矢絕全軍覆沒」したが滾江龍は清軍が恃みとしただけあつてしかく容易に進擊することはできなかつたやうである。

信（○馬信）撥蔡支（○後勁中鎭）守之（○談家洲）、乘勝合周全斌師、飄颻大進、悉爲欄江壩所阻、不得前。全斌・張

亮・陣大勝〇従征實録にみゆ等、令善泅水者十餘人潑去、斬斷。遂無阻礙、揚帆直過、登岸列隊。云々（同前十三—十四行）

次に徐鼒の「小腆紀年坿攷」に眼を轉じてみよう。これには「六月丙午〇十七日明朱成功攻瓜洲克之。癸丑〇二十四日克鎭江」として詳細な記述があり、問題の滾江龍についても「於金・焦兩山間、鐵鎖斷之。謂之滾江龍」と記し、「材官張亮督泅水者、斬滾江龍」ことを傳へ、またこの斬斷の様子については、

見海舟〇鄭軍外蒙白絮、揚帆直上、近滾江龍、則復下。王師〇淸軍礮擊之、不傷一艘。循環者數次而滾江龍已斷。蓋海舟內藏泅水人、且以誘我〇淸軍礮矢也。度礮且盡。成功麾兵大進。云々

と傳へてゐる。

四　滾江龍の構造と效用

滾江龍の構造については遺憾ながらこれを詳らかに知ることができない。ただ如何なるもので如何なる用に供せられたかは滾江龍、滾江龍之欄、欄江壩などの名稱よりも大體想像することが

できるし、第二、第三兩節に叙べた記事によつてその一斑が窺はれよう。すなはち「橫江爲限」（從征實錄）し、「船之艱於前進」（臺灣外記）ところの鐵鍊鐵索鐵鎖であつたのである。そしてこれは多くの場合「陸之難於登岸」ところの炮臺と相俟つて、水中に敷設せられる阻礙物であつたことは定海に定關二炮城があり、瓜洲に柳堤炮臺及び譚家洲炮臺のあつたことによつても想像される。蓋し滾江龍は單に前記二地方にとどまらず、また必ずしも炮臺を伴はず恐らく當時要衝の沿岸濱江の諸處にも設けられてゐたのではないかと思ふが、金山焦山間の滾江龍の如きはその代表的なもので多分定海附近のものより規模も大きく有力なものであり、當時最も著名であつたのであらう。

以上、清軍が鄭軍舟師の前進を阻む滾江龍について述べたのであるが、清軍にはこのほかに滿州木城、または木浮營、あるひは長壩・木壩などと稱した巨大な浮筏を江上に設け軍兵數百、火礮數十門を擁して鄭軍の舟師を邀擊したのであるが（註4）、これらに關する考說は稿を改めて論ずるであらう。

五　餘　言

小論を結ぶにあたり滾江龍乃至欄江壩と關聯して聯想される二、三の事情を附加へてみよう。かの日露戰役中、軍神廣瀨中佐で有名なわが海軍の旅順閉塞は鐵鎖の代りにわが艦船を沈めて、清軍の場合とは反對に露艦の港灣より遁走脫出するを阻まうとしたものであるが、これも一種の滾江龍と見做しうべく、また今次の支那事變において支那軍が黃浦乃至揚子江等にジャンク、汽船等を沈めてわが海軍の遡航を阻んだのもこれに類すべく、更に興味深いことは烏龍山砲臺附近の江中に滾江龍とも稱すべき「水中地獄針の山」機雷網を十重二十重に張りめぐらし、長江遡航によるわが海軍の南京攻略を妨げたが、わが決死隊は月光淡き揚子江に豪膽緻密、世界無比の排除作用を決行して進み、陸軍との協同作戰なつて十二月十三日海軍南京一番乘りをしたことである。(註5)

なほ話題を轉ずれば天正三年（一五七五）五月、武田勝頼が三河の長篠城を圍んだ際、城主奥平貞昌（のち信昌）の命をうけて急を岡崎の家康に報ずべく鳥居勝商（通稱強右衞門）が單身城を拔け

出し水濠を泳ぎきる際、かねて水中に張りめぐらされてあつた長繩に觸れて艫と誤られ、危く難を逃れて使命を果したといふ挿話なども想ひおこされるし、その他支那北齊の時代に張亮（字は伯德）が河南の河陽（孟縣）を守つてゐた際、上流の敵より火船を放たれまさに河橋――橋が戰時における交通輸送に最も肝要であることは今次の事變においても明かに知らるべく、支那軍が敗軍の際は必ず大小の橋梁を爆破乃至燒却破壞して退却するなどはこれがためであり、クリーク等においては皇軍勇士が自ら架橋の人柱となつて友軍を渡すなど（例へば劉家行攻擊における蘊藻クリーク）――が燒かれんとしたとき小艇百餘艘に釘のついた長鎖をのせ、これを以て下りくる火船をくひとめた張亮の奇謀なども、（註６）長鎖を河上に利用した例であるがこれも滾江龍と聯關して想ひおこされる史實である。

補　註

（１）朱成功の江南攻略の大要は「歷史敎育」十三卷一・二・四號（昭和十三年四・五・七月）に拙稿「國姓爺の南京攻略」として連載されてゐる。

（２）定海寧波攻略については前揭拙稿第五章を參照せられたし。

（３）瓜洲江鎭攻略に關する史料、及びやや詳細な記述は前揭拙稿第六章に論じておいた。

(4)滿州木城、木浮營等については前引第六章のうちにも多少觸れておいた。なほ洪秀全の太平軍の營壘中にも「浮筏爲營」し同じく木城と稱したことがある。

(5)「東京日日新聞」昭和十二年十二月二十一日附夕刊、第二面參看。

(6)張亮の奇謀については「北齊書」卷二十五、列傳十七及び「北史」卷五十五、列傳の張亮傳にみえてゐる。(括弧外・割註は「北史」)

高仲密の叛(也)、與大司馬斛律金守河陽。周文帝於上流放火船、欲燒河橋。亮乃備小艇百餘(艘)、皆載長鏁○鎖以鏁下同じ頭施釘。火船將至。即馳小艇○船以釘釘之、引鏁向岸。火舡○船不得及橋。橋(之獲)全、亮之計也。

(昭和十三年八月・古典研究三ノ九)

海南島と鑑眞和上

一、古くから日本と關係
二、鑑眞和上の東征
三、揚州の新河發船
四、海南島漂流
五、上陸と各地の巡錫
六、歸船―あとがき

一　古くから日本と關係

わが陸海軍の精鋭部隊は、今曉緊密なる協同の下に、海南島の奇襲上陸に成功し、目下進撃中なり。

皇紀二五九九年の紀元節の前日、一大快報は天外より飛來した。かくて、澄邁灣上陸のわが精鋭は、即日、はやくも首都瓊山を拔き、その門戸海口を陷れ、ついで十四日の未明には、北方よ

り南進する陸軍部隊に策應し、陸戰隊の精鋭は同島南部の三亞港に奇襲上陸を敢行、忽ちにしてその東方の楡林と西方の崖縣とを占領してしまつた。そして十九日には定安も陷り、二十二日には文昌も落ち、翌二十三日には淸瀾港を確保した。

海南島討つべし――とは事變以來しばしば論ぜられたところであつたが、いまやわが軍の籌略成り、國民の要望は容れられて、「東洋の地中海のボタン」であり「佛領印度支那の頭の上のランプ」である海南島も、やがて日章旗のあまねく光被するところたらんとしてゐる。

從來、海南島に關する歷史はあまり知られてゐないが、わが國との關係も決して淺くはない。上古の支那人はわが九州を海南島の隣にあるやうに誤解してゐたくらゐであり、北宋時代においては、文人詩人として著名なかの文忠公・東坡・蘇軾（一〇三六―一一〇一）の遷謫の地として、わが國の人々にも親しみの多いところである。明代になると、いはゆる「倭寇」の進出があり、すでに今から四、五百年の昔、昌化（昌江）・儋州（儋縣）・澄邁・陵水・臨高などの各地が攻略されてゐるのも、今次の海南島敵前上陸と比較して興味が深い。（倭寇については歷史學研究九卷二號の拙稿「海南島攻略の倭寇」を參照せられたい）。

またわが西日本と南支那とは、貿易風の關係で古來しばしばわが船の廣東方面に、廣東の船が九州方面に漂着してゐるが、淸の聖祖の康熙年間にも二回ほど瓊州方面へ漂流した日本人があつて、感興をそそる漂流記を傳へてゐる。

さてここに紹介しようとするのは、今から約一千二百年ほど前に、わが國に初めて戒律を傳へた唐の鑑眞和上が、その東渡以前、すなはち天寶七載（七四八）に日本に赴かんとして風濤のため海南島に漂着し、各地を巡錫した始末であり、これによつて、かたがた當時における海南島の事情や、その風土風俗なども瞥見してみようと思ふのである。

二　鑑眞和上の東征

鑑眞（六八八—七六三）は唐の揚州江陽縣（江蘇省江都縣）の人。齊人淳于髡の後といふ。年十四のとき父に從つて揚州の大雲寺に入り、佛像をみていたく感動し、よつて父に請うて出家を求め父はその志を奇としてこれを許したと傳へられる。

すなはち智滿禪師につき出家して沙彌となり、大雲寺に配住したが、のちこの寺を龍興寺と改

めた。唐の中宗の神龍元年（文武天皇慶雲二年・七〇五）に至り、道岸律師に從つて菩薩戒をうけ、景龍元年（元明天皇慶雲四年・七〇七）には東京洛陽（河南）より西京長安（陝西省西安）に赴き、翌二年に西京の實際寺において登壇、具足戒を荊州（湖北省江陵縣）南泉寺の弘景律師にうけて和上となつた。かくて專ら律宗を究め諸宗をも該ね、人を度すること四萬餘、その名聲は一世に高かつた。

時に玄宗の開元二十一年（聖武天皇天平五年・七三三）、わが沙門榮叡・普照らが遣唐大使丹墀眞人廣成に隨つて唐國に留學したが、唐國の諸寺は戒律をもつて入道の正門となし、もし持戒しなければ僧中に齒せざるありさまであつたのをみて、わが國にも傳戒の人をえんことを思ひ、天寶元載（天平十四年・七四二）に至り、當時揚州の大明寺に律を講じてゐた鑑眞に請うて、その東渡を促すに至つた。

佛法東流して日本國に至る。その法ありと雖も傳法の人なし。本國、昔し聖德太子あり、曰く二百年の後、聖敎日本に興らんと。今この運を鍾む。願くは和上東遊して化を興さんことを。

これがそもそも鑑眞和上東征（征は行くの意）の發端であり、鑑眞はこれを容れたけれども、その間あるひは風濤に阻まれあるひは官吏に妨げられて志を果さざること實に前後五回。かくて天寶十二載（孝謙天皇天平勝寶五年・七五三）に至り、わが遣唐大使の藤原淸河、同じく副使の大伴胡麿らは、鑑眞の篤志をきき、誘導してその船に乘らしめ第六回目の渡日をなし、この年の末はじめて薩摩の秋妻屋浦に著き、太宰府に寓し、翌年攝津の難波に達することができたのである。朝廷は優遇して奈良の東大寺にをらしめ、勅して戒壇院を設け　聖武天皇まづ登壇して菩薩戒をうけたまひ、ついで皇后・皇太子もまた受け給うた。東大寺が日本佛教の總本山として名實ともにその主權を確立したのは、實にこれによるのであり、鑑眞渡來のわが佛教に及ぼした影響はまことに偉大なものであつた。天平勝寶八年（七五六）大僧都に任じ、天平寶字二年（七五八）大僧正となり、大和上の號をうけ、同七年五月、年七十六をもつて寂した。

三　揚州の新河發船

ときは楊貴妃で名高い唐の玄宗の天寶七載、わが國では　聖武天皇の天平二十戊子年（七四八）

すなはち今から一千一百九十一年の昔のことである。

その年の春、東渡の準備をなすべく榮叡と普照とは、同安郡（安徽省懷寧縣）より當時揚州（江蘇省江都縣）の崇福寺に住む鑑眞のもとに來り、舟を造り香藥を買ひ、百物を備辦した。これは一にこれよりさき天寶二載（天平十五年・七四三）のときの準備の如くしたのであるが、そのときは正爐八十貫錢をもつて嶺南道（今の廣東廣西兩省と印度支那北部地方を占む）採訪使の劉呂隣（また劉巨隣）の軍舟一隻を買ひ、舟人たち十八人を雇ひ、海粮を備辦した。そしてまづ

一車・乾薄餅一萬番・拾頭一半車

の如き食料品をはじめとし、つぎに佛畫・佛像・佛書・佛具の類より、さらに南海の特產たる香料六百餘斤、そのほかいろいろなものを携へ、僧祥彥・道興・德淸・榮叡・普照・思托ら十七人に、玉作人・畫師・彫佛・刻鏤・鑄・寫繡師、それに修文・鐫碑の工手など、すべて八十五人であつた。

さて、このたびの天寶七載のときの一行は、前記の道興をのぞく五人の僧に、神倉・光演・頓

悟・道祖・如高・日悟の六人の僧が加はり、道俗あはせて十四人。それに水手以下相したがふものすべて三十五人あつた。

ときはこれ天寶七載の六月二十七日、出發の準備萬端をととのへた一行は、揚州の崇福寺より新河（江蘇省泰興縣の東南四十里）に赴き、はるかに東天を望み、舟路の恙なからんことを祈りつつ發船したのであつた。

四　海南島漂流

一行が揚子江を下つて常州（江蘇省武進縣）界の狼山に至るころ、にはかに風は急に浪は高まりやむをえず三山（江蘇武進縣の東北三十五里？）に旋轉し、風をえて越州（浙江省紹興縣）界の三塔山に至り、停ること一ケ月あまり。やがて好風をえて發し暑（署）風山に至つたが、またそこに停住すること月餘。

かくて十月十六日の早曉に至り、いよいよ頂（順）岸居を目ざして勇躍出船した。けだしこの日を選んだわけは、鑑眞がその前夜、緋と綠の衣を著けた官人と岸上で拜別する夢をみたので、

」これは國神と別れることであるから、こんどこそは必ず渡海ができるであらう」と決心したためであつた。東南の海上を眺めると朝霧の中に美しい山がみえてゐる。はじめは本當の山とばかり思つてゐたが、日中になると忽ち消えてしまひ、蜃氣樓であつたことが分つた。

岸を去ることやうやく遠くなつたころ、どうしたことかにはかに海は墨を流したやうに眞黒となり、風浪は忽ちにして烈しく強まつてきた。かくて「沸浪一たび透れば高山に上るが如く、怒濤再び至れば深谷に入るに似て」、人はみな荒醉し、ただ觀音を唱へるのみ。舟人のうちには「舟は今にひつくりかへるのだ。何が惜しからう」といつて、棧香籠を拋げすてようとするものもあつたが、突如空中より聲あり、これを制したので思ひとどまり、かくて舟人たちも今や沈まんとするこの船にも、甲を著け杖を把る四人の神主が舳艫にあつて、自分らを守護したまふことを信じ、他のものもこれを聞いてやや安堵の胸を撫でおろした。

しかしあるときは三日のあひだ「虵海」を過ぎた（虵は蛇の俗字）。その虵は長さ一丈あまり、小さいものでも五尺あまり。色は皆まだらで、海上に滿ち泛んでゐた。あるときはまた三日のあひだ「飛魚海」（銀魚海）を過ぎた。魚の長さ一尺あまり、白色の飛魚が空中に翳ひ滿ちてゐた。

あるときは一日中「飛鳥海」を過ぎた。鳥の大いさは人ほどあり、飛び來つて舟の上に集り、舟は重くなつて沈みさうになつたから、手で鳥をおしのけると銜んだりした。

その後二日といふものは限界には何物も入らぬ。見えるのはただ急風と高浪とのみ。僧たちは多く惱み臥し、ただ普照だけが毎日食事のとき、生米を少しばかり皆に配けあたへ、わづかに飢をしのいだ。しかし船にはもう一滴の水さへなく、米を嚼んでも喉はすつかりからからに乾いてゐて、口に入れても呑み込むにも呑みこめず、吐き出すにも吐きだせず。海水を飲んでわづかに腹を脹らますありさまであつた。この漂流はよほどの艱難であつたらしく、當時を回顧して「一生の辛苦、何んぞ此れより劇しからん」と悲痛な筆致をもつて傳へてゐる。

かかる慘憺たる漂流をつづけるうち一日、海中に一尺あまりの金魚が四匹あらはれ、舟のまはりを泳ぎまはつたが、その翌朝、風はやみ一同は初めて山をみることができた。しかし人々はすべて水に渇して死ぬるばかりである。このとき榮叡はひとり面色をほころばせて、次のやうに語つた。

私はこんな夢をみた。すなはち官人が自分に受戒懺悔を請うたから、自分は「貧道甚だ渇す。

水を得んと欲す」といふと、かの官人は水をとつて私に與へた。その水は色乳汁の如く、飲めば甚だ美まく、心はすでに清涼となつた。そこで官人のいふには「舟上の三十餘人は、もう何日も水を飲まず、大いに飢渇してゐる。どうか早く水を取つてきてもらひたい」と。するとその官人は雨を喚んでくれた。夢相はかうである水は今に至るであらう。皆な早く椀を把つて待つてゐるやうに。

これを聞いて一同歡喜したが、果してその翌日の未の刻（午後二時）、西南の空にくろ雲が湧いたと思ふまもなく、忽ち舟上に雨を注ぎ、待ち焦れてゐた人たちは椀にこの雨をうけて貪るやうに喉をうるほした。次の日もまた雨が降り、人はみな飽きたりるほど飲むことができた。

かくてその翌日、岸に近く四匹の白魚があらはれ、舟を引いてただちに泊舟浦に導き入れた。舟人たちはおのおの椀をとり競うて岸に上り、水を覓めた。一小崗を過ぎると池水の清涼甘美なるに過ひ、一同は爭うてこれを飲んだ。後日またその池で水を汲まうと思つて來てみると、昨日の池は今日はもうただの陸地であり、彼らははじめて神靈が池を化出せしめたことを知り、かつ悲しみかつ喜んだ。

以上の敍述のうちには、多少說話めいたところもあるが、海南島漂流記の一つとして、けだし興味あるものであらう。それにしても、去る六月二十七日揚州を出發してより四ケ月餘りにして漸く漂着しえたこの島が、南陲の海南島であつたといふことを、彼らは果して豫知したであらうか。

五　上陸と各地の巡錫

ときは天寶七載の冬十一月といふのに、それには「花蘂開敷し、樹實竹筍、夏に辨らず」といふ氣候風土である。すなはち人を遣して浦を求めさせたところ、四人の經紀人（仲買人―牙人・牙儈）があり、彼らより口々に怖ろしい人食ひの話などを聞かされて、急ぎ舟をひいて浦に入つた。ところがその晚、髮をみだし刀を帶びた男にで遭ひ、皆はこれをみてふるへ上り、食物を與へて去らせたが、一同はも早やここに長居は無用とばかり、即夜その浦を發し、三日をへて振州（崖縣）江口に辿りつき舟を泊めた。

さきの經紀人はこのことを郡に報告し、振州の別駕（刺史が州を巡察するとき別に駕して從ひゆく

官）馮崇債なるものは、兵四百人を遣して來り迎へしめ、鑑眞らを州城に案内した。別駕は恭しくいつた。

弟子、早く和上の來るを知る。昨夜夢に僧姓豐田なるものあり。是れ債の舅に當る。此の間若し姓豐田なるものありや否や。

衆僧が無いと答へると、「無くともいま和上は卽ち弟子の舅に當る」といつて迎へて宅内に入り、齋を設けて供養した。また太守の廳内において會を設け、ついで鑑眞らを州の大雲寺に安置した。鑑眞らはその佛殿の壞廢してゐるのをみると、おのおの衣物を捨てて佛殿を再建せんとし、一年あまりで成つた。

しかしやがて振州を去るときがきた。別駕の馮崇債は自ら甲兵八百餘人を備へて、鑑眞ら一行を萬安州（萬寧縣）まで送つてきてくれた。

四十餘日をへて萬安州に着くと、こんどは州の大首領である馮若芳といふものが、請うて自分の家に住はせ、三日の供養をした。この馮若芳については興味あり注目すべき事實を傳へてゐる。すなはち當時の海南島は、東西交通、蕃舶往來の要路に當つてをり、彼は萬安州を根城として

海賊を働き、これによつて豪奢な生活を營んでゐたことがしられる。

かくて一行は岸州界に到つた。甲兵八百餘人をもつてここまで送つてきてくれた馮崇債は、賊のゐないのを見とどけて、ここで別れをつげ振州へ引きかへして行つた。この岸州といふのは恐らく崖州の誤りなるべく、唐代の崖州は瓊山縣の東南にある舍城縣のこと。隋代以前の崖州は儋縣の西北三十里にあつた儋耳城のことであり、宋代以後のそれは崖縣のことである。唐代の崖縣は前記の如く當時振州といつた。

さて榮叡・普照らは海路より四十餘日をへて岸州（即ち崖州）に到着した。州の遊奕（巡弋、遊獵して地形を視察する）大使の張雲は、いで迎へて拜謁し鑑眞らを開元寺に住まはしめた。また齋を設け、施物は一屋に盈ち滿ちたといふ。

ここの珍味には益智子・檳榔子・荔支子・龍眼・甘蕉・拘莚・樓頭などがあつた。大きさは鉢盂の如く味は蜜よりも甜く、花は七寶の色のやうであつた。瞻唐香の樹は聚生して林を成してゐた。そして微風至ればその馥郁たる香りは五里の外にまで及んだ。また波羅捺の樹もあつた。果の大きさは冬瓜の如く、樹は榠楂に似てをり、その葉は水葱の如く、その根の味は乾柿に似てゐた。

ここでは十月に田を作り、翌年の正月に粟を收める。養蠶は年に八度、稻は二毛作。男は木笠を冠り、女は布絮を著てゐる。「人は皆な蹄を彫り齒を鑿ち、面を繡し鼻飮する」といふ異風俗がある。

さて崖州における歡迎も振州、萬安州におとるものではなかつた。大使張雲をはじめ典正に至るまで當番をきめて樂僧に供養し、雲張も手づからめづらしい優曇鉢の葉や子をもつて供養した。その葉は赤く、圓くして一尺あまり。子の色は紫丹で、氣味は甜美であつた。

とかくするうちに崖州に火事がおこり、たまたま開元寺もともに灰燼に歸してしまつた。鑑眞は大使張雲の請ひによつて再建しようとしたところ、これを傳へ聞いたさきの振州の別奉馮崇債は、かつて鑑眞らによつて大雲寺の佛殿を再興してもらつた佛恩に感じてか、はるばる諸奴を遣し、おのおの椽を一本づつ寄進せしめ、三日のうちに一時に將來した。そこで早速これをもつて佛殿、講堂、博塔などを構へ、その餘りで丈六の釋迦佛像をつくり、登壇授戒し、また律を講じ多くの人々を度した。

しかし鑑眞ら一行の海南島を去る日がつひに來た。彼らは大使に別れをつげると、ついで澄邁

縣に赴き、そこより一衣帶水なる對岸の雷州（廣東省海康縣）に向つて船出したのである。

六、歸船――あとがき

澄邁灣より三晝夜にして雷州（廣東省海康縣）に達し、それより羅州（同省廉江縣）・辨州（辯州？同省化縣）・象州（廣西省象縣）・白州（同省博白縣）・傭州（容州？　唐の元和前は同省北流縣、元和後は容縣）・藤州（同省藤縣）・梧州（同省蒼梧縣）・桂州（同省桂縣）などに赴き、とどまること一年。ついで端州（廣東省高要縣）より廣州（廣東）にいたり、韶州（同省曲江縣）において普照と別れたが、ときはすでに天寶九載（七五〇）であつた。

鑑眞はこのころより炎熱を經てきたため眼光暗昧となり、心づくしの加療も功なくつひに失明したのであるが、それには辛苦の海南島漂流や、瘴癘の各地巡錫などがその原因になつたことと思はれる。

かくて韶州より大庾嶺をこえて虔州（江西省贛縣）に入り、吉州（同省吉安縣）に次し、贛江を下つて廬山より江州（同省九江縣）に向ひ、九江驛より舟に乘じて長江を下り、潤州江寧縣（江蘇

省）に赴き、やがて揚州の新河に歸船した。この行、年を閲すること前後三年。鑑眞は時に年六十三であつた。

以上はいまから約一千二百年前、すなはち唐の玄宗の天寶七載から九載（七四八―五〇）にわたつてはからずも決行された鑑眞和上の南支より中支へかけての巡錫のうち、その發端となつた海南島の漂流とその巡錫とについて概觀したのであるが、なほいふべくして看過した點ももとより多い。

けだし鑑眞東渡の志は、前にのべたやうに天寶十二載に至つて初めて遂げられたのであるが、「元亨釋書」の著者師錬は鑑眞傳の末尾に賛して、冒頭「開士の化に赴くは、武夫の敵に臨むより過ぐるもの遠し矣」とのべ、鑑眞の仁と勇とをたたへてゐるのも、右の如き海南島漂流及び巡錫の事實を理解して、はじめて首肯しうる論賛であらう。

（昭和十四年四月、世界知識十二ノ四）

【附記一】　鑑眞和上に關する參考文獻は次のごとくである。

「唐大和上東征傳」

1古典保存會覆製本

2大正新修大藏經（高楠順次郎博士編）第五一・史傳部三（日本・元開撰）

3大日本佛教全書（佛書刊行會編）第一一三―一一六、遊方傳叢書第一（第一一三冊）釋元開・釋賢位・釋豐安（鑑眞和上三異事）

4群書類從　卷六九　傳部六

○「元亨釋書」[一]

1大日本佛教全書第一〇一（釋師錬）

2新訂增補國史大系三一

○「本朝高僧傳」[二]

大日本佛教全書第一〇二・一〇三（釋師蠻）

「日本高僧傳要文抄」[三]

1大日本佛教全書　第一〇一（釋宗性）

2新訂增補國史大系三一

「宋高僧傳」一四

大正新修大藏經　第五〇（宋・賛寧等撰）

「水鏡」下

【附記二】　一例として「元亨釋書」の鑑眞賛と、「本朝高僧傳」の鑒眞傳の一節をかかげておく。

「元亨釋書」卷一・傳智之一・唐國鑑眞

贊曰、開士之赴レ化、過二武夫之臨一レ敵者遠矣。彼毛二羽矢石一、竿二木干戈一、卒二驅封豕一、陣二張長虵一。猶一戲場耳。故入二死地一出二活機一、立二功名一策二勳業一者、武夫之勇也。眞公陷二虵鳥海一、流二蜒獠鄕一、瘴霧傷レ晴而不レ悔。颶風簸レ舟而不レ惶。再四躓奮又起、布二敎異域一、揄二揚眞理一。使三此下凡之軀貌習二彼大仙之威儀一、毗尼之軌、雖レ阨二中微一、六百餘年風範可レ傳。古云、仁者必有レ勇。勇者不二必仁一。是又開士之悲、所二以過而遠一乎。

「本朝高僧傳」卷二・唐大明寺沙門鑒眞傳

……〔天寶〕七年戊子春、在二揚州崇福寺一、〔鑒〕眞與二〔榮〕睿・〔普〕照一相謀造レ船、經卷佛器所レ載、一如二天寶二年一。又率二祥彥・神倉・法進・思托等道俗舟師一百餘人一。季夏發二崇福一屆二新河一、帆レ海過二常・越州一、止二署風山一。眞夢二緋綠衣三官人岸上列拜一。既出二洋中一、暴風怒濤、水黑如レ墨。舟人告曰、船今將レ歿、有二何所一レ惜。棄禱二海神一、欲レ投二棧香籠一。時空中聲曰、勿投棄一。又有二神將一、介甲操レ杖、各立二舳艫一。尋レ時風定。三日過二蛇海一、其長三丈餘、色如二錦文一。三日過二銀魚海一、魚長尺餘、飛二白鷺一滿二空中一。五日經二飛鳥海一、其大如レ人、壓二舟背一沒。拂レ之銜レ手。出二魚海一乏レ水。俄伯二一島一。照レ池淸水甘美、衆人爭呑各得二飽滿一。明日欲レ斟、只見二陸地一。稍得二順風一、江州・明州等十五州、漸著二中華之地一。飢渇艱厄、不レ可二具述一。所レ到州牧縣主、爲二難遭想一、建レ寺築レ壇、聞レ法受レ戒、禮讚供養、檀嚫牣充……。

忠臣藏の漢譯・歐譯本について

一　まへがき
二　假名手本忠臣藏以前
三　假名手本忠臣藏以後
四　忠臣藏の飜譯
五　あとがき

一　まへがき

今日我國における數多き戲曲のうち、忠臣藏ほどわれらに親しみを覺えるものはなく、また人氣のあるものは恐らくあるまい。それは現在、殆んど每年のやうに、或ひは歌舞伎に、或ひは映畫に、蒸しかへし蒸しかへし興行されても、常に大入滿員の好評を博さぬことはない。これは恐らく、忠臣藏の持ち味がわれら日本人の性格にぴつたりとくるところに、人氣の永遠性があるのであり同時に忠臣藏が日本的性格の一斑を代表してゐると別言することができよう。

筆者は東洋史專攻者の一人として、日支文化、東西文化の交渉に關心を有してゐるものであるが、戯曲方面については全くの素人であり、ここに掲げたやうな問題を刻明に取扱ふに適はしくないものである。ただ上記のやうな研究態度より、忠臣藏にも漢譯をはじめ、英獨佛譯等のあることを想起し、忠臣藏が單なる國内的の產物たるに止らず、廣く國際的の地位を占めてゐることもまた一般の人々は所謂「忠臣藏」の内容は知悉してゐても、その成立過程や、爾後の展開情況などについては、案外關心の薄いこと、等の理由により右のやうな題目を選んだわけである。もとより小論の如きは、その道の專門家にとつては蛇足に等しいものであらうが、いはば單なる筆者の覺書にすぎないものであり、博雅の御指教を賜はらば、幸ひこれに過ぐるものはない。

二　假名手本忠臣藏以前

『假名手本忠臣藏』の内容は、現在われわれは『國民文庫』（明治四二—四年刊）第二十五、『有朋堂文庫』（大正十五—昭和二年刊）第一輯之部・第四十二・海音半次出雲宗輔傑作集『近代日本文學大系』（國民圖書株式會社、大正十五—昭和四年刊）第八・名作淨瑠璃集上などにおいて、手近か

にみることができる。いふまでもなく竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作であり　桃園天皇の寛延元年（淸高宗乾隆十三年・一七四八）八月十四日、初めて竹本座に上演され、大當りにて十一月まで三月に亙つて興行されたもの。恰も九代將軍家重のころである。「假名手本」の名稱は恐らく假名四十七文字と義士の數とが同一なる點より稱せられたものであつて、この前後の作品には後にみらるる如く、しばしば「いろは」云々の題名がつけられてゐるのも、同一の事情によるものと察せられる。

さてこの忠臣藏が古今名作中の隨一といはれ、歌舞伎の獨參湯と稱せられるに至るまでには、恐らく「事の成るはその成るの日に成るにあらず」の例にもれず、忽焉として出現したのではあるまい。必ずやその成立に及ぶまでの歷史的發展段階をへたものと推測されるのである。いふまでもなく赤穗浪士の快擧は　東山天皇の元祿十五年（乾隆四十一年・一七〇二）十二月十四、五日に決行されたものであり、同志の切腹は翌十六年二月四日であるから『假名手本忠臣藏』の出現した寛延元年までには、四十六、七年の隔りがある。今日、時事時局に關聯した戲曲小說の類が逸早く出版、上映、上演、ラヂオ放送されるのと比較して、當時の趨勢を推論することは、もと

より危険であるけれども、元祿快擧以後『假名手本忠臣藏』の出現するに至るまでには何等かの形式において、この義擧が世に問はれてゐるはずであらうと思ふ。よつてまづその足跡を辿つてみることとする。

元祿十六年（一七〇三）二月十六日、江戸中村座で上演した歌舞伎「曙曾我夜討」は、まづ義士劇の濫觴といふことができよう。これは曾我十郎、五郎が吉良家討入をする筋であるが、義士の切腹を賜つた二月四日より僅か十三日目のことである。勿論公儀を慮つて曾我兄弟に假託して脚色したのであつたが、それでも公儀への遠慮からわづか三日間で中止してしまつた。

ついで操淨瑠璃として仕組んだのが、かの近松門左衞門（一六五三—一七二四）であり、彼の創作生活の第三期に屬する寶永三年（一七〇六）五月五日、竹本座上演の「兼好法師物見車」及び同年六月一日、同座上演の跡追狂言「碁盤太平記」の兩者である。前者は鹽谷高貞の家老八幡太郎が、高野師直の臣小林民部を討つところで終つてをり、後者は八幡太郎が名を大星由良之助とかへて、同志と師直邸に討入り首級をあげることを脚色してをり、ここにおいてか初めて忠臣藏の

體系が、やや整つてきたやうに思はれる。近松が創作生活第四期の初頭に屬する正德五年（康熙五十四年・一七一五）かの「國姓爺合戰」の如き時局に關する新作を脚色して絶讃を博し、その後自作の跡追狂言「國姓爺後日合戰」・「唐船噺今國姓爺」をふくむ國姓爺戲曲小說の簇出をみたのと揆を一にするものがあるやうであり、ここに近松の作家としての偉大性の一面を窺ふに足らう。

次に近松以下の作品について一々論ずるのが順序であるが、これは煩に亙るから、大略時代順を追うてその作者、題名を掲げるに止めたい。寶永七年（一七一〇）には吾妻三八の歌舞伎「鬼鹿毛武藏鐙」正德三年（一七一三）には紀海音の操「鬼鹿毛無佐志鐙」享保十七年（一七三二）には並木宗助、小川文助、安田蛙文合作の操「小栗判官横山郡司忠臣金短冊」があらはれ、同二十年（一七三五）には中村訥子「鎧櫻故鄕錦」、津打治兵衞「忠臣いろは軍談」の兩歌舞伎が上演、元文三年（一七三八）には「忠臣いろは夜討」の操、同五年（一七四〇）には再び津打治兵衞の歌舞伎「豐年永代藏」翌寬保元年（一七四一）には並木丈助の「粧武者いろは合戰」及び「鹽谷判官故鄕錦」の兩歌舞伎、ついで延享四年（一七四七）の歌舞伎「大矢數四十七本」があげられる。而して「假名手本忠臣藏」

の操がでたのは、實に翌寛延元年（一七四八）のことであり、元祿十六年（一七〇三）より延享四年に至る四十六年間に、操五、歌舞伎八、計十三種の出現を俟つて、初めて古今の名作忠臣藏の成立をみたわけである。

三　假名手本忠臣藏以後

一つの名作が世にいでて世人の喝采を博すると、それの焼直し、換骨奪胎、飜案の如きが相ついで出づるものである。卑近な他の一例をあげれば、今日でも一つの傑作の漫畫が著名になり、世人の人氣に投ずると忽ち十數、數十恐らくはそれ以上の通俗な漫畫が出現する傾向と同樣な點があらうと思ふ。「假名手本忠臣藏」を代表とする所謂義士劇、忠臣藏狂言、義士銘々傳の如きは何れもその亞流と稱すべく、すでに前節にのべたものや、これから本節にのべんとする臺本などは、博文館『忠臣藏文庫』『歌舞伎脚本傑作集』『日本戲曲全集』歌舞伎篇第十五輯『默阿彌全集』『大南北全集』等に收錄され、その故實、型などについては『傳奇作書』『古今いろは評林』第一次の雜誌『歌舞伎』等を參照すべきである。

次に笹川種郎博士、飯塚友一郎氏等の研究に基き、前例に從ひ操と歌舞伎について、その主なるものを列擧してみよう。まづ操では寳暦九年（一七五九）若竹笛躬、豐竹應律、中邑阿契合作の『難波丸金雞』、明治元年（一七六四）黑藏主、中邑阿契の『いろは歌義臣鑿』同三年（一七六六）近松半二、竹本三郎兵衞の『太平記忠臣講釋』同七年（一七七〇）『通矢數四十七本』、安永元年（一七七二）中邑阿契、若竹笛躬の『忠臣後日噺』、同年近松半二、竹本三郎兵衞の『躾方武士鑑』、同二年（一七七三）近松半二、近松東南の『いろは藏三組盃』、同四年（一七七五）福内鬼外の『忠臣伊呂波實記』、同九年（一七八〇）『合詞四十七文字』、天明四年（一七八四）黑藏主の『太平記義臣礎』、同七年（一七八七）若竹笛躬、梅野下風の『廓景色雪茶湯』、寛政五年（一七九三）『鼻手本給銀藏』、同九年（一七九七）若竹笛躬、中村漁眼、並木千柳の『忠臣墳盟約大石』、同十年（一七九八）櫻田治助の『忠臣兩國織』、同年烏亭焉馬の『忠臣二度目清書』、同年司馬芝叟の『忠臣一力祇園曙』、享和三年（一八〇三）屛風裏形の『假名手本義士書添』、天保十五年（一八四四）西澤一鳳の『忠臣國字譬』の如き十七種があげられ、歌舞伎では寳暦十二年（一七六二）並木正三の『泰平いろは行列』、明和八年（一七七一）『小袖藏いろは配』、安永七年（一七七八）並木五瓶の『日本花赤穗鹽竈』、

同十年（一七八一）辰岡萬作の『爲討日本一』、天明二年（一七八二）並木正三の『敵討四十有七人』、寛政三年（一七九一）奈河七五三の『いろは假名四十七訓』、同五年（一七九三）辰岡萬作の『忠臣雙葉藏』、同六年（一七九四）並木五瓶の『義臣傳讀切講釋』、同十年（一七九八）辰岡萬作の『扇矢數四十七本』、同年福森久助の『名產赤穗花鹽』、享和三年（一八〇三）近松德三の『繪本忠臣藏』、文化三年（一八〇六）同人の『いろは歌譽櫻花』、同七年（一八一〇）同人の『以呂波歌櫻秀逸』、文政四年（一八二一）鶴屋南北の『菊宴月白浪』、同五年（一八二二）奈河晴助の『大石摺櫻花短冊』、天保四年（一八三三）三升屋二三治の『表裏忠臣藏』、同六年（一八三五）『いろは藏雙合鑑』、同年西澤一鳳の『太平記士鑒』、同十二年（一八四一）同人の『花菖蒲いろは連歌』、翌十三年（一八四二）同人の『紅楓いろは文庫』、同十四年（一八四三）同人の『大石摺義士法帖』、弘化四年（一八四七）『忠臣藏十一段變り所作事』、安政三年（一八五六）瀨川如皐の『新舞臺いろは書初』、同五年（一八五八）河竹默阿彌の『假名手本硯高島』、文久元年（一八六一）同人の『東驛いろは日記』、同三年（一八六三）同人の『歲市廓討入』、慶應元年（一八六五）同人の『忠臣藏形容畫合』、同年『忠臣藏後日建前』同三年（一八六七）『稽古筆七いろは』、明治二年（一八六九）河竹默阿彌の『名大星國字書筆』、同

四年（一八七一）同人の『四十七刻忠箭計』、同六年（一八七三）『忠臣いろは實記』、同十年（一八七七）三世河竹新七の『忠臣藏年中行事』、同年同人の『忠臣藏後日實錄』、同十四年（一八八一）河竹默阿彌の『千代譽松山美談』、同十五年（一八八二）勝諺藏の『誠忠義臣元祿歌舞伎』、同二十三年（一八九〇）福地櫻癡の『實錄忠臣藏』、同三十四年（一九〇一）同人の『芳哉義士譽』、大正四年（一九一五）、竹柴其水の『元祿薩摩侍』、同七年（一九一八）右田寅彥の『女忠臣藏』等の四十種があげられる。

以上を通覽すると、種々の考察が下されるわけであるが、その數よりみれば、『假名手本忠臣藏』出現以後、すなはち寶曆九年（一七五九）より大正七年（一九一八）まで百六十年間に、少くとも操十八、歌舞伎四十、計五十八種の新作が上演されてゐるのであり、この間同一作品のくりかへし興行されてゐることを思へば、その上演回數は夥しい數に上つてゐると想像される。

なほこれと關聯して黃表紙本、安永八年（一七七九）朋誠堂喜三二の『案內手本通人藏』、寬政六年（一七九四）山東京傳の『忠臣藏即座料理』、同年同人の『忠臣藏世世幕無』（北尾重政畫）の如きものより、忠臣藏と水滸傳の持味をともに活かさんとした讀本、寬政十一年享和元年（一七九

九―一八〇二）刊、同人の『忠臣水滸傳』や、滑稽本として大家三馬の『忠臣藏編痴氣論』『田舍芝居忠臣藏』及び文化元年（一八〇四）萬壽亭正二（―篠田金治――槿々堂、葛葉散人）の『假名手本穿鑿抄』、同十年同人の『假手本藏意抄』の如きは、ともに注目されるべきであらう。殊に最後の萬壽亭の作品は、前著を增補したものであつて、けだし滑稽本の白眉であらう。內容の比較檢討はここでは省略に從ふ。

四　忠臣藏の飜譯

私の問題の所在は最初にのべたやうに、むしろこの節にあり、卽ちわが國古今の名作忠臣藏の漢英獨佛譯などを通じてみたる日本對支那、歐米諸國との文化交涉を歷史的に究明せんとする意圖にあるのであり、如上の論述はその序說と見做されるものである。しかしながら論じてここに至り、すでに紙數もかなり費してをることであるから、この問題に關しては筆を改めて詳論する事とし、茲では漢譯と英獨佛譯の若干に就て一言ふれておく。

まづ漢譯としては淸の鴻濛陳人の『海外奇談』（一名忠臣庫）があり、面白いことには、これが

わが、光格天皇の文化十二年（一八一五）と年代未詳の二度、再び飜刻されてゐることである。後者は上中下三卷三冊で、單邊有界、半葉十行、行二十字本である。英譯についていへば、アメリカ第二十六代の大統領 Theodor Roosevelt（一八五八――一九一九）――彼の著『鐵騎隊』Rough Rider. については『典籍趣味』第八輯（昭和十三年十月）に述べた――がすでに自らこれを讀み自分の子供にも讀ましてゐる點などより、當時早くも英譯されたものがあつたことを知りうるし英國の桂冠詩人 John Masefield（一八七五――）が、忠臣藏を飜案して一九一五年（大正四年）The Faithful を書いてをり、日本でも最近、震災で絶版となつてゐた故井上十吉氏の英譯 Chushingura or Forty Seven Ronin が、嗣子當藏氏によつて美事再刊されてゐる。また獨譯には去る十一月二日、ドイツ演劇學校で「歌舞伎」試演會の演出指導にあたつた Erwin Bälz 氏の勞作あり、G. Bagulesco 氏には今春（昭和十三年）英文佛文などにてものした Yamato-Damashii 等があるが、以上の詳細は稿を改めて論ずるであらう。

五　あとがき

以上節を分つこと四、日本戯曲の代表的名作『假名手本忠臣藏』につき、日支、日歐米文化の交渉といふ立場より、まづ序説として、その成立及び展開につき啓蒙的な覺書を記したのであるが、この忠臣藏、これは過去がさうであつたと同樣に、將來もまた日本的性格を代表する古今の名作として、內外にその聲價を謳はれることであらう。すでに江戶時代より每年十二月十四日夕刻より徹宵して義士の遺烈を偲びあふ「義士祭」は、今年もまた未曾有の事變下に芝泉岳寺において、盛大嚴肅に擧行されることと思ふ。

宜なるかな　明治大帝が初めて東京に幸し給へるとき、勅使を遣して義士の墓を弔せしめ、勅を賜うて義士精神を深く嘉賞あらせられた。また大正五年二月創立された中央義士會も、年々盛大に赴き、月刊「義士精神」も昨年（昭和十二年）十月で七十三號を重ねてゐる。

〔附記〕　忠臣藏の研究家

ルーマニヤ政府は三月二日（昭和十六年）駐日公使の更迭を發表したのであるが、新に任命された新駐日ルーマニヤ公使バグレスコ少將といへば、「忠臣藏研究の親日武官」とすぐ思ひ出される

ほどの馴染深い人である。

今から六年前の昭和十年二月、駐日ルーマニヤ公使館附陸軍武官兼海軍武官として初めて日本の土を踏んだジョルジュ・バグレスコ少將（當時中佐）は日本に來た以上、まづその精神を知るのが肝要だと早速選んだものが忠臣藏義士傳であつた。ところがこれを通讀した少將はことごとく感激、義、忠、恩愛、忍苦等日本人の持つあらゆる精神が表現されてゐるので、色々な觀點からこの精神こそ世界的に普及すべきだと餘暇のすべてを義士研究に捧げたのである。爾來三年の研鑽が實を結び昭和十三年春忠臣藏を中心とした「大和魂」（スフレト・ジャポネ）の第一部を羅、英、佛三ケ國語で完成出版し、外人の見た忠臣藏として好評を博した。

昭和十四年の二月、滯在四年の名殘りを惜しんで歸國したが、なほ日本精神の神髓に憧れ歐洲戰火の勃發した一昨年九月「大和魂」第二部、上下二卷を出版した。當時ルーマニヤ新聞の報道では同書は戰時體制下のルーマニヤにふさはしい讀物として熱狂的な人氣を集めたと傳へられた。

この「大和魂」完結篇たる第三部は日本美術支那美術から極東の政治經濟を縷說し、大東亞の

認識をもつて擱筆したといはれる。

また同少將は久しい前から樞軸協力を主唱してゐたが、故國にあること二年餘の間、ルーマニヤは多くの苦難を味はつたが、昨年秋の三國同盟加入によつて歐洲新秩序の一翼を擔ひ更生途上にある現在、駐日公使に榮轉して再び日本を訪れるバグレスコ少將は感慨無量のものがあらう。同少將は本年四十七歳、ルーマニヤの日羅協會長、在鄕軍人會長の椅子を占めてをり着任の曉には日羅親善増進が期待されてゐる。（東京日日新聞・昭和十六年三月四日記事）

（昭和十四年九月・典籍趣味十一輯、同十六年五月・同十七輯）

大東亞共榮圈と「倭寇」

「倭寇」といふのは、いふまでもなく倭——日本の寇賊といふほどの意味であるが、注意しなければならないのはこれは、その當時の朝鮮人や支那人がさういつたのであつて、決して日本人みづからが稱したのではないといふことである。そして、はじめは「倭○○に寇す」といふやうに、普通の名詞、動詞として用ひられてゐたものが、のち「倭寇○○を犯す」といふ風に、次第に固有名詞に轉訛していつたのである。

かれらが進出したのは、支那でいふと元の末から、つぎの明の中頃以後にかけてのことであり東は朝鮮半島より遼東、ついで北支の山東、中支の江蘇、浙江の沿岸沿江を席捲して、一時は南京にも迫り、さらに南支の福建、廣東の沿岸におよび、むろん臺灣にも海南島にも、その鋭鋒をあらはした。しかも他の一隊は、さらに南下し安南、占城、カンボヂヤや呂宋——フィリッピンなど、いまの印度支那および南洋諸島をのぞんで進擊していつた。

むろん、いはゆる「倭寇」のうちには支那人の倭寇――僞倭もかなりあつて、眞倭は殆んどないとか、十の二、三とかいはれてをり、實のところ日本の服飾や旗號などを眞似し、なかには頭を日本人のやうに剃つてゐるものもあつた。しかしながら、少くとも日本人を背景とするこの「倭寇」たちの大陸進出と南海雄飛とは、當時におけるいちじるしく膨脹したわが國内の經濟事情を默過するわけにはゆかず、したがつて自己の要求する通商貿易が容れられない場合には「商轉じて寇と爲る」ことが多かつたやうである。

今日、ややもすると、日本人の海外發展の素質について、疑ひをさしはさむ向きもないではないが、すでに今から五、六百年のむかしに、右のやうな邦人の活躍があつたことは記憶さるべきであらう。

さて「倭寇」の進出には、これよりさき日本を襲うた未曾有の國難「元寇」にたいする反動反撥の一面もあつたわけであるが、やがて不出世の英雄豐太閤が、戰國の亂世を一統して、ひとたびその兵馬の權をにぎるや、かねてより鬱積してゐた國民の餘力は、秀吉の包藏せる雄圖と結びついて、いはば倭寇の總決算ともなり、はからずも文祿・慶長兩度の朝鮮の役となつて、怒濤の

ごとく半島におしよせていつた。
結果からこれをみれば、おほむね不成功に終つたわけであるが、豊太閤の最後の目的は、決して朝鮮一國を平定するにとどまらず、進んで明を討ち、さらに遠く臺灣・呂宋・インドなども征して、東アジヤに一大統一國をうち建て、太閤みづからは、中支の要地なる浙江の寧波にあつてこれを統べ、北支の首都北京には、ときの帝の行幸を仰ぎたてまつり、當時ほぼかれの知つてゐた世界――東亞を統一するといふ雄大な計畫、すなはち從來の支那中心より日本を中心とする、いはば東亞新秩序の建設を胸に祕めてゐたのである。
されぱこそ、ヨーロッパ船が來航するやうになつて、わが海外交通が一大轉換を要するさなかにあつても、東西兩國民の角逐場の觀を呈した南洋の新天地にむかつて、日本人の渡海移住することは、御朱印船貿易の躍進とともにすこぶる眼ざましく、不便な交通機關も皆無の衞生設備も燃ゆる炎熱苦暑も、すべてを乘りこえて臺灣・澳門（マカオ）・東京（トンキン）をはじめ、ほとんど全南洋の要地に發展したのである。
ことに呂宋のマニラ郊外のディラオ・サンミゲル、交趾のフェイフホ・ツーラン、東埔寨（カ

ンボヂヤ）のピンハル・プノンペン、暹羅（タイ）のアユチヤなどには、人口三百から三千に達する純然たる日本町が發生し、軍事・宗敎・經濟の各方面にわたつて活躍した。しかし當時は、政府の奬勵や後援はおろか、反對に「鎖國」政策の强行によつて、さらでだに困難な人と物との補充をいよいよ不足ならしめ、ひいて内外各方面より相かさなる幾多の不利な條件が發生し、いはばその芽ばえの時期において、はやくも萎んでしまつたのである。

――時代はめぐつて、再轉三轉する。

フランス人は支那海――南海を稱して「東洋の地中海」といひ、臺灣と海南島とをその二つの眼になぞらへ、ことに海南島を「佛印の頭の上のランプ」とよんで重視してゐる。

刻下、われらの關心をたかめてゐる佛印・蘭印などをふくむ南支・南海・南洋の對策經營は、すなはち支那事變の處理、東亞新秩序の建設と密接な關係をもち、いはゆる東亞生命圈の確保、東亞共榮圈の樹立となつて、次第に政治・外交・經濟の各分野にあらはれようとしてゐる。

これをフランス人の言葉をかりていへば、つまりひろい意味における東洋の地中海――南海をめぐる東アジヤ諸國の新秩序であつて、いまや南の海における「二つの眼」を足場とするわが南

進策の前途は、實に洋々として大洋萬里、風濤天を蹴るの概ありといふべきであらう。ただし興亞の「興」の字は、同と四つ手の字から成りたつ。天の時・地の利とともに、つねに人の和の大切なことを忘れてはならぬ。

（昭和十五年八月・週刊朝日三八ノ九）

國姓爺合戰

このまへ日劇で、エノケンが「國姓爺合戰」を上演したことがあつたが、さきごろ新興でも、これを映畫化して大衆の人氣をよんで作品の內容からいへば、通俗的な凡作にすぎなかつたが、それはともかく、明朝の遺臣鄭芝龍を父にもち、わが肥前平戶の田川氏を母にもつ鄭成功を、かく大衆化し、われわれにしたしみやすいものにしてゐる傾向は、史實との相違とは別に、すこぶる注目すべき現象といはざるをえぬ。

さて、近松門左衞門（一六五三——一七二四）の原作にかかるその內容は——明の奸臣李踏天は韃靼に內通して祖國を賣るが、忠臣吳三桂は、先帝の遺孤をまもつて九仙山にのがれ、帝の妹の栴檀皇女は、危地を脫して、わが平戶に漂着し、和唐內（鄭成功）にすくはれる。のち和唐內は父の老一官（鄭芝龍）と、母（田川氏）とをともなつて明國にわたり、異母妹の錦祥女の夫である甘輝を獅子ケ城におとづれて、援軍をもとめる。はじめ甘輝は、これを承知しないが、妻とその

義母（和唐內の母、すなはち田川氏）との死にうごかされて、つひに和唐內と盟約をむすび、ともに力をあはせて韃靼をうちやぶり、奸臣の李踏天を誅し、幼帝をむかへて明朝を再興する。かくて和唐內は、めでたく國姓爺・延平王に封ぜられる――といふ筋である。

むろん當時の史實と相違するところが多いが、これが今日のごとく大衆の人氣をむかへたのは實ははじめてのことではなくて、すでにいまから二百三十年もまへに、空前の絕讚をあびてゐるのである。

すなはち正德五年――淸の聖祖の康熙五十四年（一七一五）、德川七代の將軍家繼のときであるが、その年の十一月一日に、竹本座で初演したところ、つひに三年ごし十七ケ月間の驚異的な連續興行となつた。まさしく歷史的の作品といふことができよう。けだしこれは、あたかも當時の日本が、長崎貿易を中心とする日淸の通商貿易によつて、一般の大衆にも、支那および支那人といふものが、すくなからぬ興味と關心の對象になつてゐたからであらうが、一方、舞臺をひろく日支兩國にとり、人物も日支の混血兒なる和藤內を主人公として、忠臣・奸雄・烈婦・美女いりみだれての、異國情緖ゆたかな構想の妙は、明朝再興の正義觀とともに、いたくわが國の人心に

投ずるものがあつたためであり、そこを題材としてねらつた近松の、するどくもゆたかな、非凡のさえをみることができる。

ただし、鄭成功に取材したのは、實は近松が最初ではなく、正德のすぐまへの元祿のすゑごろ――すなはち鄭成功が三十九歳の生涯を臺灣でをへてから、四十數年のちのことであるが、錦文流が「國仙野手柄日記」なるものをつくつてゐることを記憶せねばならない。

さて近松は、豫想外の人氣に、ついかりたてられて、二年のちの享保二年（一七一七）には「國姓爺後日合戰」をかいたが、さらに五年たつた同七年（一七二二）にも「唐船噺今國姓爺」をかいてゐる。しかしこのときは、すでに二番煎じ・三番煎じのたぐひで、まへのごとき人氣には投じなかつたものの、この前後より、その書き替へやモヂリなどの亞流がかず多くつくられてをり、後世にのこしたその魅力は、決して減少することはなかつた。

今日なほ、「樓門」や「獅子城」などが、歌舞伎で上演されてゐるし、また大正三年（一九一四）には、鹿島櫻巷氏の「國姓爺後日物語」のごときものもあらはれてゐるが、このたびのごとく、あらたな脚光をあびて登場もしてきてゐる。最近はラジオでも放送された。ただし、あまりゆき

過ぎた通俗化は史學のうへからはむろんのこと、國民文學の尊重のうへからも、心すべきであらう。

近松その他における鄭成功は、右のごとくであるが、日本人の血をうけてゐる鄭成功への關心がこののちとくにたかまつたのは、明治二十七・八年（一八九四―五）の日淸戰爭後のことである。すなはち臺灣が、わが領有に歸したときからであり、その史實についても各方面からいろいろと硏究せられはじめた。しかし、今日といへども、決して完全な硏究が、できあがつてゐるといふわけではない。さうして、鄭成功に關しては、わが國で精到な硏究のおこらないあひだに、かへつてヨーロッパ人が、かなりふかく手をそめてゐるのであつて、今日でもわれわれは日本・支那側の史料とともに、かならず西洋のそれを、大いに參考しなければならないのである。

けだし、明朝の復興を、生涯ただひとつの念願とした鄭成功は、父の鄭芝龍が淸に降參しても屈せず、母の田川氏が非命の最後をとげてもひるまず、福建の厦門・金門を根城として、日本をはじめ琉球・安南・交趾・暹羅（タイ）・呂宋などの南海諸國へも、さかんに商船をおくつて、軍資をうるための貿易をつづけ、ことに日本にたいしては、前後數回にわたり援兵・軍資を乞ひ、

一時は勢ひ大いにふるつて、揚子江にうつていで、まさに南京をも攻略せんとするありさまであつた。不幸、回天の一擊には失敗したが、しかも氣をおとすことなく、こんどはすすんで、南進策をくはだて、まづ臺灣を攻略してオランダ人を驅逐し、ついで呂宋を招諭してスペインをも慴伏せしめんとしたが、雄圖つひにむなしく、最後まで明の命脈をたもちつづけた永明王の永曆十六年（一六六二）、帝が淸軍の手にあひ果てたのと前後して、かれもまた三十九歲を一期として、あはれ病魔のため、臺灣の土と化したのである。

從來、北方の文化が、あきらかにされてゆくあひだに、南方のそれは、ややもすると、とりのこされる傾向にあつた。しかし、日本人の立場からいふと、南方の興味關心は、けつして北方におとらない。日本人の南洋發展の歷史は、これを雄辯にものがたつてゐる。また將來におけるわれわれの、最大關心のひとつでもある。今日、われわれは秀吉の雄圖や、山田長政・濱田彌兵衞らの生涯をおもひおこすと同時に、鄭成功のそれを回顧・硏究することも、けつして無意義なことではあるまい。

われわれの祖先は、二百年前に、異國情緖ゆたかな「國姓爺合戰」を生み、かつこれを鑑賞し

た。われわれの父祖は、數十年前に、日淸戰爭前後における臺灣の現實より、ふたたびかれを回顧した。われわれは今日、支那事變を契機として、はたして三たび、かれをいかに回想せんとするか。

（昭和十五年十二月・週刊朝日三八ノ二六）

昭和十五年皇紀二千六百年の東洋史學界

まづ著書についてのべ、つぎに學界消息におよびたいと思ふ。

著書のうち、通論乃至一般に入るものとしては、昨年（昭和十四年）喜壽をむかへられた市村瓚次郎博士の畢生の大著「東洋史統」（冨山房）がある。卷二まで刊行されたが、その完成をいのるのは、ひとり筆者のみには止まるまい。このほか、ちかごろラジオ講演でも活躍してをられる出石誠彦氏の「國史東洋史概說」（大觀堂）や、後藤末雄博士の「支那四千年史」（第一書房）加藤繁治氏の「興亡五千年支那歷史の話」（桑文社）などがある。

つぎに政治外交方面では、日支關係がめだち、宇野正盛氏の「日支交涉二千年譜」（秀文閣）木宮泰彦氏の「日支文化交涉一覽圖と年表」（冨山房）牛場友彦氏の「日支文化關係史」（日本國際協會）のたぐひより、ちかく筆者が歷史學研究十一ノ三で紹介した志田不動麿氏の「東洋史上の日本」（四海書房）などがある。あとは、瀧川政次郎博士の「支那法制史研究」（有斐閣）ぐらゐなもの

である。

社會經濟方面では、池田靜夫氏の「支那水利地理史研究」（生活社）岡崎文夫博士と同氏との共著「江南文化開發史」（弘文堂）・田中酉藏氏の「中國水利史」（東亞研究所）、および守屋美都雄氏が歴史學研究十一ノ二にも紹介された諸橋轍次博士の「支那の家族制」（大修館）があげられる。

文化方面では、常盤大定・關野貞兩博士による「支那文化史蹟」（法藏館）が第九輯まで刊行されてをり、思想教育關係のものとしては、荒原不死生氏の「東洋基督教史」、川波和夫・富田義雄氏の「日本精神東洋思想・原典の研究」（モナス）と、山崎道夫氏の「支那教育史」（人文閣）下条がある。なほ、これは民國以來のものであるが、橋川時雄氏の「中國文化界人物總鑑」（中華法令編印館）も、ここに紹介しておかう。

つぎに論叢叢書の類をみわたすと、まづ今春（昭和十六年）、還暦をもつて東京帝大を退かれる加藤繁博士らの編纂にかかる「池内博士還暦記念東洋史論叢」（座右寶刊行會）があげられ、また「東亞論叢」（文求堂）、「東亞學」（日光書院）も、ひきつづき刊行されてゐる。京都では羽田總長監修の「支那歴史地理叢書」（冨山房）が、いよいよ堅實な歩みを示してゐるとおもへば、東京では、今

井・和田・中村三教授監修の「歴史學叢書」(螢雪書院)亞細亞研究編・十二卷が逐次上梓されてをり、同時に辻・今井・和田三教授の監修によつて「世界歴史」(河出書房)十卷が、着々刊行されてゐる。後者は、名のしめすごとく、東洋史にかぎらぬものであるが、近代に重點をおき、日本東洋西洋史をうつて一丸とした世界史を體系づけんと試みたもので、すくなくともその意圖は注目すべきであらう。「東洋史講座」(雄山閣)・「世界歴史大系」(平凡社)・「世界文化史大系」(誠文堂新光社)などが、依然として再版・再豫約などをしてゐるのも、皇紀二千六百年、および時局が、いかに歴史的認識を要求してゐるかを示すものといへよう。

なほ、飜譯ものとしては、「支那文化史大系」(大東出版社)があり、婚姻・政治思想・商業・宗敎思想の各史が刊行され、そのほか立花士郎氏は「アジア民族運動史」(大日本版社)、原勝・角田次郎兩氏は「支那社會政治思想史」(日本青年外交協會)上卷、高山洋吉氏はA・M・コテネフの「支那軍事史」(育生社)、柴田賢一氏はE・L・ホーフポットの「支那通史」(高山書院)、岡崎三郎氏はラツウレットの「支那の歴史と文化」(生活社)、布施知足氏は陳登原の「支那文化史」(白揚社)を、それぞれ飜譯してゐる。をはりに、中國における于式玉・劉選民氏編の「一百七十五

種日本期刊中・東方學論文篇目附引得」（燕京大學圖書館引得編纂所）の刊行されたことも、つけ加へねばならない。

つぎに學界消息のことに、一言ふれておく。

まづ　聖上陛下の東京帝大御臨幸（十月八日）に際して、文學部においては、原田淑人博士の「渤海國上京遺蹟及び遺物」、史料編纂所においては、鐵砲・安南史料など、東洋史關係のものも天覽に供し奉つたことは、注意さるべきである。

つぎに東洋文庫では、岩井大慧氏が「東洋文庫十五年史」を編纂され、東方文化學院では、十周年記念として講演（三月十二日――二十二日）や、東方學報十一ノ一を記念號とし、東方學報總目錄・東方文化學院一覽も發行された。つぎに日本諸學振興委員會では、第二回歷史學會（十一月七日――九日）を文部省に開き、その主題にも、「世界文化ノ交渉ニ關スル諸問題」「東亞乃至世界新秩序ニ關スル諸問題」などを選び、研究者また多くこれらに關する問題を發表した。また上野松坂屋では、東京日日新聞・外務省後援のもとに「日華外交展覽會」（四月四日――十四日）がひらかれ、そのほか雜誌・新聞・ラジオなどにも、東洋史關係の論說が多かつた。この間、學界の耆

宿、稻葉岩吉博士（五月二十三日）と羅振玉氏（六月十九日）を喪つたことは、痛惜の情にたへない。

以上、杜撰ながら昭和十五年皇紀二千六百年の回顧として、著書、學界消息などにつき、あらまし述べた。紙數の關係から、事實の羅列となつてしまひ、論文そのほかは殆んど割愛した。展望とともに、別の機會にゆづらねばならぬ。

（昭和十六年五月・歷史學研究十一ノ四・五）

葦の髄から

一　西暦二千年と日本

今年（昭和十六年）の紀元節をおくり、近ごろすこし落ちついてみると、いまさらながら、すぎさつた二千六百年の巨大な歴史の歩みが、ふたたび沁々とおもひめぐらされる。

去年（昭和十五年）は二千六百年といふキチンとした數のせゐか、百年まへの二千五百年はどうであつたか、あるひはまた、百年のちの二千七百年はどうなるであらうか――さらに二千八百年は、三千年は、などと考へてみたことであつたが、實をいふと、百年のうちのことといへば、すくなくとも、われわれの孫の代のことであつて、今日のやうに、日進月歩、變轉きはまりない世界の情勢にあつては、なんとなく現在のわれわれとは、緣のとほいもののやうに思はれてならない。それで私は五十歩百歩のうらみはあるが、六十年のちの紀元二千六百六十年――すなはち西曆二千年といふ年を考へてみた。

この年なら、去年生れた家の長男が、ちやうど還暦をむかへるその年であり、十代、二十代の少青年はもとより、われわれにも、きはめて身ぢかくかんぜられる。私は毛頭、日日激變する今日の情勢に對處する覺悟や、またやがてきたるべき紀元二千七百年を、かろくみるものではないが西暦二千年といへば、ほぼその中間にくらゐし、これまた、まさしく「千載一遇」の歴史的巨歩であつて、未曾有の世界の祭典となるべきことは、いまからでも、われわれの想像にかたくない。その盛典こそは、事情は異るとはいへ、はるかに、オリンピックの「民族祭典」を凌駕するであらう。

私は、さきに紀元二千六百一年の佳節をおくり、近くは滿洲建國九周年をむかへたについても百年のちの二千七百年を、孫に期待するにさきだち、まづ六十年のちの西暦二千年を、子に期待しつつ、精進したいと祈る。

明治以來七十餘年の努力は、日本を現在の地位にまで、おしすすめた。西紀の世界的祝典なればこそ、ある意味では、かへつて皇紀の國内的祝典にまさり、六十年後の東亞、いな世界におけ る皇國への期待は大きい。ただし、激變つねなき緊迫せる現今の世界情勢よりこれをみれば、痴

人の夢といはれるかもしれないが――。」

二　支那稱呼の統一

ここで、支那のよびかたといふのは、支那といふ語源が、始皇帝でなだかい秦（シン）であるか、絹の原産地をよぶセレス、セリカであるか――等々の諸說を再檢討するのではなく、現代支那を、われわれが、いかに呼び、かつ記すか――を問題にする。すなはち、われわれは、「支那」とよぶ以外に、「中國」「中華」ともいひ、日支・日華とならべ稱してゐる。

これに對し、いはゆる支那においては、ほとんど、みづからは支那とはいはず、中國・中華といひ、おほむね中日と熟字にしてゐる。

さて、わが國において、公文に淸國を支那國と改稱するやうになつたのは、いまから二十九年まへの、大正二年（民國二年）七月からのことで、當時は山本內閣であつたが、現在、支那人、みづからが、稱するをこのまね、しかも歐米そのほか他稱の支那、支那人、日支といふやうなよびかた、しるしかたは、この際、一考すべきではなからうか。

シャムはタイ（泰）となり、ペルシャはイランと國名をあらため、そして、われわれもまた、このよびかたにしたがつてゐるではないか。日本も、むかしは支那から倭とよばれたが、『舊唐書』日本傳をみると「倭國自ら其の名、雅ならざるを惡み、改めて日本と爲す」とあつて、そののちは、支那も倭といはず、日本と稱してゐる。

われわれもこの際、いはゆる支那および支那人を、正式によぶのにはたとへば、中國・中國人といふやうに、稱呼も書式も一定し、日支にしても、語は熟してゐないが、日中とか、もしくは日華とかに統一すべきではなからうか。

むろん、支那といふ文字を抹殺するなどと極論するのではないが、われわれは、自分の名前が他人にあやまつて發音されたり、まちがつて書かれたりすると、きはめて不愉快である。これは國の場合でもおなじだといへよう。わが國も近來、日本はニッポンと發音すべしと聲明してゐるではないか。

三　史學部の獨立

現在、大學の史學科が、國史・東洋史・西洋史の三學科にわかれてそれぞれ文學部のうちに併立してゐることは、いふまでもない。ここに史學部の獨立などといふと、その語調からいつてあるひは文學部や、目下これに包括されてゐる他の諸學科に對して、ことさらに弓をひくやうにひびくかもしれない。しかし、私の卒直な考へをいふと、決して他と區別して地盤をつくる、といつたやうな狹いかんがへからきてゐるのではなく、かくなるのは、もはや時代の要求のやうでありしかも、かくなることになつて、一層、史學本來の面目を發揮しうるにいたる、と信ずるからである。

いふまでもなく、いかなる職域にはたらくにしても、歷史的經驗および認識を必要としないものは、皆無といつてよい。ことに、最近におけるわが國の現狀からいつても、あるひは紀元二千六百年の大典を機とし、あるひは支那事變、ヨーロッパ戰爭などの影響もあつて、今日の日本を正しく理解しようとするには、もはや歷史を無視しては、たうてい個人の生活さへできなくなつてをり、歷史は今や國民の常識とさへなつてゐる。

高等文官の試驗にも國史が心要となり、高專の理科系統の入學試驗にも、またその教科目のう

ちにも、あらたに國史が加はへられてきた。東洋史・西洋史についても、同樣のことが、かならず近い將來に實現せられるとおもふ。これらの事實は、現代日本における歷史の必需性、普遍性を、雄辯にものがたつてゐるものであらう。さらに近ごろは、ラジオにおける歷史の講座講演などが、一般にすこぶる歡迎されてをり、またわれわれにしても、いままでは、かつて歷史などには關心さへもたなかつた人々から、「國史・東洋史のよい概說書は何か」といつたやうな質問を、たびたびうける。時勢が、すでに刻々うごいてゐる證據である。

私がここに提唱する史學部の獨立は、いろいろの傳統や、經濟上、形式上の問題や、そのほか煩雜な事情もあつて、さうたやすく實現はできないかもしれない。しかし、以上のごとき今日の情勢は、かならず近い將來において、國史・東洋史・西洋史の三學科――もしくは、その他の若干の學科をも包含し、これらをうつて一丸とした史學部の獨立が、期待される。さうして、他の文科系統の法學士、經濟學士、等々とともに、史學士・史學博士などの稱號もあらはれることであらう。

ただし、根本の問題は、形式をととのへることではなくして、あくまで日本における歷史學研

究の内實性にあることを忘れてはならないが、これは私が、紀元二千六百年の紀元節にあたつて、しみじみ感じたことであり、ここに史學部の獨立を、力づよく提唱する所以である。

（昭和十六年六月・世界歷史月報）

日本刀歌

櫻花、富士山——これらは、いづれも日本の心を象徴するものとして、古來、内外人のこれを詠じたものは少くないが、やはりその一つ、日本刀について、お隣りの中國人が、どうみてゐたか。

宋の歐陽修（一〇〇七——七二）といへば、今から九百年ほど昔、わが國では第六十六代　一條天皇から、第七十一代　後三條天皇のころの人であるが、一世の學者、文豪として、とくに名だかく、かれは初めて「日本刀歌」と題する七言二十四句の長詩を賦した。

この詩は、全體を八句づつ、三段にわけて説明することができる。第一段は、切玉の寶刀——日本刀そのものを歌ふ。

魚皮の裝貼、香木の鞘。　黄白、間に雜る鍮と銅と。
百金傳入す好事の手。　佩服して以て妖凶を攘ふ可し。

いかにも雄游の美が、眼にみえるやうである。

第二段は、轉じて日本の風土を歌ひ「土壤沃饒にして風俗好し」といひながら、華夷思想にもとづく同祖同源論を妄信し、始皇帝で名だかい秦の徐福の入海求仙を、日本止住にむすびつけてをり「今に至るまで器玩、皆な精巧」なのも「士人、往往、詞藻に工み」なのも、暗に中國文化のお蔭のごとく詠ずる。

第三段は、以上の結論であるが、中國に先王の大典なく、かへつて夷貊である日本に「逸書百篇、今猶ほ存す」といふのは、まことに羨望と悲哀にたへない。かれを思ひ、これを思へば、「人をして感激し、坐ろに涕を流さしむ」るのであり、結局は、「繡澁の短刀、何ぞ云ふに足らん」である。

賦してここに至り、われわれは、歐陽修が題を日本刀にかりながら、結局は、他を言はんとしてゐることが明かとなる。武をあげて文にをさめ、日本をのべて中國に歸するあたり、さすが當代第一流の政治家、文豪としての面目をうかがふとともに、今日といへども、この一篇の詩よりなほ多くの示唆を提供してゐると思ふ。

（昭和十六年十月・科學主義工業五ノ一〇）

大伴部博麻の尊皇愛國

一

さる昭和十六年の初夏、やがて支那事變第四周年をむかへんとする七月一日夜の國民常會において、近衞前首相の放送された講演のうちに「愛國」にちなんだ大伴部博麻の物語は、舞臺を日鮮華にとる、當時においては、もつとも雄大な、しかももつとも深刻な場面を活寫したものとして、まことに興亞奉公日にふさはしいお話と拜聽した。

私はいまここに、その話を再びくりかへしてのべるつもりはないが、一年まへのその當時の國情と、一年のちの今日の國情とが、大東亞戰爭をさかひとして、霄壤の相違あることに思ひをいたし、感銘をあらたにするために、この物語の出典である「日本書紀」の記事のうち、大伴部博麻に賜はつた詔を、つつしんでここに記し奉らうとおもふのである。

二

「日本書紀」卷三十、高天原廣野姫天皇すなはち第四十一代持統天皇の四年――中國では唐の則天武后の天授元年（六九〇）冬十月乙丑の條には、つぎのごとくしるされてゐる。

乙丑、軍丁筑紫國上陽咩郡の人、大伴部博麻に詔して曰く、「天豐財重日足姫天皇―第三十七代齊明天皇、皇極天皇重祚―の七年（六六一）に、百濟を救ふ役に於いて、汝、唐の軍の爲めに虜はれ、天命開別天皇―第三十八代天智天皇―の三年（六六四）に洎びて、土師連富杼、氷連老、筑紫君薩夜麻、弓削連元寶兒の四人、唐人の計らふ所を奏聞さむと思欲へども、衣粮無きに縁りて、達くこと能はざることを憂ふ。是に博麻、土師富杼等に謂りて曰く、『我れ汝と共に本朝に還向かむと欲ふも、衣粮無きに縁りて倶に去くこと能はず、願はくは我が身を賣りて、以て衣食に充てよ』。富杼等、博麻の計の任に、天朝に通くことを得たり、汝、獨り、他界に淹しく滯ること、今に卅年になりぬ。朕れ厥の朝を尊び國を愛ひて、己を賣りて、忠を顯はすことを嘉す。故れ務大肆、幷せて絁五匹、綿一十屯、布卅端、稻一千束、水

田四町を賜ふ。其の水田は曾孫に乃至せ。三族の課役を免し、以て其の功を顯さむ。」

三

日本武人の本懷は、散るべきときに散る櫻花のいさぎよさこそ、ゆかしいものであらう。しかるに、大伴部博麻は、武運つたなくも百濟を救うてならず、唐軍のために一時、捕はれの身となつた。しかし、かれの盡忠報國の赤誠は、一日としてゆるがせにされたこととてはなかつた。そのはては、わが身を奴隷にまで賣り、まさしく身をもつて困難にささげた。春風秋雨三十年の滯留は、まつたく苦難忍從の半生を、大陸におくりむかへたことであらう。

千三百年前における、大伴部博麻のこの實例は、三寸の息、絶えなんとして絶えず、自己のなしうるあらゆる手段、方策をめぐらし、人事をつくして天命を待つ底力、粘りづよさを如實にしめしたものとして、櫻花の散るごときいさぎよさとともに、日本精神の双璧と稱すべきものであらう。

ちなみに「愛國」の語は、右にしるし奉つた「朝を尊び國を愛ふ」の詔に、その起源をもつも

のである。

四

なほ、博麻の郷土なる筑紫國上陽咩郡（かみつやめのさと）といふのは、いまの福岡縣八女郡北川內村にあたり、すでに鄕土においては四十年來、尊朝愛國の權化としてしられ、每年四月十日には、同村の善神王山頂にある博麻の墓碑のまへで、近傍の人々により嚴肅な招魂祭がおこなはれてゐたし、また附近の國民學校では、敎材にも使用されてゐた。

昭和十五年、白井喬二氏が「瑞穗太平記」にこの事實をとりあげられてからは、この愛國者の事蹟が、福岡縣の一部にとどまるを遺憾とし、在京の增永元也・眞名子兵太・塚本嘉次郎の諸氏が、地元の北川內村と連絡し「尊朝愛國大伴部博麻顯彰會」を結成し、浪曲などによる通俗化がこころみられてゐた。

ところが、昨年はからずも近衞公によつて全國に放送されるや、一躍著名となり、顯彰會でもこれを機會に全面的普及をくはだて、浪曲のほか映畫・演劇、さらに冊子の作製頒布、一歩すす

んで博麻神社の建設、および博麻の歸國後、團子長（師團長）として諸國を巡歷し、築城を指導した舊蹟の保存などにも、力をつくされてゐる。

（昭和十七年十月・大陸會報創刊號）

元寇をめぐる日支外交の一面

一

皇國未曾有の國難であつた蒙古襲來前夜における、日支の外交交渉のうちには、相互に注目すべきものが多いが、元の世祖忽必烈の使者として、わが九州の太宰府にきたり、文永八年、十年――元の至元八年、十年（一二七一、七三）の兩度にわたり、日本招諭の任にあたつた趙民弼の活躍を見のがしてはならない。

至元十年、かれが歸國し、世祖に報告した外交交渉の始末は、つぎのごとくであつた。便宜上「元史」卷一五九、趙民弼傳を參考したと思はせる「新元史」日本傳の記事をかかげる。

臣（趙良弼）、太宰府に至り其の不恭の罪を數め、諭すに禮を以つてせり。意ふに、太宰府の官、愧ぢ服し、國書を求む。臣、曰はく「必ず汝が國王（日本國王）に見えば、始めて之れ（國書）を授けん」と。往復すること數回。兵を以つて臣を脅かすに至りしも、終ひに與へず

但だ副本を以つて之れに示せり。後ち又聲言す「大將軍、兵十萬を以つて來り、書（國書）を求む」と。臣、曰はく「國王に見えずんば、寧ろ我が首を持ちて去れ。書は得べからざるなり」と。日本、臣の屈すべからざるを知り、使介十二人を遣はして入覲せしむ。かれが決死の外交談判は、元廷また人ありといふべく、世祖をして「卿（趙民弼）は君命を辱しめずと謂ふべし」と嘉納されたのである。

二

なほ、かれの日本觀、および日本征討に對する意見も、同時に注目しなければならぬ。「元史」趙良弼傳には、つぎのごとくみえてゐる。

臣（趙良弼）日本に居ること歳余、其の民俗を觀るに、狼勇嗜殺、父子の親、上下の禮を知らず。其の地、山水多く、耕桑の利無し。其の人を得るも、役使すべからず、其の地を得るも、富を加へず。況んや、舟師、海を渡るも、海風、期無く、禍害、測る莫きをや。是れを有用の民力を以つて、無窮の巨壑を塡むと謂ふ。謂へらく、擊つ勿きは便なり。

かれの日本觀察には、むろん認識不足のところもあるが、日本征討に對する意見も、傾聽にあたひすべきものであつた。

世祖が、あるひは「但だ名を後世に垂れんと欲するのみ」といひ、あるひは「外無きの名を以つて、天下に高くせんと欲するのみ」といふやうな虛榮もつよくはたらいて、日本遠征を强行した結果は、はたしてどうであつたらうか。

三

弘安四年、すなはち元の至元十八年（一二八一）、世祖は、いよいよ日本征討の議を決し、日本行省右丞相の阿刺罕（あらかん）、右丞の范文虎、および忻都、洪茶丘らを、それぞれ部隊長とし、十萬の兵を統べて、日本に進ましめたのであるが、その進發にさきだちて、これら諸將を戒めた世祖の敕は、注目すべきものであつた。「元史」日本傳には、つぎの如くみえてゐる。

朕、漢人に聞くに、言ふ「人の家國を取るには、百姓、土地を得んと欲す」と。若し盡く百姓を殺さば、徒らに地を得るも何の用かあらん。又、一事有り、朕、實に之れを憂ふ。恐ら

くは卿が輩和せざらんのみ。假りに若し彼の國の人至り、卿が輩と議する所有らば、當に同心協謀、一口に出づるが如くして、之れに答ふべし。

征戰は、ただ土地を得るだけではなく、そこに居住する「百姓」のことを充分考へよといひ、諸將の「和」を强調し、日支交渉の際あらば、同心協謀して、あたかも一口に出づるが如くせよ。と戒むるあたり、ことばは平凡ではあるが、さすが亞歐にまたがる、未曾有の蒙古大帝國を建設した世祖の面目をうかがふことができる。

四

戰爭にスパイはつきものであるが、「元史」巻一四〇、鐵木兒塔識傳をみると、日本が「人を遣はし、國事を刺探する者を告」げてゐる記事がある。個人の利害に動かされて國家を忘れたかかる態度は、すこぶる遺憾といはざるをえないが、これを聞いた鐵木兒塔識は刺探は敵國に在れば固より之れ有り、今ま六合は一家、何ぞ刺探を以つて爲さん。設し果して之れ有るも、正に中國の盛を觀しめ、歸りて其の王に告げ、化に嚮ふを知らしむ可し。

といつてゐる。これは徒らに中華思想をもつて鷹揚にかまへ、諜者、防諜などを輕視してゐる傾向がみられるが、しかし國内においては、政治、經濟、文化の各面に不動の信念と鐵石の團結とをしつて、國力の威容を顯揚し、ここにいふがごとく、諜者をして乘ずる機會をあたへず、刺探の餘地なからしめることが肝要であらう。

（昭和十八年四月・大陸會報一ノ一）

大日本洲

伏して謂るに、我が國威擴まり遐邦に揚る。前世香椎聖廟親しく西を征し則ち韓地悉く我が有と爲る。その後野素（エゾ）・靺鞨二地歸服せり。延て後世に迨んで爪哇・呂宋・臺灣・琉球等の如きに至つても亦然り。倚與（アヽ）隆んなる哉。輓近、歐羅巴地勢を以て渾地を分ち、大洲の名を建て各國を統領す。謂へらく、域中の大地盡せり矣と。其の識實に他邦に超過す。然れども頻りに罷置沿革有りて嘗て定簿すること莫し。此の如んば則ち安んぞ得て地勢を盡すと謂はんや。猶且つ其の亞細亞の如き南は蘇馬答剌（スマタラ）・呂宋等に至り、東は支那・日本に至ると謂ふに及んでは、則ち焉んぞ之に從はん。何となれば則ち亞細亞の區域の如きは、南は麻剌加（ラカ）に至り、東は支那に至り、西北二方の如きに至りては、曾より舊に仍らば、則ち斯れ其の地勢自然にして最も人の能くする所に非るなり。蓋し竊かに惟るに、我が本國より遥南の蘇馬太剌・和蘭得亞那花（ヤノウハ）、正南の那花魏企亞（ノウハクイネヤ）（ニユーギニヤ）等の地に至つては、則ち各地散處すと雖

も、自ら別に一大洲を成すの地勢有つて、亞細亞の所屬に非ること最も分明なり。是によつて敢て新に一大洲を借置し、稱して以つて和兒知斯爺摩多(Fortis Yamato)と云ふ者は、其の意特に本國を主として各地を將て之に屬す。かの三韓・野素・靺鞨の如きは、固より亞細亞の所屬たり。然りと雖も皆共に我が版圖に附する時は、則ち奈何ぞ之を他と爲さんや。然らば則ち此の洲の屬する所の如きは、西は韓地・靺鞨に至り、北は野素等の處に至り、瀕南正南の如きは則ち既に上の云々に仍る。而して又和兒知斯を以て此の大洲の首稱と爲すものは、竊かに是を諸國威に取る也。和兒知斯は西土の雅語、此に譯して威德と云ふ。

右は、わが櫻町天皇の元文年間、すなはち清の高宗の乾隆初年に相當するが、オランダから齎載した天體と地球の二圖を、長崎奉行所の北島見信が解說した「紅毛天地二圖贅說」にのべるところである。いはゆる「西洋大洲を建置する外、新に一大洲を借置する說」とは、從來のアジヤ・ヨーロッパ洲などのほかに、日本を中心として北は蝦夷(野素)・滿洲・シベリヤ(靺鞨)より、西は朝鮮、南は琉球・臺灣・フィリッピン・スマトラ・ジャワ・ニューギニヤなどの南方諸國を包含して別に一大洲をおき、ホルチス・ヤマトと命名すべきであるといふのである。ホルチスとは

ここにも見えるやうに威徳の義なれば、これを大日本洲と呼稱して不可なからう。「紅毛天地二圖贅説」については、すでに大正四年七月に新村出博士が「典籍」二號にのべられたところであり、近くは本庄榮治郎博士が「先覺者の南方經營」（ラジオ新書九一・昭和十七年九月）において言及されてゐるが、ほぼ今日の大東亞共榮圏の構想を、はやくも二百餘年前に豫見したものといふべきか。

なほ今の東太平洋を大日本海と呼稱したことは　光格天皇の文化五年—淸の仁宗の嘉慶十三年（一八〇八）に山下・存統が公刊した「閣浮提圖附日宮圖」にみえ、つづいて文化七年（一八一〇）刊の高橋景保の「新訂萬國全圖」以下十餘種の地圖にもこの名稱をおそうてをり、明治三年淸の穆宗の同治九年（一八七〇）刊の「明治改正萬國輿地分圖」にまで及んでゐる。これらの由來については、鮎澤信太郎氏の「大日本海」（京成社刊）に詳らかであるが刻下、苛烈悽愴なる一大決戰を展開しつつあるこの大日本洲・大日本海に至正雄渾なる大東亞共榮圏を確立することこそ、現下みたわれらの果すべき一大使命であらう。

（昭和十八年九月・大陸會報一ノ三）

支那文化の日本への影響

小論は昭和十六年八月、海外宣傳紹介雜誌 NIPPON 27（日本報道工藝株式會社發行）に英文で發表した拙稿 Influence of Chinese Culture on Japan の和譯である。原文には多數の挿畫およびこれの說明が附加されてゐるが、それは一切省略した。また本文の記述にも若干の出入がある。年號に西曆を用ひたのは發表誌の性質上、便宜使用したにすぎず今はしばらくそのままとし、西曆の下に日支の年號を併記しておいた。

一　日本文化の逆輸入

海は國と國とをへだてるものである。しかしまた、海なればこそ、かへつて陸上の交通が不可能なやうな時代にあつても、扁舟に棹さして往來することができる。ゆゑに、海は國と國とをへだてると同時に、また兩者をたがひにむすぶ。

まして支那大陸と日本のごときは、一衣帶水の關係にあつたから、兩國の交涉往來は、きはめて古い時代よりおこなはれたことは、想像にかたくない。

奈良時代（七一〇―七九四）の前後においては、わが國では、名だかい遣隋使や遣唐使をかの地におくり、學生、學僧を留學せしめて、ひたすら支那文化の吸收につとめ、もつぱらその模倣に力をそそいでゐた。

しかるに、平安時代（七九四―一一八五）にはいると、日本文化の獨立といふことが、次第にかんがへられるやうになり、やがて、わづかながらも、こんどは支那にむかつて文化の逆輸入をするやうになつてきた。これは日支文化交渉史上、まづ注目すべきことがらであるから、つぎに若干の實例をしめさう。

西暦九二七年（醍醐天皇の延長五年＝五代唐、明宗の天成二年）に、興福寺の僧が入唐した際に、當時、わが國で著名な學者であつた菅原道眞、紀長谷雄、橘廣相、都良香らの詩集、および書道の名手であつた小野道風の行書、草書をもたらし、支那に流布せしめられたことがある。これは日本の文學、ないし書道が、支那に對して、誇るにたるべき特長があるといふ自信があつたために相違なく、ことに書道においては、こののち西暦一〇〇三年（一條天皇の長保五年＝宋眞宗の咸平六年）に、僧寂照（後出）が入宋したとき、わが藤原道長らの書を激賞した事實によつて、これをう

らがきしてゐる。

つぎに聖德太子の御著「勝鬘經義疏」のごときも、はやく唐にもたらされたが、唐の僧侶の手により、さらにこれに註釋が加へられたこともある。日本人の佛敎の著作が支那にわたり、これに支那人が註釋を加へたといふのは、一種の文化の逆輸入と稱すべきであらう。

佛敎は、平安時代になると、いよいよ日本化したが、これを代表する淨土敎について考へてみると、源信和尙のことが思ひおこされる。かれは、日本淨土敎のよりどころとなつてゐる「往生要集」を著はしてゐるが、西曆九八五年（花山天皇の寬和元年＝宋太宗の雍熙二年）には、この著書その他を、宋の商人に託して支那にひろめさせた。このとき、天台山では、貴賤男女五百餘人が淨財を喜捨して、たちまち五十間の廊屋をつくり、供養禮拜したといはれ、のちには、宋より源信の影像をもとめに來てをり、また宋の皇帝の詔によつて源信の廟をたて、その影像および著書を安置せしめたこともある。佛敎の渡來してより、このときまで凡そ四百五十年を經てゐるが、この間、支那から佛書を傳へこそすれ、わが國より送ることなどは、前記の聖德太子の御著作以外には、かつて無かつたことである。それが、このやうに逆の狀態になつてきたのは、まつたく日

本佛教の獨立の證據であつて、わが文化の逆輸入といふべきである。

なほ、源信は、そののち十年ほど經つた西暦九九二年（一條天皇の正暦三年＝宋、太宗の淳化三年）因明――印度の論理學に關する著作を、因明學研究の本場である宋へ送つてゐるが、これもまた、みづから深く信ずるところがあつたためであらう。

それから數年を經て、西暦九九七年（一條天皇の長德三年＝宋太宗の至道三年）に、宋から佛書をおくつてきた。これは、その交換として、支那で亡佚したところの經典を、日本から送つてこれを補ふことを條件としたものであつた。しかるに、宋國がおくつてきたこの佛書は、その文が淺薄で、とるに足らなかつたから、つひに破毀されてしまつたことがある。この一事は、宋朝の天台宗がすでにおとろへ、これに反し、わが佛法の隆盛であつた事情の一斑が、うかがはれるのである。

それからまた數年を經て、西暦一〇〇三年（一條天皇の長保五年＝宋眞宗の咸平六年）にいたり、僧寂照（前出）が入宋した。このときは、天台に關する二十七ケ條の疑問を携へていつたが、宋僧たちは、その問書の深遠なのに驚嘆した。また、このとき彼は、支那に逸せる佛書をたづさへ

て行つたが、これも日本文化の逆輸入と稱すべきものであらう。

さらに、寂照一個人についても、また名譽ある話が、いろいろ傳へられてゐるが、たとへば、かれの書道についても、宋の人たちが「中土、書を能くする者、亦た及ぶもの鮮し」と激稱してゐるほどであつて、かれの入寂するや、かの地において手あつく祀られた。

二　宋文化の影響

讀者は、私が本來、支那文化の日本におよぼした影響をかたるべきであるのに、いきなり逆に日本文化の支那への影響から說きはじめたことについて、多少、奇異に感ぜられたかもしれない。實は私自身も、本末顚倒と考へないこともないのであるが、要するに、私の言ひたかつた點は、わが奈良時代の前後において、支那文化の採用に全力をかたむけてゐた日本が、平安時代になると、はやくもこれを咀嚼吸收し、融合同化して、日本的の文化をつくりあげ、さらにこれを支那に逆輸入していつたといふ、その日本文化の特質、乃至その性格の一端にはやく觸れたかつたためである。

むろん、この間にも、支那文化は、日本文化の母胎として、ますます重要な役割を果たしてゐたのであり、この關係は、ひきつづき元・明・淸の各時代にまでおよんでゐる。

それでここでは、まづその前の宋文化の影響からのべよう。

まづあぐべきは、佛敎の弘通である。日宋の交通が頻繁になるにつれ、入宋僧の數もすこぶる多かつたが、その主なるものだけでも、西暦一一六七―一二七五年（六條天皇の仁安二年＝南宋孝宗の乾道三年より後宇多天皇の建治元年＝南宋恭宗の德祐元年まで）の約百年間に、六十數人をかぞへることができる。俊芿とその弟子、および眞照らは、禪宗の傳來に貢獻したことによつて知られ、重源は名だかい淨土五祖の像を將來したことによつて知られてゐる。

つぎに、書籍の輸入をかんがへてみよう。それがどんな書物であつたかといふと「文選」とか「白氏文集」といつたやうな文學的のものから、「唐書」・「五代史記」のやうな歷史書、それから一千卷もある宋代の類書「太平御覽」のやうな大部なもので、しかも、それまでに半島の高麗から、しばしば懇望されて、與へなかつたものまでも、どしどし輸入された。そして、西暦一二六

〇年（龜山天皇の文應元年＝南宋理宗の景定元年）ごろには、「太平御覽」だけでも、すでに日本に數十部も所藏されてゐたやうである。

そのほか、朱子學關係の書も、次第に輸入されたし、「一切經」（後出）もまた、宋においてはじめて雕造された翌年――西曆九八三年（圓融天皇の永觀元年＝宋太宗の太平興國八年）はやくも入宋の僧、奝然がこれを求めてをり、しかもこの大部なものが、そののちしばしば日本に將來されてゐる。

さて、このやうな種々の書籍や、大藏經などの傳入は、やがてわが國の印刷術のうへに、大いなる影響をあたへることとなつた。

そもそも日本の印刷術は、いつも外國交通の盛衰に左右されることが多かつたから、奈良時代から平安時代の初葉にかけては盛んであつたが、のち一時おとろへ、つぎに平安時代の末葉から鎌倉時代（一一八五―一三三三）にかけて、また盛んになつた。なかんづく、佛教の興隆とともに佛教經典類の開板せられたものがもつとも多く、西曆一二七八―一二八七年（後宇多天皇の弘安元年＝南宋帝昺の祥興元年――弘安十年＝元世祖の至元二十四年）のころには、一切經（前出）の開板さへ

企てられてゐる。

美術方面に眼を轉ずると、まづ繪畫においては、宋朝の影響をうけて、色彩が淡雅・瀟洒になり、用筆が自在、巧妙になつて、澁滯するところがなく、線の肥瘠がいちじるしくなつてきた。平安時代の線は、ただ區劃の用をなしてゐたにすぎなかつたものが、こんどは筆力はすこぶる活動にとみ、色彩も淡白となつた。

なほ、注目すべきは、この時代に肖像畫の流行したことである。その理由は、第一には、寫實の風がおこなはれるにいたつたことが、一大原因であるけれども、第二には、宋朝の禪宗の影響がかんがへられる。すなはち、禪宗においては、弟子が師匠より印可をうければ、その證據として、必ず師の肖像を受けるのであり、これは禪宗の法脈をつたへるうへに、必要かくべからざることであつた。さらにまた、日本の禪僧は、多く入宋して宋僧の法脈をつたへたから、いきほひ宋の禪僧の肖像を多くもち歸つた。このやうなわけで、禪宗の流行は、その必要上、はからずも像畫の發達をうながしたのである。

彫刻において、宋の影響として、とくに眼につくものは、東大寺の造營の際、日本に來朝し、

大佛の再建、その他にあづかつて力のあつた宋の人、陳和卿（後出）と、その門流のことを思ひおこさねばならぬ。

建築もまた、禪宗のいちじるしい影響をうけてゐる。まづ今日、普通の住宅建築におこなはれてゐる「書院造」は、その影響であり、また玄關といふものも、禪寺の廻廊の變形したものである。寺院建築では、いはゆる「天竺樣」と稱する新樣式がおこなはれ、これには陳和卿（前出）が、あづかつて力があつた。（ちなみに、かれは源實朝の需めに應じて、船も建造してゐる。）名高い鎌倉の圓覺寺の舍利殿は、俗に「唐樣」と稱するが、これまた、宋の建築樣式によるものである。

つぎに工藝方面をみると、陶器も宋の影響をうけ、いはゆる瀨戸燒がはじめられた。今日、われわれが陶器一般をセトモノと總稱してゐるのは、ここに基づく。織物もまた、大いに發達していはゆる博多織が、日本におこつたのも、このときであるといはれ、鎌倉時代の中頃には、すでに支那の模造品も多くつくられるやうになつた。

これよりさき、平安時代の中頃より、いはゆる「唐物」の嗜好がすこぶる盛んであつた。唐の商船が來着すると、官の使のまだ來ぬさきに、王侯貴族たちは、おのおの使をつかはして爭ひ買

ひ、また九州太宰府の管内の富豪たちは、金に糸目をつけずこれと貿易するため、物貨の公定價格をたもつことができず、つひにこれを禁じたこともあり、またかかる貿易業者のなかには、一攫千金の富をかさねるものもあつた。

「唐物」とは、必ずしも織物のみにかぎらないが、綾錦などの織物が、貴族のあひだにすこぶるもてはやされ、生活の必需品として多く輸入せられたことは、疑ひをいれぬ。綾錦といへば、最上の織物といふ代名詞にさへ用ゐられてゐたのである。そのほか、子供の玩具や、鳥獸のごときものにいたるまで、唐物がさかんに愛翫されたが、舶來品をよろこぶ人情は、古今東西に相通ずるものであつた。

香藥の類は、當時における輸入品の主要な部分であつたが、こののちも、わが必需品として盛んに輸入された。砂糖も、わづかながら、このとき宋よりもたらされた。料理もまた宋風がよろこばれたらしい。

茶は、古くから日本にもあつたが、鎌倉時代のはじめ、僧榮西が、宋より茶の種を持ちかへつて移しうゑてより、やうやくわが國にひろまつた。榮西は、茶に關する「喫茶養生記」(後出)と

いふ書物を著はしてゐるが、鎌倉時代の末葉には、はやくも各種の茶を飲みわけて、その異同をしり、勝負を決する賭物の會さへ起つてゐる。

僧侶が醫者をかねることは、平安時代を通じて、しばしばみられるところであるが、かれらの入宋によつて、支那の醫方の傳へられたことは、想像にかたくない。榮西の著書（前出）のごときも、茶をもつて醫方に用ゐんとしたものであつた。

僧侶が、さらに曆法に參與するやうになつたのも、宋の影響としてみとめられる。僧侶の曆學が、これまでの曆博士のそれとくらべて、すこぶる進步したことは、つぎの例によつても知られよう。

西曆一〇二八年（後一條天皇の長元元年＝北宋仁宗の天聖六年）の日蝕のときには、兩者の計算が異つてゐて、曆博士のものにはみえてゐなかつた。西曆一〇三八年（後朱雀天皇の長曆二年＝北宋仁宗の寶元元年）には、閏月を置くかどうかについて兩者が論議したが、このとき關白藤原賴通は、ただ無謀な多數決で曆博士の造曆にしたがつた。しかし、そののち果してその誤りが天體の事實によつて證明されたこともあつた。この際、おもしろいのは、賴通はそののち窩かに半島の

新羅でもちひてゐた唐暦をとりよせてみると、暦博士の暦と符合してゐたので、こんどは大いに意を强うし、口をきはめて賞讃し、反對に、天の時にかなつた僧侶の暦をば、無益と嘲つてゐる。これは、當時の公卿たちの、支那に對する因襲的な物の考へかたを、如實にしめす一例といふことができよう。

これに似たやうな例は、まだいくらもあるが、要するに、暦學においても、專門の家道としてゐた暦博士より、僧侶の方が進步してゐたといふのは、注目すべきことがらであつて、これはおそらく、僧侶たちが、たとへ間接であれ、支那の新しい文化に接してゐたためであらうと思はれる。

三　元・明文化の影響

宋にひきつづいて、こんどは元・明時代について、その文化の影響を概觀したい。

元明との交通は、主としてわが國民の經濟的、および宗教的要求にもとづいて行はれたものであるが、これによつて、わが思想界にも、日常生活の上にも、また一般文化の上にも、大いなる

影響を及ぼしてゐる。

室町時代（一三九二―一五七三、即ち後龜山天皇の元中九年＝明太祖の洪武二五年より正親町天皇の天正三年＝明神宗の萬曆元年まで）は、いはゆる戰國の爭亂のあつたときでもあり、したがつて文化的事業も、衰へてゐたと思はれるのであるが、出版印刷のごときは、かへつてすこぶる進歩してゐる。この主な原因は支那との交通によるものである。もつとも名だかいのは「五山板」である。すなはち、この時代において五山およびその系統をひいた寺院において開板した書籍のことで、この開板には、支那の彫工の參加したものが少くない。そのほか、個人の手になつた板刻も、かなり多くあり、一切經（前出）のごときも、その開板がしばしば企てられ、そして西曆一三四五年（後村上天皇の興國六年＝元順帝の至正五年）ごろには、少くとも、その幾分かが、わが國にはじめて出來上つてゐたのであつた。さらに儒書の印行も、多くおこなはれるやうになつた。これまでは、佛書の刊行が主であつたのが、西曆一三六四年（後村上天皇の正平十九年＝元順帝の至正二十四年）には、儒書刊行の嚆矢として、なだかい「論語」が世にでた。

書籍の輸入も、相かはらず盛んであつた。その方針は、日本にまだ渡來してゐないもの、もし

くは渡來したものでも稀覯本に屬するものを、その對象とした。それで遣明使は、支那に赴くたびに、種々の書籍を請求したが、必ずしも請求どほり入手したとは限らなかつたやうである。なほ、書籍の輸入とともに、朱子學の傳來したことも忘れてはならない。

文學方面を見わたすと、わが國語史上に重要な問題を提起してゐる。すなはち、禪文學の影響として、宋・元の俗語體が移入せられ、その風が轉じて、わが國における口語體文章のはじめをなすにいたつたことである。のみならず、禪家によつて創められたこの口語體は、やがて儒家にうつり、轉じてのちの小説類の俗文學にもおよび、とくにわが國では、「かな」の發明にともなつた、口語體の「かな」書きとなり、中流以下の婦女子にいたるまで、たやすくこれに近づくことができたから、あるひは教訓の資料ともなり、あるひは娯樂の寶庫ともなり、社會教育の普及に對して、すこぶる大いなる貢献をなしたのである。

醫學は、この時代になると、さらに重んぜられた。醫家にして、明に赴き、直接に支那の醫方をつたへたものも少くない。あるものは再度入明し、あるものは在明十年以上にもおよんだが、なかんづく田代三喜（一四六五―一五三七）のごときは、もつとも名だかく、その門流は陸續とし

て輩出し、その學風は天下を風靡し、つひに前代におこなはれた宋の醫方は、まつたくすたれてしまつた。なほ、元・明鼎革の際に、明に仕へるのをいさぎよしとせずして、わが國に投化し、九州にすんでゐた元の醫者があつたが、西暦一四六九―一四八六年（後土御門天皇の文明元年＝明憲宗の成化五年より文明十八年＝成化二十二年まで）のころ、京都において醫をもつて鳴つてゐた陳祖田といふものは、實にその子孫であつた。

このほか、あるひは使を明につかはして藥方をもとめ、和漢の品を辨別し、畫家に命じて藥種の形狀をゑがかせ、その詞を和語に譯さしめたり、あるひは古今の醫書から要點を拔萃し、これを分類整理した醫書を編纂したり、あるひは醫書の渡來とともに、西暦一五二八年（後奈良天皇の享祿元年＝明世宗の嘉靖七年）には、わが國ではじめて明板の醫書の覆刻さへおこなつてゐる。

つぎに美術工藝方面をみると、元・明との交通と、禪宗の流行とが、相表裏して、いろいろの影響をおよぼしてゐる。

まづ繪畫についていへば、總じて禪味をおび、もの靜かな、恬淡な餘韻をそへ、また幽玄にして淳朴な風致を存した。彩色のかはりに水墨がもちひられ、陰影よりも陽線をおもんじ、素朴簡

易な中に氣韻をたつとび、含蓄をふかからしめた纖細で艶麗な筆法や、どぎつい濃厚な着色はやうやく衰へて、淡々として閑雅な雪舟のごとき名筆が輩出したが、その影響によつて、在來の大和繪にも一生面がひらかれ、狩野元信のごときは、和漢折衷畫を創め、狩野派三百年の畫壇に君臨する基をひらいたのである。むろん、渡航僧侶らによつて將來された繪畫も少なくなく、これには鑑賞的の繪畫も多かつたが、羅漢畫のごとき宗教的のものもあり、これらを換骨奪胎して、わが舊來の佛畫の面目を一新したものもあつた。

建築における影響は、禪寺と邸宅とを巧みに融合させて、一種の形式を生みだした。名だかい金閣寺、銀閣寺のごときが、すなはちこれである。

陶磁器は、室町時代のはじめには、多く輸入品を賞翫したが、足利將軍のうちには、數寄を好み茶道や香道をたしなむものもあつたから、次第に陶磁器需要者も多くなり、したがつて、わが國でこれをつくる者も、あらはれるやうになつてきた。九州の肥前に伊萬里燒をはじめたのは、西暦一五一三年（後柏原天皇の永正十年＝明武宗の正德八年）である。

能樂がおこつたのも、このときである。これは形式上からいへば、わが固有の猿樂と田樂とに

合して、元の雜劇をとりいれたものであるが、內容的にいつても、謠曲の作者は、主として禪僧もしくは禪に嗜みあるものであつたから、その說くところもまた禪味をおびてゐるものが多い。

三味線は、普通、琉球から傳へられたといはれてゐるが、そのもとは、支那から出たものであらう。明のすゑに、わが國に輸入されたのであつて、これから、わが國の音樂は、一大發展をとげるのである。

今日、わが國の禮式に小笠原流なるものがあるが、これは江戶時代（一六〇〇―一八六六、即ち後陽明天皇の慶長五年＝明神宗の萬曆二十八年より孝明天皇の慶應二年＝淸穆宗の同治五年まで）を通じて、官民のあひだに儀禮の標準とされたものであり、その淵源は、百丈淸規――すなはち禪寺の行儀にもとづいたものである、とされてゐる。

最後に、食物に關する二、三のことにふれておかう。

まづ砂糖であるが、これは、まへの宋文化の影響のところにものべておいたが、當時も貿易品として琉球・支那の方面から輸入せられ、なほすこぶる珍重せられたものらしく、高級の進物としてもちひられてゐる。

饅頭は、支那においては、蒸し餅のなかに獸肉、または野菜をいれたものであるが、日本では、もつぱら野菜をもちひた。その傳來は、西暦一三五〇年（後村上天皇の正平五年＝元順宗の至正十年）に、元の人、林淨因が歸化し、名を鹽瀨と改めてその法を傳へたといふ。菓子鋪としての鹽瀨の名は、今日もなほ傳はつてゐる。餡をいれた饅頭、大福餅のごときは、のちの餡パンとおなじく、日本人獨特のものであらう。

豆腐の製法もまた支那からつたへられたが、これもおそらく禪僧の手によつたものであらう。豆腐に味噌をつけて燒いた田樂も、また田樂の曲藝のうちに、鷺足といつて、竹馬のやうなものを一本たてて乘る、その形に似てゐたために、かく名づけられたものである。

以上の事實は、その大要にすぎないが、元・明文化の影響は、日本人の衣食住、ほとんどあらゆる部面に影響したのであつた。ある遣明船の歸朝に際し、歡迎の宴をひらいたとき、終夜、支那語ばかりでうち興じたといふやうな話も、おそらくは事實であつたらう。

四　明・清の鼎革と日本

明・清の鼎革は、宋・元の鼎革とおなじく、元來、夷狄と考へてゐた蒙古人、乃至滿洲人によつて、「中國」をうばはれたのであるから、その影響は、ただに國內だけの問題ではなく、周圍の國々にも、すこぶる影響をおよぼしたが、ことに明末には、かの地の亂をさけて、わが國に渡來歸化したものが尠くない。史上に名をとどむる者だけでも、四十數名の多きに達する。これら歸化人の、わが江戶時代（一六〇〇―一八六六）におよぼした影響は、決して輕視するわけにはゆかぬ。

かれらのうちに、明室の復興を念願とするものの多かつたことは、想像にかたくないが、それほど積極的でないにしても、少くとも、清の粟を食むことをいさぎよしとしないで、日本に亡命した事情は考へられる。したがつて、かれらの言動は、わが思想界、道德界にも、多少の影響をあたへたことは爭はれぬ。

水戶と加賀とに、もつとも著しい影響をあたへた朱舜水のごときは、その尤なるものであらう。

水戸の勤皇思想、徳川光圀、楠正成などは、きつても切れぬ關係にある。現に前田侯爵家に所藏されてゐる「楠公父子訣別圖」の贊は、舜水のしるしたものであり、またその圖贊は、光圀の建てた湊川の「嗚呼忠臣楠氏之墓」の碑銘として、刻されてゐる。楠公父子の忠烈については、ひとり明の人、朱舜水を感激せしめたのみならず、近くは西暦一八七六年（明治九年＝清徳宗の光緒二年）に、駐日イギリス公使パークス（H.S.Parks）氏の、櫻井における建碑によつて、讀者もすでにご承知のこととおもふ。（碑面には、A TRIBUTE BY A FOREIGNER TO THE ROYALTY OF The Faithful Retainer KUSUNOKI MASASHIGE who parted from his Son MASATSURA at this spot, before the Battle of the MINATOGAWA, A.D. 1336. としるされてゐる。（因みに西暦一三三六年は後醍醐天皇の延元元年＝元順帝の至元二年にあたる。）

そのほか、日本人を母にもち國姓爺（Koxinga）として内外に名だかい鄭成功や、徳川光圀の高節をしたつて來航した張斐らの、日本請援のごときも、當時、わが朝野に少なからぬ刺戟をあたへてゐる。

宗教界に眼を轉ずると、佛教への影響として、黃檗宗の開かれたことが注目される。開祖は、

いふまでもなく明僧隱元であり、宇治の本山の住持には、多く支那の歸化僧がこれに任ぜられ、長崎にも末寺として三寺が開かれ、ながく支那文化の輸入の取りつぎをなした。一方、この黄檗宗は國內に對してもやうやく生氣を失はんとしつつあつた在來の禪宗に對して、覺醒の警鐘を亂打したものであつた。なほ、隱元のごとく喧傳されないが、心越禪師、道者禪師の名も、同時に記憶されねばならない。

黄檗僧は、また多く書道、および繪畫に巧みであつたから、わが藝術界への影響も、また少しとせぬ。

つぎに醫學界への貢献も、いろいろあるが、ここには、その功績のもつとも著しい戴笠（のち獨立と名を改む）のことについてのべよう。かれは、西暦一六五三年（後光明天皇の承應二年＝明永明王の永曆七年・淸世祖の順治十年）に歸化して、治痘の術をつたへたのであり、これは、淸時代に輸入せられた牛痘の書によつて、いよいよ研究がすすんだ。すなはち、種痘の法のわが國に傳來したのは、はるかに西洋種痘法の傳來より以前であつたのであり、すくなくとも、後日、西洋種痘法の傳來に際して、容易にこれを受けいれるだけの素地は、十分つくられてゐたわけである。

最後に、武道への影響をのべよう。明末に投化した陳元贇といふものは、詩人としても一流の人であるが、また柔術において、日本の元祖と稱せられる人である。ただし、かれをもつてその元祖と稱することは、言ひ過ぎであつて、すでにこれより以前に、關口流の「やはら」といふものが存するが、とにかくこの從來の「やはら」に一大刺戟をあたへ、ことにいはゆる當身の術といふ活殺の要素が、かれによつてつけ加へられたことは、注目されねばならぬ。

五　清文化の影響

つぎに清代文化の影響にうつる。清の康熙（一六六二―一七二二、後西天皇の寛文二年より中御門天皇享保七年まで）乾隆（一七三六―一七九五、櫻町天皇の元文元年より光格天皇の寛政七年まで）の治世、百二十年間は、おそらく支那歴朝における、もつとも隆盛な時代であつたと思はれるが、隣國日本は、眼前に展開されたこの一大勢力に眩惑し、かつは古來の傳統的な、支那崇拜の因習に拍車がかけられ、なにごとにも支那を模倣し、大國もしくは上國と尊稱し、その文化吸收にまつたく熱中してゐる。

日本の儒者たちは、支那自尊の名稱を、自屈の非をさとらず、そのまま甘んじてもちひてゐたし、また、固有名詞であるわが姓名、官名、地名にいたるまで、支那風に改稱して、はばからなかつた。名だかい儒者にして、姓名を支那風に改めなかつたものは、わづか數人にすぎない。長崎へきた淸人に詩を請ひ、書畫をねがひ、あるひは、はるばる商船に託して詩の和を請ひ、あるひは、わざわざ長崎まで赴いて淸の商人風情と筆談して、無上の光榮と稱して雀躍し、甚だしきは、長崎に行つて、中華へ近づくこと幾百里と稱して欣喜したとさへいはれてゐる。議論などしたた際に、相手にわからない支那語で、嘲り去るといつたやうな、キザなハイカラぶりは、まつたく支那かぶれを如實にしめす例である。

ただし、同時に、かかる支那崇拜の反動として、國學の復興をみるにいたつたことは、忘れてはならない。

さて、淸文化の具體的影響として、まづ第一にあぐべきは、考證學の流行である。もつとも、これには、その先驅をなす折衷學派といふものが、あつたためではあるが、これより考證學風が

大いにおとなはれ、ひいては他派の學者もその感化をうけ、國學者にも影響をおよぼし、はては小説の分野にまでも、すこぶる煩瑣な考證を試みるものもあらはれた。

しかし一方、醫學界においても、新舊兩説を折衷するやうな、考證學の餘風をうちたてるものも出できたり、多紀氏のごときは、江戸時代における醫權をまつたくにぎり、儒學における林家とならび稱された。降つて、この學風は明治時代（一八六七―一九一二、清穆宗の同治六年より民國元年まで）におよび、ことに史學に適用されたことは、今日の隆盛をいたす基礎をなしたもので、明治の史學界に、ドイツの學風をうけいるべき素地を、充分に培かつたのである。

さらに轉じて、支那書籍の輸入が、わが出版著述界におよぼした影響も、また清朝學風の餘波とみることができる。康煕、乾隆二朝の間は、支那においても未曾有の大部の書籍が編纂された時代であつたが、西暦一七六四年（後櫻町天皇の明和元年＝乾隆二十九年）には、「古今圖書集成」一萬卷がもたらされたのをはじめ、大著雄冊が相ついで續々將來され、またわが國で飜刻された清人の著作も、數十部に上つた。そのほか、たとへば盲目の學者、塙保己一の「群書類從」のごとき大部のものが、編纂されるにいたつたのも、みな清朝著述の影響をうけて、これに倣つたもの

である。

「大淸會典」百卷は、淸朝の法制をしるしたもので、すでにわが國にも將來されてゐたが、やがてこれを飜譯するものが出で、そのほか、法令を蒐集したり、とくに刑法を編纂したりした。けだし、わが享保時代（一七一六―一七三五）における法制の整備は、支那の影響刺戟によることが多いと思はれる。

「六諭衍義」といふ書物は、康熙帝の前の順治帝（一六四四―一六六一）のときに頒行されたもので、庶民敎育のために利用されたのであるが、西曆一七一九年（中御門天皇の享保四年＝康熙五十八年）に日本にもたらされた。將軍は、これをみて早速、和譯刊行せしめ、のちには一種の敎科書ともなつて、ひろく民間に流行し、明治時代（一八六七―一九一二）にいたるまで、しばしば版を重ねた。

かかるたぐひの書物は、このほかにもあるが、あるものは法帖となり、あるものは掛軸となつて、ひろく普及した。要するに一般民衆の敎育方面におよぼした影響として、記憶されねばならぬ。

文學界におよぼせる影響も、少しとせぬ。淸朝の戲曲小說の類にして、わが國に傳來したものは五十餘部の多きに上つてゐるが、多くは飜譯もしくは飜案せられ、あるひはその構想、語句なども多く利用された。あたかも、明治時代の小說が、西洋の小說に負ふところ多かつたのと、揆を一にしてゐる。これは俳諧においてみとめられ、漢詩より轉化した拮屈な文字をもちひて、一生面を開拓した。

美術界への影響も、また著しい。日本に來朝した淸人の畫家は、凡そ二百人にも達してゐるから、わが畫壇に對するその影響は、推して知るべきであらう。文人畫の發達、長崎派の出現、畫論著作の舶來、飜刻など、かぞへあげれば際限ない。

最後に、博物學への影響を考へたい。支那では本草學といつて、一種の藥物學であつたが、わが國に傳來してから、自然科學としての博物學となり、大いに發達した。のち西洋博物學の傳來したときに、ただちにこれを採り入れて咀嚼することのできたのは、支那の本草學のたまものであつた。かかる例は、まへにもしばしば述べてきたところである。稻生若水（一六五五―一七一五）と阿部將翁（一六五〇―一七五三）とは、わが國における二大本草家と稱されてゐるが、ことに小

野蘭山（一七二九―一八一〇）のごときは、オランダのシーボルトも、かれを推賞して「日本のリンネウス」と稱した。かれの學識の深さと、近世日本の科學發達の上に偉大なる足跡をのこしたことを想見するに足る。

六　む　す　び

以上は、支那文化の日本におよぼしたる影響を大觀したものにすぎないが、それでも、その影響がきはめて顯著だつたといふことは了解できるとおもふ。

日本の支那文化に對する態度は、一貫してきはめて熱心であり、ときには、その熱心のあまりあるひはこれを鵜呑みにしたり、あるひはこれに溺れるやうな傾向もないことはなかつたが、しかも巧みにこれを咀嚼、吸收して、よくわが國、固有の文化と融合同化し、ときには一見まつたく姿の變つたもののやうに見られることさへあつた。日本列島がアジヤ文化の東の防波堤として確固たる地位をきづき、なかには支那におこつた文化で、すでにかの地に衰へ、かへつて日本の文化に現存するといつたものも尠くないのである。さらに、支那文化を充分に、自家藥籠中のも

のとなした結果は、明治維新ののち、滔々として入りきたつた西洋文化の採用に對する準備も、その間におのづから培はれてゐたわけで、いまかりに、日本文化史を二分して考へるならば、支那を中心とする東洋文化の影響をうけた時代と、その後の西洋文化の影響をうけた時代とにわけることができよう。

なほ、わが國がかくも巧みに支那文化を咀嚼吸收した理由には、外國文化に對して、つねに包容同化性のあるわが傳統的な國民性にもとづくといはれようが、そのほか偶然にも、政治的の原因が潜んでゐたことを注目したい。たとへば、唐末の紛亂に際しては遣唐使を廢止してをり、清初の惑亂に直面しては「鎖國」を斷行してをり、かかる間歇的な日支交通の休止といふものが、かへつて、日本に幸ひしてそれまでに支那よりうけ入れた文化を消化反省するにふさはしい機會をあたへたのであつた。もしも、支那文化が近世にいたるまで、のべつに流入してゐたとしたらいかに包容力同化性の强大な日本人であつても、これが採擇のため奔命につかれたであらう。國家も生きてゐる有機體であるから、こんな狀態がいつまでもつづいたら、個人の場合と同樣、固有なものは失はれてしまふかも知れない。

日清戰爭（一八九四—一八九五）は、日支兩國の主客を完全に顚倒した。それはただに政治軍事上の問題のみではない。文化の上から言つても、日本は完全に中國の師となつてゐた。多數の留學生が、あひついで送られてきた。私は、いまから千年のむかし、唐に多くの留學生留學僧をおくつて、かの地の文化吸收に熱中しながらも、やがて敢然、日本文化の逆輸入をなしてゐた往時を顧み、飜つて現在の狀態を眺め、まことに感慨深いものがある。

第二部　讀史覺書

我が國における東亞史の概說書

有高巖博士の「概觀東洋通史」について

過去數十年間に於ける我が東洋史學界の發展とともに、東洋史乃至支那史の概說書として世に出でたものも少くない。一例を擧げれば、那珂通世博士の「支那通史」及び「那珂東洋小史」、桑原隲藏博士の「新制東洋歷史」、市村瓚次郎博士の「東洋史要」、今年（昭和十二年）五月に惜しくも遠逝された松井等氏の「東洋史概說」、白鳥淸氏の同じく「東洋史概說」、鳥山喜一氏の「東洋史觀」、及川儀右衞門氏の「參考東洋史」、松田壽男・野原四郎兩氏の「東洋史序說」、矢野仁一博士の「國民東洋史大綱」、岡崎文夫博士の「支那史概說」上、和田淸先生の「支那」（東洋思潮所收）等々があり、最近では上野菊爾氏の「東洋文化史概說」がある。

この間にあつて、元代史の權威であり、博學多識を以て鳴る東京文理科大學教授有高博士が、東洋史の概說書をものされるといふことは、豫て承つてゐたところであり、その稿本の一部は、

夙に印刷に付し、教授用テキストとして學生生徒の指導に供せられてゐたのであるから、筆者は心ひそかにその完成を待望してゐた一人であつた。

さて博士が今回上梓された「概觀東洋通史」執筆の企圖は、ほぼ序文のうちに示されてゐる。即ちまづ東洋史學界五十年の躍進の結果、「古今の各時代を通じて東西諸學者の權威ある論文の如きも、正に汗牛充棟も啻ならざる程現はれて來た」ことと、「明治二十年前後とは反對の意味に於て修史の困難」なること、「即ち歷代古書と共に新出の豐富なる資料を通覽することが、一人の力の殆ど能くする所でないのみならず、假令ひその大部を涉獵した人があつても、夫等を咀嚼し消化し、自己の識見を以てこれを適當に取捨按配して、統一ある組織的の良史を編むことは眞に容易の事業でない」と概說書著作の如何に困難なるかを洩らされ、ついで「されば斯學の諸大家が概ね有力なる通史存在の必要を認められながらも、自身この業に當ることを避け、各自の特色ある研究に沒頭されて、一般史著作の意なきが如くに見えるのも、如上の理由に因る點が少なくないと推察される」とて、概說良書の世に出で難き理由を指摘され、次に「通史と特殊史とは、恰も車の兩輪の如きもの」であるから、「斯學の攻究に從事する學者・學徒は、當然彼此兩方面の責

務を有するのであつて、通史編纂の意義も、亦實に斯學の一般水準を高めるに在ることを强調せられ、轉じて「今や東亞の一角滿洲帝國が建設されて、我が國と脣齒輔車の關係に在ると共に、邦人の支那・印度・南洋及び西比利亞等に對する近時の進展は、洵に目覺ましいものがある。さればわが東洋史學は、これを國家的に見るも空前の重要性を有するに至つたのであるから、この際、斯學の一般を概說してその現勢を鳥瞰し、旁ら以て國家の進運に寄與する所あるは、甚だ望ましいことである」と述べられ、卽ち概說書の著作は東洋史學の一般水準を高める點に於ても、現下の國家的見地よりこれを見るも、緊要切實な問題であることを闡明指摘されてゐるのである。而してまた同時に、最近文部省に於て改訂せられた高等・中等諸學校の歷史科敎授要目に於ては「國體明徵及び民族意識昂揚を大眼目とするに至」つた點をも留意されて筆を執られたのであるが、蓋し博士が學者として斯學の攻究に日夜專念される一方、また敎育者として斯學の第一線に貢獻されてゐることを思ふとき、博士にしてこの好著ありと感せざるを得ない。

次にかかる意圖のもとに著された本書の內容をみるに、全篇三十章より成り、卷尾に「東洋史通觀」の一章が附載されてゐる。第一章考古學上より見たる太古の東洋に筆を起し第二章支那古

代史の考察につづいて第三章以下は、周・春秋戰國、秦・漢、六朝、隋・唐、五代・北宋・南宋・遼・西夏・金、元・附高麗、明、淸、中華民國を大體一纏めとして一章乃至三章（淸は特に五章）を當てられ、最後の第三十章東洋の現狀を以て筆を結ばれてゐる。敍述の形式は概ね政治的時代の變遷と、文化及び社會經濟の諸相と、支那歴朝帝國を繞る四圍の狀勢とに區分せられ、時代の範圍は太古より昨年（昭和十一年）十二月の「西安事件」に至るまで扱はれてゐる（五九八頁）。なほ各一章はさらに大約十數節（古代の記述には十節内、明朝以後には二十節以上のものもある）の小節を設けて、記述の直截簡明を圖つてをられる。

次に内容の特徴をあげるならば多々あるが、これを「凡例」の内に示された博士の言葉を借用しつつ述べてみよう。まづ「本書は高等專門學校の敎科書、又は一般の參考書として著作」されたもので、前述の如く「特に最近改定された高等・中學諸學校の歴史科敎授要目をも參考して遺漏少からんことを期」された點、「從來の東洋史が、概ね支那史の延長に過ぎない觀のあつたのを改め、支那と四圍の諸地方とに夫々の特色と價値とを認め、その兩者に興亡せる諸朝・諸國・諸民族の活動を、縱に系統づけ横に交關せしめて敍說」された點、「廣義の文化に屬すべき經濟や社

會の有樣等は」、從來の著書に「要領よく採入れたのが乏し」かつたのを、各時代史を通じて「大抵文化・社會の一章を特設して、右の缺陷を補正」された點、「文化史の中の思想史、特に精神史に就いては支那・印度または朝鮮などの哲學及び宗教等を通じて、屢〻敍述」され、「又最近の發掘物・發見等にも出來るだけ機會を捉へて言及」され、「史書が時勢に卽したものたるべき一面を現」はされた點などであつて、これらは何れも博士の穩健適切な學風と相俟つて全篇見事に表現されてゐる。なほ處々に根本史料を引用されてゐる點、諸學說を列擧されてゐる點、從來假名書の多かつた固有名詞を、すべて漢字（誤讀し易いものには振假名をのせられてゐる）または洋字に改められてゐる點なども、初學者にとつて少からぬ便を與へるであらう。卷末の「東洋史通觀」は全篇の概括結論ともみられ、更にそのうちに博士の東洋史學に對する烈々たる學究の熱情と、斯學を通じて觀たる愛國の至情とを窺ふべく、Ex Orient Lux の經綸を以て結語とされてゐるのは後學後進のこよなき指針奬勸となるに相違ない。

批評は著作よりも困難である。固より學究的ならざるものに對しては論外であるが、苟も眞理を追求究明せずんば已まざる眞摯なる勞作に對しては、敬虔の念禁ぜざるべく、たとへそれが自

己の專攻する論題であつて、再論の必要あるにせよ、しかく容易にこれをあげつらふことは出來まい。まして本書の如き多年の蘊蓄と抱負とを傾けられた通史の如きものを、未熟な筆者が云々することは、盲者が目明きを手導きする類ひであらう。ただ一、二の希望を申加ふれば、全篇三十章無慮四百四十節（「東洋史通觀」を加へて三十一章に百四十八節）のうち、卷頭の「目次」にはただ章の題目しか記入されてをらず、小節の題目は凡て省略されてゐる。これは煩雜になるを避けられたためであらうが、改訂の際には是非附加さるべき必要なものであらうし、また卷尾に「索引」があれば、その利用價値は一層增大されるであらう。尤も博士は「凡例」のうちに於て遠からず「地圖・諸表」の別冊を刊行されることを豫約されてゐるから、筆者の渇も十分滿されることであらうし、從來、箭內亙博士の「東洋讀史地圖」以來、手頃な歷史地圖の少ない折柄、この「地圖・諸表」も今から大に期待をかけてゐる次第である。なほまた博士は、東洋史學の凡ゆる部門の綜合的研究の巨篇を公にされる準備を、着々進めてをられることも、筆者の豫てより伺つてゐるところであつて、この「概觀東洋通史」も恐らくはその序論に過ぎないであらうことを讀者にお傳へして、この蕪雜なる紹介の筆を擱くこととする。（菊版、六四四頁、東京同文書院出版、

定價四圓八十錢）（昭和十二年七月・歷史學研究七ノ七）

槪說書については、卷末の「東亞史關係書目錄」を參照されたく、なほ文部省においては、さきの「國史槪說」の姉妹篇として「東亞史槪說」を編纂中である。（昭和十八年九月附記）

漢籍解題

田中慶太郎氏の「羽陵餘蟫」について

文求堂詅齋主人田中慶太郎氏は、本年（昭和十二年）正月より漢書の傳來卷數の分合等を思ひたたれ、その一部は「日本古書通信」にも連載されてゐたが、六月初旬にひとまづ筆を擱きその完成した部分をひと纏めにして、翌七月に右記のやうな題名のもとに自費出版された。菊判、二百十五頁。甲部七十九種（一―一一五頁）・乙部八十五種（一一七―二一四頁）計百六十四種の二部に分れほぼ歷史の分類に從つてをられる。著者は序に於て「書名に繫いだ漫語」と謙遜されてゐるが解題のうちには、自由な立場で獨自の見解を述べらるるもあり、學界に發表された論文の紹介もあり、また業界多年の實歷體驗談もあり、著者の人生觀乃至史觀等も自ら現はれてゐる。

次に筆者の專攻する史學に關して一、二申すなら、或は「精神が有つて永久に生きてゐる歷史而も考據の正確なものは、最も尊重すべきことは言ふまでも無いことであるが、考據は正確でも

精神のないものといふことになると、よし瞬間的なりとはいへ、人に忠孝の情を興起せしめる市井の講談の方が、まだしも生きてゐる」（一二四頁）とて「義公の如きは眞に活眼を以て太史の活書（史記）を讀んだ人であらう」（一二七頁）とか、或は明の李贄の撰「藏書」「續藏書」については「四庫全書總目提要」とわが吉田松陰の「讀續藏書遜國名臣」とを比較して「松陰先生の所見と提要編纂諸臣の所見の相違は讀書子の深く思を致さねばならぬ點と考へる」（一六五頁）と述べ、或は「史記」と「漢書」との資料を比較しては「史記は典籍のみによらず見聞した舊俗風謠をも材料としてゐるので、後の學者がその出據を究めることが困難であるので注解書が少い。それに引かへ漢書は典據によつて書かれ、條項整備してゐるから近代諸儒の讚仰する所で其の訓詁も亦多いが」（一二八、九頁）、「後世でも市井の談話は資料として採用することは出來ぬ、書物になつて始めて資料の價値が有るとの考へ方が多いと思ふ。こんな見解は、再考も三考もの餘地があると思ふ。現代に即した司馬遷流の史料採集をしてもらひたい」（一二九頁）とか、或は「基礎工事の大切なことは言ふまでもないが、建造を目的とせざる基礎工事なるものは、實際の社會には無く」（一三三頁）「連絡第一、個人の力量第二」（一三四頁）であるとなし、或は民國一學者の例をあ

げて「學問と鑑識が必しも合致しないのも一奇である」（一五六頁）とか、嘗ては「中國人が引用してゐる中國書に對しては不相變陳腐な者とか、ふふんと鼻の先であしらつてゐる癖に、一たび西洋人が中國書を引用すると急にその本を探す樣な人も絶無ではなかつた」（一六二頁）等々の敍述はこれに應へる言葉もないではないが、第三者なる一般社會人としての忌憚なき學界への希求であり批評であると考へられよう。

また解題については序のうちに「直齋書錄解題及び四庫全書總目提要の文を抄襲にしたにすぎない」と斷られ、更に不十分な部分については「序文すら讀んだことが無い書籍の解題めいたことを書くのは苦しいことである」（一六〇・一頁）と率直に述べてをられるのも快く、他方「一流の本ばかり讀んで仕出かした誤りと……解題書を抄襲したり、末書ばかりあさつて仕出かした誤りとは本質的に大層な相違である。橫道者流なれば兎に角、若い學徒がこんなことで前輩を輕ずる樣なことが有つてはそれこそえらい誤りであらう」（九二頁）等と警告し、他方「碌々通讀もせずに、異本を見較べただけで作つた校記」（一四七頁）などの杜撰なども指摘されてゐる。

要するにこの一書は、著者多年の業界生活を通じて感得した生々しい率直な考察を、何の虛飾

牙と東洋諸國との關係交渉は、單に各國相互に於いて注目すべきのみならず、世界史上一大轉換の契機として刮目すべき事實であらねばならぬ。

本書は和蘭 Leyden 大學の哲學博士 Tien-tse chang 張天澤氏が「中葡通商研究」の副題を附して西暦一五一四年より一六四四年に亙る兩國交渉の經過を英文にて公にされたもの、本文一四一頁右の一五一四年とは明の武宗正德九年に當り、葡萄牙人 Torge Alvaes が初めて廣東に近き屯門を訪れた年であり、また一六四四年とは毅宗の末年崇禎十七年に當り、西班牙・和蘭乃至英・佛の東洋進出により、澳門の覇權が衰へて中葡通商の凋落を告げた時であり、即ち時代的にいへば明朝の後期一百三十年間を取扱つたものである。從來この種の問題は前述の如き重要性があるにも係はらず、等閑視されて來たのであるが、これは研究對象なる支那・葡・西等資料を廣く併せ驅使しなければならぬ困難がある關係上、一方的の研究が一部しか發表されてゐないのである。

然しともかく本書の特徴は著者が表題に特に A Synthesis of Portuguese and Chinese Sources と書添へてをられる如く、この兩國資料を綜合研究された點にあるといへよう。著者の Pre-

face によれば、該研究に従事されたのは一九三〇年 William Hung（洪業・煨蓮）教授（燕京大學引得編纂所主任として多數の「引得」を刊行し學界に裨益されてゐる）より Harvard 大學の圖書館に葡・西兩國の貴重史料のあることを知らされ、その指導に當られたのに起因するものの如く、同大學教授經濟史家 A. P. Usher 博士、同圖書館長 R. P. Blake 教授の好意援助あり、更に Layden 大學の史家 J. Hujzinga 教授・支那語教授兼支那學部長 J. J. L. Duyvendak 博士等の懇篤な指導により、また「哈佛燕京學社」Harvard-Yenching Institute の援助を得て一九三三年十二月脫稿、翌三四年 Layden より出版されたのである。その內容は七百三十四節より成つてゐるが、章の目次と頁數とを記せば次の如くである。

1. An Historical Sketch of China's Maritime Trade down to 1513 ……1
2. The Early Sino-Portuguese Commercial Relation ……32
3. The Expulsion of Foreigners from China and the Prohibition of Foreign Trade ……47
4. Trade or No Trade ……69

5. The Rise of Macao ……86
6. The Arrival of Other Europeans in the Far East and the Position of the Portuguese ……109
7. Macao in the Days of Tribulation and the Decline and Stagnation of Sino-Portuguese Trade ……129

本書は頁數に於ては必ずしも大著とはいへないが、卷末に Bibliography と Index がついてゐて檢索に便であり、殊に前者には漢籍三十二種はいふまでもないが、英、獨、佛、葡諸國の著書九十八種が揭げてあり、著者の苦心の程も偲ばれこれらの分野に於ける將來の發展が期待される。

想ふに明朝三百年の滅亡とともに中葡通商の活舞臺も一時その終幕を告げ、二十世紀の東洋にはその根據地植民地の如きも大方地を掃ふの狀況にあり、一方いまや大陸の風雲既に東亞の天に漲り Iberia の戰塵未だ西歐の地に收まらずの現狀にあるが、眞理の追究にはもとより國境のあらう筈はない。本研究の如きも前記の如き美はしき國際的の友好援助の然らしむるところまた多大であつて、卷頭に記されたる To Professor William Hung in Respect and Gratitude の言

葉は恩師への表情を如實に語るものと思ふ。蓋しわれら苟も學に志すものに在つては、各自國內に於ては勿論のこと、國際的にも相互に提携援助してその藏するところを惜みなく頒ちあひ、學究の本領に立ちかへつて、ますます協力邁進したいと冀ふの餘り、最近同書閱讀の機會があつたので、いまさら紹介でもないが紹介とは單に迅速のみを意味しないと考へ、所感をそへて、玆に蕪雜な一文をものした次第である。

（昭和十二年十二月十日・東京文理科大學新聞）

清末日支外交史上の諸問題

矢野仁一博士の「日支關係史上の若干の重要事實」について

矢野博士には、すでに「支那近代外國關係研究」「近世支那外交史」「近代支那の政治及文化」「近代支那史」「近代支那論」「現代支那研究」「近代蒙古史研究」等の大著力篇があり、昨昭和十二年一月にも、東方文化學院京都研究所より研究報告第九冊として「日清役後支那外交史」の力作を發表された。その博學多識をもつて、豐富なる東西の史料を縱橫に驅使せられ、複雜多岐に亙る支那近世の外交對外關係を闡明せられつつあることは、學界のひとしく推重するところである。ここに紹介せんとする一文も、題目だけではその時代を知ることはできぬが、同じく博士の最も造詣深い清季外交史上の一つとして、日支關係につき全文を十一節に分けて高見をのべてをられる。

第一節では大體穆宗の同治末年から德宗の光緒以後に及ぶ卽ち我が國では明治維新以後に相當

する清季外交史につき、これは日支兩國にとり極めて重要な時間で、それ以前の外交は主として對露英關係であつた。そしてこの時期には日淸、日露の兩戰役をはじめ淸朝の滅亡、露西亞帝政の崩壞、帝政獨逸の滅亡、世界大戰の勃發の如き、世界史上注目すべき諸要因が醞釀したのであつて「今日我々が考へてゐる以上に、重大な時期であ」（二頁）る。而してこの間の根本史料は英獨佛露支の諸國においても夥しく發表されてゐるのに「日本においてはまだそういふ根本的の史料は極一部分を除く外出版されてゐない。これは、この時期の研究の一大ハンディキャップである」（三頁）ことを指摘される。第二節では「東亞に比較的利害關係少なき歐米諸國においては、この時期を重要視し、研究する學者も著書もあるに反して、最も利害關係深き我が國においては未だこの時期を研究する學者も著書も出でないやうであ」（四頁）り、「日淸戰爭、日露戰爭の意義や、この時代の我が國の地位などは、我が國の學界から歐米人に教へてやらなければならない筈であるのに、反對に歐米の學界から我が國の學界が教へらるる」（五頁）といふ研究の貧困を漏らされ、前記諸外國の史料――「これを蒐集し解讀することも餘り容易なことでない。これも我が學界においてこの時期の研究の後れてゐる一の理であらう」（五頁）が――を併せ驅使すべきを叙

べられる。

以上一、二節は序論とみなされ、要するに清季外交史の重要性を指摘し、史料研究論著等をひいて、わが學界の現狀に言及されてゐるのである。次に第三節より本論といふべく、清季外交史の基調をなす重大な事實として「露西亞勢力の侵逼」をあげられる。そしてこれに對する支那外交の根幹は「日本の支那と協力提携して防禦せんとする提議に同意せず、かへつて露西亞の勢力を誘致して日本を抑壓せんとし」、「日本が支那に對して有してゐたやうな友好親愛の感情を有したことはないやうに思はれる」のみならず、「西洋諸國よりも餘程輕視してゐ」（六頁）たので、「日清戰爭まで我が國は歐米諸國と同樣の待遇を與へられなかつたのである」（七頁）。

第四、五節においては、これに對しわが明治維新前後の政治家――例へば大久保參議はともかくとして副島外務卿、勝海舟、森有禮の諸氏等――ははじめより「日支提携して西洋諸國の勢力を防がなければならぬといふ考へであ」り、維新までは「支那の文化に對して尊敬を拂ひ」「先進の大國として遇して來たのであ」（十頁）り、從つて朝鮮、臺灣問題等についても「支那に對して敵意を持つて談判してゐるやうではない」（十一頁）事情を述べらる。

第六節では一轉して支那側の立場にうつる。ここでは支那が日本に對して「和好親愛の情を感じないどころか、嫌惡の情を抱」き「中國を侵略する」「敵國のやうに映じたことも無理でない」（十一頁）とて「東洋（日本）の患」「倭の害」「倭の禍」に及び、「露西亞の患も憂ふべきであるが、日本の患はこれに比すれば更に近切である。倭人俄を畏ること虎の如き故、その虎の如く畏るる俄を以てこれを制するに若かず」（十二頁）といふ當時支那の官僚、一般識者に共通な考への例證として伊犂事件と琉球事件とをひき、更に日清戰役勃發の原因に及ばる。

第七節以下は專ら日清戰役後の下關條約及び三國干渉を中心として、支那が對日外交に如何なる態度をとつたかを闡明される。この間の詳細な御考說は既に「日清役後支那外交史」のうちにみえてゐるから省略するが、「支那はあらゆる機會、あらゆる機關を利用し、またあらゆる手段を盡して、外國の援助を請求嘆願して、我が國の要求を阻抑せんとした」（十四頁）こと、及び「我が國の三國の要求は無條件に承諾し、支那の要求に對しては一歩も讓歩しないといふ態度は、支那をして日本は支那に對しては强硬で酷に當るが、西洋諸國に對しては實に弱い、懾ること虎の如くであるから、西洋諸國の力を引張つてさへ來れば、日本を抑制することが出來るといふ考へ

を強くせしむるに至つた」（十五頁）とのべられる。そして最後に「露西亞は下ノ關條約の遼東半嶋割讓の條件に對して、東亞永遠の平和に害があるといふことを理由として、日本に干渉した。何故に日本は露西亞の旅順口、大連灣租借要求に對して干渉しなかつたか。何故に日本は支那を援助して積極的に干渉を試みんとしなかつたか」といひ、轉じて「支那も何故に日本の遼東半嶋割讓を要求した時に露西亞の援助を熱心に求めしやうに、露西亞の旅順口、大連灣租借を要求した時に熱心に日本に援助を求めなかつたか」とのべ、更に「日本が獨力で干渉することは出來なかつたならば、何故に露西亞が三國干渉の時獨佛兩國を聯合して干渉したやうに、英米と聯合干渉を試みなかつたか」（二十二頁）とて、この時期におけるわが外務省の史料の公表を希望して筆を擱いてをられる。

以上蕪雜ながら一應の紹介を終つた。博士の指摘されてゐるやうに、淸季外交史はしかく重要なるにもかかはらず、その研究の貧困なことはわれらのともに遺憾とするところであり、今後の研鑽に俟つものが多いと思はれる。なほ從來、單に淸季に限らず淸一代の研究は、なさるべくして現在もなほ遲々たる有樣であることは、最近の研究雜誌等をみてもその一斑が窺はれる。同治

年（明治四年・一八七一）李鴻章の上奏に「日本距蘇浙最近、士商往來已久。現雖尚未立約、而在滬之日本男婦、已有百餘人、散居西洋租界。該國並有官員留滬、約束商民」といひ、或は「天津向無東洋人（日本人）往來」とのべた當時と、僅々六十數年後の今日とを比較すると轉た感慨の深いものがある。支那近世史は東洋近世史を專攻せんと志すものはいはずもがな、古代中世一般東洋史を研究するものにとつても共通の題目であり、また既に各國の歷史を世界史として把握しなければならぬ今日、國史、西洋史を攻究するものにとつても看過しえぬ時代であらう。

博士は「我が國においては西洋史の方には近代史の重要なことに着眼する學者もあるが、我が國の學者が支那の史料を利用し、これを露西亞その他諸國の史料と比較考證して研究する上において、またこれ等の史料を解釋する上において歐米學者の到底企及すべからざる便宜を有する東洋史のこの時期に關して、これが研究に手を染めんとする學者のなきことは洵に遺憾である」（四頁）といはれ「東洋史に關する限り、近代殊にこの時期は殆んど我が國學者の無關心、無風地帶の有樣である。學問は現代に關係なく、現代に關係があつては學問らしくなく、かへつて俗學であるやうに考へらるる觀がある。これに反して一方では政治は學問に關係なく行はれてゐる。

政治と學問との關係なく、古代と現代との聯絡が斷絶してゐるやうな異風景を呈してゐる」（四・五頁）と述懷される。そして時期が餘り新しいため、學問の研究對象として多少不適當と思はれる點については歷史家として新しいからといつて、かくも重大な時期を見ながら見ない振をして過すといふことは、後世に對して濟まないやうにも考へられる。司馬遷の史記にせよ、班固の漢書にせよ、後世に重ぜらるる所以は、實に當時にあつて當時の事實を直筆したからではないか」（二頁）。さらに「また現代に餘り近いため色々の偏見、時論、獨斷、個人の私見などに煩はされ、公平冷靜な史料の取扱ひは出來難いといふやうなことも、この時期を學問的に研究する上の一つのハンデイキャップである。しかしその代り時代を支配してゐる空氣はわかるから、史料を解釋し利用し得る上においては、時代の隔絕したる後世よりは餘程便宜があるわけである。今我等の眼前に累積してゐるこの時期に關する尨大浩繁なる史料は後世になつては今日ほど容易に解釋し、讀破し、利用することが出來ないことは明かである」（三頁）と述べてをられることは、われらにとつて大いなる獎勵の言葉とならう。

（昭和十三年五月・歷史學研究八ノ五）

清朝史の入門書

稻葉岩吉博士の「支那近世史講話」について

君山稻葉博士が東洋史學界の耆宿であることは更めていふまでもない。博士にはすでに明治四十五年に「朱舜水全集」、大正三年に「清朝全史」上下二卷、昭和八年に「光海君時代之滿鮮關係」、同十年に「增訂滿洲發達史」、同十一年に「釋椋」等を始め、ここだくの論著があるが、本年（昭和十三年）二月にまた「支那近世史講話」なる一書を世におくられた。これは博士が陸軍大學校において東洋史を講ぜられた際の手記を增補されたもので、菊版本文四百五頁の大著である。顧みるに博士の前著「清朝全史」は民國四年、但燾氏によつて漢譯されたほどの名著であつたから、輓近滿洲史、清朝史等への關心が昂まるにつれて、同書の再版は學界のひとしく要望するところであつたが、本書の刊行はまさしくその渴をいやされたものといへよう。

いまその內容をみるに、專ら清朝史に重點を置き、中華民國史はすべて割愛されてゐる。請を

分つことと二十一、附錄として三論文を收む。これら一々について詳細に述べる紙幅がないから、以下講を追うて簡單に紹介してゆくこととする。

「英國大使マカートニイの北京訪問」（一―一四頁）は乾隆五十八年（一七九三）秋、英吉利國王George 三世から高宗乾隆帝にと遣された大使 Lord Macartney（馬戛爾呢）の所謂「英吉利朝貢」の顚末につき、大使謁見に關する儀禮上の葛藤、乾隆帝より英吉利國王への勅諭等をのべて支那人の傳統的な閉關自足主義及び皇帝の權威等に論及される。「乾隆帝の王座」（一五―二四頁）は清朝發跡に關する考證をのべて、清朝の祖先は、清朝の天子自らも明白に知らなかつたほど微祿なものであつたこと、それが太祖奴兒哈赤に至つて大を致したのは、（一）女眞人と明國との關係に變化を生じ（二）明の遼東防備が空虛になり（三）豐太閤の朝鮮役がいよいよこれを助長し、つひに財政の破綻を來して明の滅亡となつたことを敍べられる。「サルホの戰」（二五―三六頁）は明の神宗萬曆四十四年（太祖天命四年・一六一九）の春に行はれた奉天の東薩爾滸山における明淸興廢の關ケ原戰をのべられたもの、附記に「淸太祖遺事」六條が記されてゐる。「滿洲より北京へ」（三七―四五頁）は太祖、太宗の遼西徑路を概觀したもの、明軍の紅夷砲が威力を發揮して天聰二

年（崇禎元年・一六二八）春、北京を陥れずして奉天に歸還した始末をとかれる。「清鮮關係」（四七―五八頁）は滿洲の朝鮮役たる崇禎元年と同九年との前後二回の役につき、皮島の毛文龍問題より仁祖の南漢山城出城降服までの經緯をとかれた博士の最も得意とされる一講。「流賊の禍」（五九―七〇頁）は煤山における崇禎帝の最後を叙して流賊李自成等のことに及び、明季の饑饉、三餉の稅等が流賊禍を助長させたこと、睿親王多爾袞がつひに北京に入城したまでを叙し、附錄として「辮髮令について」の一文がある。

「滿洲人の新政府建設」（七一―八〇頁）は北京陷落後の明室遺王遺臣の興復運動と、清朝の討征の概要を記されたもの。「三藩平定と康熙大帝」（八一―八五頁）は所謂雲南の呉三桂、福建の耿精忠、廣東の尙可喜の三藩の亂の遠因をたづね亂勃發以後の經過と康熙帝のこれに處する戰略とをのべ、始めて支那本部の平定されたことを述べられる。「支那領土の構成」（九七―一一五頁）は康熙帝の支那本部統一以後における領土構成の政治的推移につき、露國との角逐、投歸せる外蒙古、達賴刺麻及び支那との關係、準噶爾王國の最後、回疆始末等に分つて論をすすめる。「領土構成の意義」（一一七―三〇頁）は前講をうけて、滿洲人の能力及び地位と、支那本部とそれ以外の領土

との經濟的關係より考察されたもの、なほ「乾隆帝と香妃」が附載されてゐる。「滿漢關係」（一三一－五六頁）は前後兩講に及び、まづ滿漢關係は廣い意味で滿人の民族制度と漢人の家族制度との葛藤であるとし、後者については親屬、家制、婚嫁、親子、親屬會、繼承の諸項に分けてのべ、次に滿人の生活及び統治に關する梗概、封禁、滿漢藉制等に言及し、氏族經濟破綻の原因と推移とを指摘される。「漢人の擡頭期」（一五七－六五頁）は漢人が經濟、思想方面より擡頭し來る形勢を主として康煕、乾隆兩時代に求め、前者を時代精神の利用者、後者をその降伏者とする。「民亂及び其の平定者」（一六七－七七頁）は乾隆末年に白蓮教徒の逮捕事件より端を發し、十年の歲月に亙り四川、湖北、陝西、甘肅、河南の五大省に擴大した民亂につき、その原因が滿洲八旗の世襲漢人化といふ腐敗の一般的原因と、濫賞の結果の驕慢、奢侈、怯懦といふ特殊的原因とにあること、そして無責任官吏の存在はこれに對してただにその無力なるのみならず、却つて助長さへなし、民亂の平定者が所在の鄉勇（庸兵）であつたことは、淸朝の能力が獨り兵力のみに止まらず官治まで效能がなくなつたといふ事情を明示し、衰兆は早くも乾隆時代に始まつたとのべられる。「廣東貿易と外人」（一七九－九二頁）は嘉慶二十一年（一八一六）の Amharst 卿差遣ののち、Na-

pire 卿によつて試みられた同權主張の問題をとりあげ、廣東における外人貿易の情態をのべて同問題の失敗せる顚末に及ばる。

「阿片問題」(一九三―二〇一頁)は次講の「阿片戰爭」(二〇三―一一一頁)につづくもの、阿片問題必然の結果として起つた英支間の阿片戰爭の推移を語られ、南京條約の結果英國が支那に格段の地步を占めたこと、支那が近代國際間に一席を占むるに至つたこと等を叙べられる。「太平天國の革命」(二一三―四八頁)は革命軍及び宣傳、湘軍、南京の攻圍戰の三節に分つて革命亂の經過をのべ、同亂が漢人によつて提起せられまた漢人によつて解決されたこと、外國關係が加はらなければ內亂は解決し難いといふ暗示をえたこと、支那固有の宗教、民族思想等は偉大なる執着力を有すること等を結言とされ、近代と現代との界限であつたとされる。「淸國の衰弱と其影響」(二四九―六二頁)は露國の黑龍江割取と日本の開國とをのべて、淸朝の衰弱が最も重大な影響を與へたことを指摘される。「西太后時代」(二六三―三〇五頁)は、葉赫拉氏の生立、咸豐帝熱河に殂す、中國本位の思想、同治帝及び皇后の殂落、光緒帝即位、日淸戰爭、革新氣分の釀成、戊戌の百日變法、義和團事變の諸項に分つて、數奇の運命に弄ばれつくした一代の女傑西太后を中心としてこ

の時代の内治外交を縦横に論ぜられたもの。「辛亥革命及び其意義」（三〇七―三二頁）は孫文及び革命黨自責悔禍の表裏、西太后及び皇帝相次いで殂落す、武漢兵變、宣統讓國の各節につき、清朝史の末路と中華民國史の發端とに論及して本文を結ばれてゐる。

最後に附錄三章がある。「前滿洲の開國と日本」（三三五―五四頁）は秀吉朝鮮役が大陸國家回轉の契機をなし、女眞人（滿洲）の開國した事情を朝鮮、日本の兩國側と結びつけて論述された興味ある示唆にとむ一文。「朝鮮社會の諸問題」（三五五―七九頁）は朝鮮は稀にみる革命の乏しい國柄であるが、一政權が永續すると弊政が堆積するとて、大家族制と國家、嫉妬排擠、家禮、庶孼、宗教等の各問題につき現今いはば朝鮮の疾病ともいふべき諸點を率直に指摘されたもの。「滿洲史研究の現狀」（三八一―四〇五頁）は內藤湖南博士の清朝史研究方法とその傳統や反映などを論評されたわれら學徒の傾聽すべき一文である。このほか圖版十四葉、卷末に索引二十九頁が五十音順に排列されてゐて便利である。

以上が本書の概略の紹介であるが、複雜多岐に亙る困難な支那近世史をとり上げて、文は暢達平易、しかも各講の分け方は旣に指摘した如く概して十數頁をいでざる叙述のうちに要領よく纏

められ、讀者をして覺えず卷を終へしめるあたりは、さすが圓熟せる博士の非凡な手際といへよう。なほ叙述について注目される一つの點は、全講を通じて清朝に對して同情的に感ぜられることであり、かつ博士の抱懷する東亞の經綸は自ら憂國の筆致となつて隨所に釀しだされてゐる。最後に望蜀の望をいへば、各講の終りか卷末かに參考文献が一括されてあれば、讀者を裨益することに更に大なるものがあらうと思ふ。

（昭和十三年六月・歷史學硏究八ノ六）

東西文化の交流に關する西洋人の二著書

ヒューズ氏「西洋文化の支那傳入」と勞弗爾博士「中國耶教藝術」とについて

思ふに東洋近世史上に刮目すべき二大事實がある。一は西力東漸による支那の洋化であり、一は同じくその影響をうけた日本の勃興である。從來の東洋史は概して支那を中心として考へられてゐただけに、東海の一島國に過ぎぬとされた日本近世の勃興こそは國史上はいはずもがな、東洋史上、世界史上空前の最大事實といはなければならない。

われらはこの盛代に生を享けた喜びを感謝するとともに、支那及び歐米文化が如何にわが文化と交渉をもつたか、而してまた將來わが文化は如何に進むべきであるかを攷究する必要を痛感するのである。が、それは兎も角として、支那近世における西歐文化の傳來は、これまた支那文化史上の最大事實たることは疑ひない。もつとも東西文化の交流は、もとより近世に初まつたもの

でないこと言を俟たぬところであるが、純然たる歐洲文化が支那と深い交渉をもつやうになつたのは、明末清初における耶蘇會士の渡來以後とすべきであらう。これらの諸問題についてはその性質上、内外諸學者の夙に注目攷究するところであり、大小ここだくの論著があらはれてゐる。今これら諸研究を回顧することは、次に紹介せんとする著作を理解する上にも必要なことであるが、しかく簡單には敍べえられないし、またその一部は筆者がかつて考察したこともあるので、ここでは割愛することとする。

E. R. Hughes; The Invasion of China by the Western World. London, 1937.

筆者が右のやうな丸善の新刊廣告に心惹かれて、本書を手にしたのは今春のことであつた。全文三二四頁に及ぶかなりの大著。本書は V. T. Harlow 及び J. A. Williamson 兩氏が刊行してゐる The Pioneer Histories 中の最新刊で、同叢書はすでに A. P. Newton; The European Nations in the West Indies, W. Foster; England's Quest of Eastern Trade, E. Prestage; The Portuguese Pioneers, J, B. Brebner; The Explorers of North America, E. A. Walker; The Great Trek. J, C. Beaglehole; The Exploration of the Pacific, F. A. Kirkpatrick; The

の有名な東洋學者で、土俗、考古、說話、動植物史等に最も造詣あり、また文獻學、西藏學、イラン學、蒙古、滿洲の語言、文學等にも勝れたる研究をなし、その論考は百五十餘に及んでゐる。

さて前記耶蘇會士の傳敎には、まづ可見的な敎會の藝術的裝飾——殊に繪畫によつて求道者に感銘印象を與へる方法をとつたが、支那に對してもこの點が窺はれる。もつとも初期においては外國の藝術作品は輸入されず、支那畫家の手によつてこれを模寫したらしい。その好例として著者は陝西省西安において自ら購入した Hsüan-Tsai（＝玄宰）筆の一卷（絹地に描かれた六幅——以下PI・IIと略稱す）について紹介的說明を施してゐる。玄宰（明史に元宰とあるのは康熙帝の諱玄燁をさけたものであらう）とは有名な明末の書畫家董其昌の字である。PIは樹下に使徒と思しき一人が石のベンチに腰を下し、鵞ペンと開いた書物とを手にして傍の子供に何か話してゐるやうに構圖。PIIは和蘭の將校の如く武裝した一人か、同じく二人の兵士(手に盾と大刀とを持つてゐる)を引具して前進してゐる圖、私の想像では「惡魔の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふ」たさまを象徵したものではないかと思ふ（エペソ書六ノ一一—七參照）なほこの將校の頭髮は長髮が肩に及んでカールしてゐるのが注目されるが、これと關聯して一九〇三年 Berliner Ka-

lender で出版された比朗德客爾日（Brandenburg）大選擧 Frederick William（明明和貨平思重武聖帝）の像——これは後述する Figs. 5 中の Fig. 1, 以下 F1・2と略稱す——の頭髮等に言及してゐる。次にPⅢは復活直後の基督が Emaus 途上において二人の弟子に現はれたといふ有名なルカ傳（二四ノ一三―三五）の記事を畫きたるものなるべく、PⅣは獄中におけるバプテスマのヨハネらしく、PⅤは白髮白髯の使徒ルカが柳樹の下に臥した牛に腰をおろし想を凝して書物に何か認めてゐる構圖。最後のPⅥは露臺に並んだ一人の男子と三人の婦人と子供とを描いた藝術と科學とを象徴した寓意的なもの。一人の婦人は地球儀と地圖とを持つてをり、他の一人はコンパスで四角な木板に圓をかいてをり、もう一人は笛と鏡？とを持つてゐる。男子は長方形の文書（folio volume?）を兩手に持つてゐる。以上の繪は油繪から模寫したものではなく、Miniatures か恐らくは Engravings から模寫したものらしく、董其昌は當時の事情より考察して恐らく利瑪竇（Matteo Ricci）と何らかの交渉があつたものと思はれる。

次に「程氏墨苑」に收録されてゐる四種の Engravings にうつる。これは利瑪竇自身が漢文で説明を附してゐる聖書物語で、F2は、その第一である。これは基督がガリラヤの海を歩むをみ

て、Petrus（伯多落・伯多祿・彼得）も渡らんとして沈みかかつたといふ有名な話を畫いたもの（マタイ傳一四ノ二五—三三・マルコ傳五ノ三五—四一・同六ノ四五—五二・ルカ傳八ノ二二—五參照）印畫の上には右から左へ sin lĭh puˊ hài（=信而歩海）と書かれてゐる。このテキストの全文は「信而步海、疑而卽沈」の見出しで卷末に收録されてゐる。F 3 は前述 Emaus 途上の基督と二人の弟子とであり、lh' t'û vâen xiˇ（=二徒聞賓）とみえ、F 4 は yû sĕ quéi k'í（=婬色穢氣）で、有名な Sodom（鎖多麻・瑣多瑪）の町における Lot（落氏・洛得）のことを記したもの（創世記一九章參照）。テキストは何れも同じく卷末に收められてゐる。F 5 は基督を抱ける Madonna の圖、T'ien chù（=天主）と書かれ、テキストの代りに「述文贈幼博程子」なる一文を添へてゐる。利瑪竇のこの撰文は凡て萬曆三十三年（一六〇五）頃のものと推定される。次に俗畫の一例として Rococo 風の歐人男女二名を描けるものや（PⅦ）、更に北京で入手した支那婦人、子供等をかいた水彩畫の二點（PⅧ・PⅨ）を掲げ、その畫風の半洋半漢であることを指摘し、次に耶蘇會畫家の最も著名な作品として「乾隆帝の勝利」(The Victories of the Emperor K'ien-lung) をひき、その二幅を收録してゐる。

そして最後に十九世紀における新教派の一例として John Bunyan の 'Pilgrim's Progre s" (天路歷程として我國でも有名) の支那譯 (Canton 1871) 中の挿畫より六種を提示してゐる。指示窄門 (Evangelist directs Christian)・救出泥中 (Christian in the Slough of Despond)・戰勝魔王 (The Conflict with Apollyon)・陰翳祈禱 (Christian in the Valley of the Shadow of Doth)・迎猶款客 (Entertainment by G ius)・新迎兩婦 (Marriage at Gaius' House) がこれである。以上はその所說の概略にすぎぬが、興味ありかつ貴重な勞作の一篇といへよう。

因みにいふ、文殿閣の覆刻洋書には右のほか Howorth; History of Mongols. Yule; Cathay and the Way Thither. Schmidt; Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses (蒙古源流), Grammatik der Mongolischen Sprache. Bretschneider; Mediaeval Researches. Rockhill; The Journey of William of Rubruck. Wylie; Chinese Researches. Hirth & Rockhill; Chau Ju-kua. (趙汝适) Wattars; On Yuan Chwan's Travels. Cahen; Some Early Russo-Chinese Relations. Grube; Die Sprache und Schrift der Juc en (女眞)・Whymant; A Mongolian Grammar. Möllendorff; A. Manchu Grammar の如き良著が續々世におくられて

をり、近くは Henri Cordier 畢生の大著 Bibliotheca Sinica が刊行されんとしてゐることを一言附加へておく。

以上歐洲文化の支那傳來につき、歐米人のものせる概說と各說の一つとをとりあげて簡單に紹介したのであるが、從來歐米人の支那學研究はその困難なるにも拘らず、眞摯かつ着實に行はれてをり、現在その研究雜誌にも「通報」Toung Pao, Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extrême-Orient, Revue des Arts Asiatique, Asia Major, Ostasiatische Zeitschrift, 前記 MSOS, Artibus Asiae, JRAS, China Journal, 新しくは Monumenta Serica, Harvard Journal of Asiatic Studies 等々の如き有力なものがあつて、われらを啓發することが多い。それにつけても東洋學の研究發展こそは、蓋しわれら日本人に課せられた天賦の責務であらう。（昭和十三年十月・史潮八ノ三）

日本人の南方發展

岩生成一教授の「南洋日本町の研究」について

近世初期にはじまる邦人の南洋發展は、國史上空前の事實であつて、ただに國史上のみならず、歐船來航前後における轉換期のわが海外交通、並びに東西兩國民の角逐場の觀を呈した南洋の國際情勢を理解する東洋史・西洋史の上からも、檢討すべき問題であらう。思へば當時わが同胞が格別の保護奬勵もなきにかかはらず、不便な交通機關と、衞生設備も未だしき炎熱とを克服し、しかも「鎖國」政策のまつただ中にあつて、幾多の不利な條件と戰ひつつ、よく前後百數十年の長期にわたつて發展活躍したことは、まさに史上の一驚異であつて、ややもすれば邦人の海外發展の素質を疑ふごとき輩は、すべからくまづこれらの事實を正視すべきであらう。

しかるに從來、右のごとき重要問題がなぜ系統的に攻究されなかつたか。それにはつぎの二つの理由が指摘される。その一は國內史料の貧困であつて、かれらの活動地が邦人の耳目より遠く

隔つた海外であり、わが移民も大部分は無名の士で記錄に上りがたく、かつ切支丹禁制と「鎖國」政策の結果などのためであつた。その二は、國外關係史料蒐集の困難であつて、葡・西・蘭・英・伊諸國民によつてかかれた旅行記・航海記・報告などは、往々稀覯書に屬し、しかも極めて斷片的な零細な記述が多く、これらの史料を探究渉獵することは、たとへ前記史料の貧困を補ひうるといふ見込はついても、これを實現するには特別なる便宜と時間と根氣と、さらに豐富なる語學の力とを必要としたからである。

さてかかる困難を見事克服して「日本人南洋發展史」の大問題に、正面から四つにとり組まれたのが、ここに紹介せんとする臺北帝大教授岩生成一氏の力篇「南洋日本町の研究」である。教授がこの問題に興味をもたれ、その研究に着手せられたのは大正十三、四年ごろといはれてゐるから、すでに教授が東大の國史科に在學せられた時分より、ひきつづき十六、七年に及ぶ研究の成果であり、この間、あるひは兩度南洋に渡つて、したしく現地を踏査し、あるひは英・蘭・西・葡などの關係諸國を巡歷して、その秘庫に未刊の新史料を探訪せられたのであつた。本書の骨子は、昭和十年より同十二年にわたつて臺北帝大文政學部の「史學科研究年報」に連載された同教

授の「南洋日本町の盛衰」と大差ないが、今回、南亞細亞文化研究所より刊行されるにあたつては、細部にわたり、かなり增補訂正されたとのことである。つぎにその內容を概觀すると、全篇を六章にわかち、首・尾の二章を序論・結論とし、中の四章をそれぞれ一章づつ交趾・柬埔寨・暹羅・呂宋日本町の盛衰にあてられ、さらに各章を大體、日本町の發生・位置・規模・戶口數・行政(機構・主腦人物)・在住民の活動(軍事的・宗教的・經濟的)にわけて敍述され、名實ともに論理整然たるものがある。當然のことながら、卷末に索引があり、貴重な圖版も十八葉あつて懇切である。

ここにいふ日本町とは、邦人のみが特定の地域に集つて一部落を形成してゐる居住形態であつて、呂宋ではマニラ市の東南郊の Dilao と San Miguel, 交趾では Faifo と Tourane, 柬埔寨では Pinhalu と Phnom-Penh, 暹羅では Ayuthia の都合七ヶ所である。因みに、この外に邦人が諸外國の間に雜居分散してゐるところに至つては、ほとんど全南洋の要地に及び臺灣・澳門・東京をはじめ、モルッカ諸島の Amboina, Banda, Teanate, Tidore, Makian, Celebes 島より、Borneo, Sumatra 島、ジャワ島の Batavia, Bantam マライ半島內の Malacca, 太泥 Patani, 六崑 Ligor などの諸地、さらに遠く印度にまで擴大してゐた。

さて日本町建設の主要條件としては一、邦人の相互依存　二、諸國民との商取引の利便　三、當該國官憲の外來人取締の必要の三點があげられる。その存續期は江戸時代の初期、その位置は貿易港で中央政權所在地の近郊をしめ、その行政は自治または半自治、その住民は失意の武士階級・追放された切支丹信徒・貿易關係者・在住外人の雇傭員などでありその數は、ほぼ呂宋——三〇〇〇人、暹羅——一五〇〇人、柬埔寨——三五〇人、交趾——三〇〇人にして、概計五一五〇人と推定される。これを、當時の南洋移住日本人の總數七〇〇〇——一〇〇〇〇人と對比すれば、そのかみの日本町が、邦人南洋發展の樞軸的勢力であつたことが窺はれる。ただしこれを他の支那人などに比すれば、遠く及ばぬところであつて、呂宋の支那人は一萬二千から二萬、交趾のそれは Faifo を中心として一六四二年ごろ五千餘、柬埔寨では十六世紀末に Pnom Penh に三千餘在住したと傳へられる。なほ日本町の機能は貿易仲繼に重點がおかれたが、「鎖國」による人員物資補充の杜絶をはじめ婦人の移民が僅かで、かつ永住的傾向が少く、政府の獎勵後援の缺如に加へて移民自體の紛爭加擔や、在住地國内産業への未參加もあり、さらに他の移民の競爭勢力の増大など、内外各方面の相重なる不利なる環境のため、いはばその萠芽期に、すでに凋落を

餘儀なくされてしまつた。

右のごとき邦人南洋發展史の回顧は、「東洋の地中海における二つの眼」――臺灣と海南島とを足場とするわが南進策や、刻下、世界の耳目を聳動せしめてゐる佛領・蘭領東印度の問題、さらに支那の「華僑」などと關聯せしめても緊要かつ興味あるところであるが、筆者にとつても、ことに東洋諸國と日本との交渉史にいささか筆をそめてゐる關係上、ことに興味ふかく有益に讀了するをえた。それにしても、教授がしばしばしたしく現地を踏査し、また內地・臺灣はいはずもがな、蘭國ハーグ國立文書館、英國ロンドン印度省記錄課、葡國リスボンのアジュタ文庫、西國セビヤ印度文書館などの各文書をはじめ、河內極東學院（l'Ecole français d'Extrême-Orient,）・咭バタビヤ地方文書館など、各種の文書を縱橫に驅使して、堅實な論證をすすめてをられるのはわれらにとつて一種の羨望を覺えつつ、その御勞作に對し深き敬意を表する次第である。著者の雄大なる計畫「日本人南洋發展史」の完成を祈るのはひとり、筆者のみではあるまい。因みに本書は、學界最高の榮譽たる帝國學士院賞を授與せられた。（菊判本文三六七頁、定價四圓、南亞文化研究所發行）

（昭和十五年七月・史潮一〇ノ二）

近代における日支文化關係

實藤惠秀氏の『日本文化の支那への影響』について

日本と中國との文化關係を回顧してみると、隋・唐以前のむかしより宋・元・明と時代の下るに從つて、その交渉がますます緊密甚大となつてをり、しかも日本のこれをうけ入れる態度が、積極的より次第に消極的にむかつてゐることが知られ、つひには中國の方が反對に日本の文化を逆輸入するといふ風に展開してゐる。そしてこの傾向が著しく表面にあらはれてきたのは、實に日清戰役以後といふことができ、この意味においても、同戰役は日支文化史上、劃期的の事件として注目すべきである。

すでに四年にわたる今回の支那事變は、わが軍事・政治・經濟のいづれの點からいつても、まことに空前の出來事であつて、後世の史家は、おそらく現在われらが考へてゐる以上に、これを重大視することであらう。ともあれ、われらの眼前に脊負はされた問題は、その好むと好まざる

とに拘らず、今後かなりの長期に及ぶべき經濟建設とともに、文化工作のあることを覺悟せねばならず、これまた日支文化史上、いまだ類例をみないところとなるに相違あるまい。さうしてこのことを眞劍に考へれば考へるほど、われらはまづ必ず歴史にさかのぼつて、その過去の眞相を客觀的立場から冷靜に科學的に再檢討しなければならない。「溫古知新」「彰往考來」「稽古徵今」などの言葉を本當に生かさうと思ふならば、主觀に捉はれたり、感情に奔つたり、獨斷に陷つたりすることなく、いやしくも安易・急速なる結論のみを欲してはならぬ。この手數をへた上で生かせるものを生かしてこそ、まことに「佛つくつて魂をいれる」ことであり、まさしく事變の畫龍點睛でなければならぬ。ただしこの際に注意すべきは、史家はややもすると、自分の攷究した問題に熱心なるあまり、自分では留意してゐるつもりでも、いつのまにか時代と環境とを超越乃至は輕視した比較對照を敢行して、兩者をむすびつけたがる傾向がある。——類似と同一とはいかに接近してゐても、永遠に交はらぬ平行線であることを忘れてはならない。たとへば現在、異民族の漢民族統治策といふことが、いはゆる文化工作の上からも重視せられ、專門家の研究をはじめ世人の關心にも上つてゐるやうであるが、なかには十分の研究もせずに、元・淸兩朝の統治策

が現在そのままあてはまる――否、全然あてはまらぬ、などと一方的の斷案を下すやうなことは危險であらう。

ここに紹介せんとする實藤教授の近著（菊判三一三頁、定價二圓八十錢、昭和十五年七月螢雪書院發行）は、その書名が示すごとく、主として「日本文化の支那への影響」を對象としたものであるが、時代の範圍は日清戰役後より現在にいたる四十數年間をとり扱はれた近代日支文化關係とも稱せられるものであり、資料に對する謙遜・堅實なる風格と、文化工作に對する熱烈・眞摯なる態度とが窺はれる。著者は早大文學部において支那文學を專攻され大正の末年に卒業されたが、その年はやくも滿洲・支那に遊び、一昨年昭和十三年「中國人日本留學史稿」刊行ののちは、外務省文化事業部の在支特別研究員として再び滿・支に渡られた。本書の內容は、すでに廣告などで讀者も熟知されてゐることと思ふから、ここに重ねて細かい目次をかかぐることは省略する。ただし廣告だけをみた方には四篇の題目――日本から中國へ・日本留學・日本文化と中國文化・文化工作――相互のあひだに、あるひは連絡統一をかき、斷片的の記事を羅列したかの感をいだくむきもあると思ふが、本文をよめば、おのづから年代的にも內容的にも、序列系統のあること

を發見されるであらう。しかも平明な文章と機微をとらへた題目の選び方とは、讀者をして思はず卷を了へしめるに相違ない。筆者にとつては、ことに日支交渉史に筆をそめてゐる關係もあつて、最近に繙いた論著のうちで、一氣に讀了したものの一つであつたこともつけ加へておきたい。

日本からの翻譯・重譯、言語・文章・字體・繪畫などの日本化をはじめ、中國の情死をも敢て「日本文化の中國文化への影響の一つ」に數へてをられるのも興深く（六五頁）、日本留學の通俗小説「留東外史」を活用してその日本觀を把握され、留學生への對策としては、「先づ第一に日本文化に對し尊敬の心を有ち、日本語をマスターしたものでなければ留學を拒絶する。而して留學を承知した以上は、心に愛を有ち、手には鞭を有つて、彼等の留學目的を達成せしめずんば歸さない」（一一一頁）とし、張之洞の「勸學篇」にみえる日本留學の理由を列擧して、「中國人の日本留學といふことは、眞に日本に對する尊敬と愛との上に成り立つたものではない。日本に對し、まことの戀愛を、結婚を、したのではなく、かりそめの戯れの戀をしたに過ぎないのだ」（一四〇頁）と喝破する。事情は多少異るが、現在自分のしつてゐる滿洲國その他の留學生についても、「心に愛を有ち、手に鞭を有つ」ことは必須と考へられ、いやしくも一國を代表して將來、祖國の運命をその

雙肩に荷ふべく選ばれたる俊秀にして、試驗の際などに往々大膽なる不正行爲を敢てなすがごときを目擊するは、まことに痛恨の極みである。ついでながら一部の留學生諸君に猛省を直言する。

つぎに日支近代文化競爭を論じては、「われわれ日本人は非常に丈夫な胃の腑を有してゐる。日本料理以外の支那料理・西洋料理・印度料理、何でも御座れ、平氣で、否、喜んで口にし、何れも十分に消化する。……われわれは生理的に胃の腑が丈夫なだけでなく、文化を消化する民族的健康も勝れてゐると信ずる。近來の日本文化に關する論議が從來のわれわれのよきものを發揮するといふのなら、其は當然過ぎることであるが、萬一、將來文化的に鎖國するといふものがあるならば、眞の愛國者ではないと思ふ」(一五七頁)との警告もあれば、新聞雜誌における日支關係においては、「中國では新聞は日本より五十三年前にその發生を見ながら、然も自ら經營を創めたのは日本より六年も遲い」(二一七頁)が、「巨大なる船は容易に沈まないけれども、同時に方向轉換も容易ではない」(二一八頁)と、後なるものの先になる事情や、暗示的な言葉を投げかけ、中國書籍中の日本假名については、氏の資料に對する不斷の周到綿密さの一斑が窺はれる。排日以前物語はつぎの文化工作とともにもつとも味讀に値するものの一、そのころは「支那の方から手

を差しのべて來、」「日本の土を踏まないで、日本といふ國の女に憧憬を懷いた青年すらあつた」「ほんとうに明朗」な日支關係であつた。しかるに最近になつて、「暴風雨以上」に逆轉したのは何故であるか。「それは支那人の中華觀念、日本に對する認識不足や其他の原因もあるが、今一つ見遁すべからざることは、歐米諸國が陰にまはつて排日をけしかけたことである。日支相爭ふことは彼等にとつては、永久安全であり、一歩前進ですらもあつたのである」(二六六頁)

最後の結論的な文化工作の問題に入つては、「學校教育よりももつと大きい力をもつもの」として收音機(ラジオ)を指摘し(二七五頁)、言語文字の問題を重視して「日本の商品に、看板に英語が添へられてゐるのも文化的植民地の觀があるといはれても致し方がないのではあるまいか?」(二七五頁)、「われ等の『同文』は親愛の一表現だが、彼等の『同文』は自尊の回顧を起させる因緣以外の何ものでも、最近はなかつたのだ」(二二七頁)といひ、今後兩國の言語の接觸は次第に活潑にならうが、「異變を生ずるのは寧ろ日本語の方面ではあるまいか」(二七九頁)。そして「支那大衆の教育問題も、自然日本の責任として考へねばならぬ時期が到來す」れば、その時は注音符號を襲用するか、ローマ字を利用するかそれとも日本の假名を適用するか、等のことが眞面目に考へられねば

ならず、「それがまた日本國内の文字問題を再檢討する副效果を生むかも知れない」（二八〇―一頁）。「今後は日支兩國のアクターにより、日支兩國を背景とした映畫も續々と現れ、日支兩國人の前に映寫されることだらう。……このことは小説や演劇の方面でもいへる。日本にもパール・バックが――いや、日本にこそ、パール・バック以上のものが出ねばならない」（二八三頁）。「今までの支那でも、日本の文化事業を『文化侵略』と稱して排斥し、その委員になるのを敬遠した。今後は餘程事情は變るが、彼等の心の底に、この子供のやうな氣持を洗滌させておくことはよろしくない」（二八四頁）。又中國知識階級に寄せては、「貴君等は、表面協力して、内心に於て、何時かは協力を拒否せんとする下心を藏してゐるやうな人はないと思ふ」（三〇〇頁）と駄目をおし、「出版工作も、その他の文化工作も、要は支那人が心の底から尊敬することをやらねば無駄である。清朝の『文化工作』といはれてゐるものは、實は、『漢人知識階級懷柔策』でしかなかつたことを識らなければならぬ」（三〇四頁）。A氏の握手主義とB氏の拳骨主義支那觀の正反對を評しては、「それは多くが主觀的・感情的・獨斷的の支那觀でしかなく客觀的・理性的・科學的の支那觀ではないからである」（三〇六頁）。「一ケ所でよいから、近代支那のあらゆる文献――單行本・雜誌・新

聞等――の取り揃へてある所があつたならば……」（三〇七頁）、そしてまた「從來は興隆支那の研究だけで足りたかも知れぬが、現在は、その支那が何故に衰退したかを究める必要があると思ふ」（三〇八頁）と。

以上は私の讀後感の一斑を拾うたにすぎず、いまだ言及すべくして省いた點も少くないが、右によつても窺はれるごとく、確實なる近代日支文化關係をとかれる一方、輕妙な比喩を用ひつつ最後の文化工作まで巧に筆を運ばせて校正も、一、二のゲタと、五ケ所ほどの誤字に氣附いたのみですこぶる丁寧であるが、一言望蜀の感をいへば、なかにはすでに發表ずみの論文も收錄された關係でもあらうが敍述のうちに若干重複、前後するところがあつた。しかしこれも讀み方によつて問題を整理統一してゆくのに役立つものであつて、もとより瑕瑾と稱するにはあまりに小さい。かつて戴天仇が「日本論」において中國留學生に警告して、日本人の支那研究のいかに熱心かつ隆盛なるに反し中國人が「思想上の門戸閉鎖」をなし「知識上の義和團」であるかを指摘したことについては、中國人はもとより、現在のわれわれも反對にふかく反省して、量より質の眞の支那研究に向つていよいよ協力するとともに、そのむかし日清戰後の「雨過天晴」を、今回の支那

事變を契機として、さらに一段と飛躍具現することこそ望ましい。ただし眞の尊敬なきところに、眞の融和は望むべくもない。

〔附記〕　稿をへて「中日文化協會」の成立を新聞紙上でしつた。日支兩國文化の提携により、兩國民の思想と感情との融和をはかる日支友好和平の大前提となし、あはせて東洋文化を中外に發揚せんとの趣旨のもとに、南京和平建國陣營の文化人らによつてかねてよりその設立を準備されてゐたが、このたびその準備を完了したので七月二十八日に南京の東亞クラブで、盛大な成立大會を開催した。同協會の名譽理事長に推された阿部大使および汪精衞氏をはじめ中國側會員および日本側來賓約四百名參集し、理事長褚民誼氏の協會成立宣言につづき、名譽理事長・名譽理事などの挨拶あり盛會裡に終了した。同協會は本部を首都南京におき、その主なる事業は、兩國學術の聯合研究、留學生の相互派遣、圖書の交換、音樂美術、演劇、映畫の相互紹介、大陸運動の共同發展、學者および藝術家の相互紹介と招待、その他日支文化事業の合作經營――などで、こんど必要に應じて支那各地に支部を設け、將來大いに日支兩國文化に寄與せんとしてゐる。

（昭和十五年九月・歷史學研究一〇ノ九）

東洋を背景とした國史概說

志田不動麿氏の『東洋史上の日本』について

これまで東洋史上の日本をとりあつかたもののうちで、古代より近世までに亙つてのべられた著書としては、木宮泰彦氏の「日支交通史」（大正一五）、辻善之助博士の「海外交通史話」（昭和五）、中山久四郎博士の「支那史籍上の日本史」（昭和五）、秋山謙藏氏の「日支交涉史話」（昭和一〇）・「日支交涉史研究」（昭和一四）などをあげることができよう。むろん、このほか一定の時代、特殊の問題についてのべられた勞作はなほ多くあるが、このたび、非常の時局の熟視されつつ、志田學士によつて「至難の業」であるこの問題にたいし、わがくに現在の學究レベルにおいて、群書を精讀整理し、一應ここに成書となつたことは同慶のいたりにたへない。著者はこの業に着手されてから六年を經過したことについて、病弱と怠慢とに歸し、きはめて謙遜してをられるが、これはもつぱら前者によることであつて、筆者は、著者が日に月に病弱とたたかはれつつ、この難

業をこれだけにまとめられたことに對しては、むしろ期間のみじかかつたことを感ずる。このことは菲才の筆者も、おなじやうな問題の一部に手をつけてみて、痛切に感じてゐる次第である。

さて、本書の內容を一瞥してみよう。まづ、序論・結論のあひだに章をわかつこと十。序論では、支那における華夷思想をのべて東夷のうちなる日本の地位におよび、第一章古代の日支關係では、支那の政治的・文化的勢力が東漸して、ここにはじめて日支關係がなりたち、邪馬臺國があらはれて日支交涉がおこなはれる事情、ついで一轉して、朝鮮における三國の鼎立と日本、および南朝と日本との關係におよぶ。第二章大化改新前後の日支關係では、聖德太子と隋および遣唐使の派遣についてのべ、第三章奈良時代では、盛唐の玄宗皇帝をひきあひにだして日唐交通におよび、轉じて、日渥および、日渤の關係にいたる。第四章平安前期では、前章の日唐交通をうけて、太宰府貿易の意義と遣唐使廢止との事情と、入唐僧圓仁・圓珍、および高岳親王の御事蹟などについて興趣ふかい敍述をすすめ、つぎに、當時の東アジャに雄據する日・唐・渤・羅の諸關係を各方面から考察する。第五章平安後期では、支那の五代・宋を中心とする時代を對象とし、支那の南海貿易、宋を中心とする時代を對象とし、支那の南海貿易、宋と遼・金・麗との關係お

よび日本と高麗・五代・宋との關係をのべ、日宋の輸出入品や入宋僧奝然・寂照・成尋・榮西らの往來をのべる。第六章鎌倉時代では、南海貿易と南宋・元・麗の關係、日本と南宋・元・麗との關係をのべて、宋代における積極的貿易の展開、宋錢の鑄造・輸入・流通および元寇・「倭寇」の事情にいたる。第七章室町時代では、日・明・鮮・琉の諸關係を各方面から考察して、なだかい「倭寇」・ゴーレスの問題にもふれる。第八章近世初期における日本の發展では、ヨーロッパ人の東洋渡來に筆をおこし、ポルトガル人の支那・日本への來航通商と、オランダ人・イギリス人のそれとを指摘し、轉じて豐臣秀吉の雄圖、および御朱印船と日本人の海外發展とをのべて、今日われわれの關心にもふかい南洋の日本町におよぶ。第九章江戸時代では、鎖國と臺灣の歸屬問題およびオランダ・淸との長崎貿易を通觀する。最後の第十章明治維新とその後の日支關係では、南京條約と幕末の開港および外國貿易、ついで明治維新との日支新關係の成立、さうしてやがて日淸・日露の兩役より、歐洲大戰、滿洲・支那兩事變にまで言及する。

以上は本論のあらましであるが、結論のをはりにのべてあるつぎの言葉をきかう。著者は、支那事變の解決について、紀元二千六百年の天長節にあたり、支那派遣總司令部の發表した「派遣

軍將兵に告ぐ」を肝銘すべきを提唱し、善隣友好・協同防共・經濟提携の三原則が日滿支三國のあひだにほんたうに實現された曉こそは、そのかみわが奈良朝と唐・渤海の鼎立した文運隆盛の往時のアジヤに比すべくもないと結ばれる。

さて、をはりに以上を通讀した私の所感を一言つけくはへておきたい。まづその特色の一としてあげられるものは、三百三十頁あまりの內容に、かくも複雜な東洋史上の日本の姿を、かみは古代よりしもは現在の支那事變にいたるまで、たくみにその要點をのべられてゐることである。望蜀の感をいへば、近世方面に多少ものたらぬところがないでもないが、今日のごとき時世にあつては、學究的良心以外の紙幅・出版・定價などの問題にも掣肘されることであるから、これらの點にも、著者の苦心がひそんでゐることと推察する。つぎに著者は、緖言のうちに「相互の政治的、經濟的接觸面を重視」して「文化的接觸面」に言及されなかつたことをことわつてをられるが、實際は隨處に文化的のことにもふれてをられるし、他日この方面の間隙をみたす御勞作を期待したい。また各章のはじめには、「極東史上に占むる日本の地位」「日本を中心とする國際政局」「國際事情」等々の名のもとに、當時における日本の背景をまづ明かにすることをわすれず、

いかにも東洋史上の日本の題目にふさはしい。しかも單に日本と大陸南洋との相互關係を明かにするのみならず、大陸における鮮・滿・支・蒙および南海などの相互關係も、同時に考察されて、あらゆる角度から手がたい論述をすすめられる。つぎに彼我交渉の時代區分については、人によつていろいろ異見もあることであらうが、そもそも時代區分・章節のたてかたは、われわれも論著作成上に、もつとも苦慮する點のひとつであり、右は著者の苦心の結晶として、にはかに云云することをひかへ、同學の士とともにさらに檢討をくはへることとしたい。最後にもつとも便利なのは參考書目のあがつてゐることであり、著書のほか、章別に代表的な雜誌論文がをさめてあるし、また索引もついてゐて、著者の學究的親切さを如實にしめしてゐる。されば以上のごとき本書は、東洋を背景としたあたらしい國史概說でもあり、同時に日本を中心としたあたらしい東洋史概說でもあり、また昭和の「善隣國寶記」「異稱日本傳」でもあらう。かくしてわれわれは、近世における日本史を「世界史上の日本」として期待せねばならぬ。

なほ本書の敍述は簡潔であるから、個々の史實などについても、かなりふかく理解してゐないと、十分に會得されず、したがつて興味のすくない點もあるとおもふ。もつとわかりやすくすれ

ば、本書の二倍三倍にかくことも容易であらう。因みに校正もていねいで、通讀中に筆者のきづいたものは、つぎの數ケ所にすぎなかつた。（一一九ノ三、一七五ノ三、二三五ノ一二、二三六ノ一一、二七五ノ一、二七九ノ八、三三〇ノ一四）。をはりに、筆者のもつとも氣づかふのは著者の健康である。切に自重自愛せられんことをとくにお祈りする。（菊判三三八頁、昭和十五年十二月、四海書房發行、定價三圓三十錢）

（昭和十六年三月・歷史學研究十一ノ三）

目錄の學は學中第一の緊要事なり

東方文化研究所編の

『東洋史研究文獻類目』について

一

「目錄の學は、學中第一の緊要の事なり」とは、清の王鳴盛（一七〇一―九七）のことばであるが、學術の研究にその文獻類目が必要なことは、いまさら贅言を要しないところ、入門者の手びきとなるは勿論、日に月にあひついで發表される研究論文などは一個人の力によつて、これをひとつひとつ入手讀破するごときは至難のことである。どんな研究がどんな雜誌に發表されてゐるか、といふことを見おとすまいとすることさへ、かなり困難なのであるから、あるひは座右において檢索の用に便する意味からいつても、あるひはいま自分の對象とする研究が、現在學界においてどの程度の成果をあげてゐるか、といふことをしる意味からいつても、文獻類目はまさに必要か

このほか、民國で發表された論文ををさめた中華圖書館協會の「國學論文索引」（四六判）もあるが、われわれにたやすく見られない中國發行の雜誌が多くて利用價値が比較的すくない。

歐米で發表されたものに對する Henri Cordier（1894—1925）の大著 Bibliotheca Sinica（1904—8, 1922—24）や、Bibliotheca Indosinica（1912—15）などに言及してゐたら際限がないから、ここでは省略するが、青木富太郎氏の「東洋學の成立とその發展」（昭和十五年、B6判・三四四頁、螢雪書院）は、日本および各國學界における東洋學研究の發達狀態を、文獻を紹介しつつ概説したもので、この種のものとしては例のすくないだけに注目されよう。

三

右にのべたやうな編著は、いづれも便利なものであり、文獻類目の必須なることは、すでに萬人に論がない。したがつて各種の研究雜誌は、いづれもきそうて卷末に雜誌論文の要目をかかぐるを例とし、やがてこれが雜誌としてのひとつの體裁にまで進展してきた。

しかし完全な論文要目を、雜誌發行のたびごとに作製してのせることは、實に編輯者のなみなみならぬ時間と勞力とを必要とするものであるから、あるひはその範圍を交換雜誌のみにかぎる

とか、あるひは各種の雜誌を閲讀しうる特別の便宜とか、施設とかがないかぎり、ややもすればお座なりになりやすい。したがつて、直接にその雜誌がみられないやうなときには、いちど他誌にのせられたものを轉載するといつた勞力の重複をいくたびもくりかへしたり、どうかすると、まへの誤植をそのまま忠實に轉載するやうな悲喜劇もおこる。

むろんおのおのの雜誌には、おのおのの立場があり、また讀者のことも考へねばならぬから、なるべく便利なやうに、新刊書や論文の要目などを附加したいのであるが、似たやうな、しかも不完全な要目の羅列は、たんに勞力の重複、用紙の節約の點からいつても、一考すべきではなからうか。むろん世の中のことは、あらゆるものに多少の無駄があるものであり、すくなくとも商品として店頭にでる雜誌について、一學にこれを改善するやうなことは至難であらうが、各誌はそれぞれの特徵を活かすやうに工夫し、無駄はすこしでも省きたいものである。

四

さて、これを東洋史について考へてみると、昭和九年以來、京都の東方文化研究所で發行してゐる「東洋史研究文獻類目」（四六倍判）は、たしかにこの方面における決定版といふことができ

よう。類目は日本・支那の部と歐米の部とにわかれ、著者索引があり、また學界消息・批評紹介をかかぐるほか、分量をしめすために、ページが記入してある。研究發表・講演などは講とあつて一目瞭然、見たい見たい「大論文」とおもつて、やうやく借り出してみたら、わづか二、三ページの小論だつたといふやうな心配はすこしもない。缺點は昭和九年以前のないことであるが、これも事情やむをえまい。ちかごろ昭和十三、四年度の合併號が發行され、都合五冊をかぞへるにいたつた。

昭和九年度（十年七月、九一頁、水野清一・増村宏・大島利一氏編）
同　十年度（十二年二月、一三六頁、水野・森鹿三・増村・大島氏編）
同　十一年度（十四年一月、一五一頁、森・大島・藤枝晃氏編）
同　十二年度（十四年十二月、一二九頁、小川茂樹・大島・藤枝・佐藤長氏編）
同　十三、四年度（十六年九月、二一四頁、小川・藤枝・佐藤・六花謙哉・田中整治氏編）

本書は右のごとくであるから、多少氣のついたことをのべさせていただく。

まづ發行年月の點である。はじめは七ケ月目であつたのが、ついで二倍の十四ケ月、さらに三

倍餘の二十五ケ月、二十四ケ月、二十一ケ月目となつてゐる。これは外國雜誌とか、用紙印刷とかの關係もあつて、なかなか思ふやうには運ばぬものであるが、なるべく早く發行していただくことがのぞましい。因みに、十五年度の分は、すでに年末に印刷に附された由であるから、ちかくまたその恩惠にあづかることができるとおもふ。つぎに論文の數が九、十、十一年度と遞增してゐたものが、十二年度に減少してゐるのは、支那事變の影響によるものとおもはれ、十三・四年度の合併號が、その十二年度の二倍にすら達してゐないのは、いよいよ中國側の論文の減少をものがたつてゐる。たとへば、支那の部の收錄雜誌論集の數をみると、十二年度の五十八種なるに對し、十三・四年度はその四分の一にちかい十五種に激減してゐる。なほ、わが國の論文が事變の影響によつて、量質ともに變化をみせてゐる點は、注目されねばならない。つぎに分類上のことで、一般史の諸國史を東方・南方・西方・北方に四大別してあることは、東洋史の中心をいはゆる中國におく關係から妥當どかんがへられるが、南方と西方とについては、區別するに困難な地域もあらう。しかし元來、分類といふものは完璧にできるものでなく、一長一短はまぬかれぬところで、いたしかたあるまい。

批評紹介の欄によつて、「著書」類目の渇もかなりみたされてはゐるが、この整備をねがふのは望蜀であらうか。をはりに、文獻類目のごとき地味で困難な事業に挺身されてゐる京都の方々の自重加餐をいのり、この文獻類目がひとりわが國のみならず、世界における東洋史學界の權威書として、ますます重きを加へられんことを切望する。

（昭和十七年一月・歷史學研究十二ノ一）

明代における支那人の日本研究

渡邊三男氏譯註の『日本考』について

「歴史學研究」が螢雪書院の時代、「歴史學叢書」亞細亞研究篇が企圖せられ、私にははからずも、「支那人の日本研究」なる題目があたへられた。私の研究は、日支交渉史、ことに明清の間を中心としてゐたので、勇躍ひきうけてはみたものの、漢魏時代より元代までの史料を一應とこのへ、さていよいよ自己の專攻の明代へ入つてゆくと、史料がにはかに激增し、なかには稀覯本、また書名のみしられて原本の見られないものなど多々あり、明清時代の日本關係書を涉獵概觀するだけでも、多少この時代の根本史料をとり扱つてゐるだけに、かへつて並々ならぬことを發見した。

ここに紹介せんとする「日本考」のごときも、內閣文庫・國立北京圖書館に所藏せられる稀覯本であつて、あるひは大正四年のころ、珍書同好會本「日本風土記」によつて、一部に頒布せら

れたり、あるひは秋山謙藏氏の「支那人の觀たる日本」（岩波講座・東洋思潮）、「日支交渉史話」、「日支交渉史研究」のごとき著書によつて、その一斑が紹介せられた程度であつた。このたび、その全部の譯註が完成したことは、私一個人にとつても、まことに幸せなことである。

さて、この書はわが豐太閤の朝鮮の役の最中に上梓せられたもので、淸の黃遵憲の「日本國志」王先謙の、「日本源流考」、濾雲龍の「遊歷日本圖經」のごとき、明治維新後の代表的な日本研究書の先驅をなすものとみてよい。元來支那人の日本研究が高揚した時期は三回あり、第一回はいはゆる「倭寇」の活躍した明の嘉靖萬曆の交、第二回は日淸・日露兩役の直後、第三回は滿洲事變以後のことである。したがつて、本書は第一回における代表著書の一つであることは言ふまでもないし、さらにいへば魏志倭人傳このかた、ほとんど千數百年間、支那人の日本觀のある部分を形成してゐたものでもある。

譯註の底本となつたものは、北京圖書館の善本叢書第一集所收の「日本考」五卷二册（明萬曆刻本による影印本）で、これに内閣文庫の明版「全浙兵制考」三卷三冊の附錄「日本風土記」同じくその日本寫本、および珍書同好會本「日本風土記」（何れも五卷二册）を比較參照されたものであ

るが、解説中、侯繼高撰の「日本風土記」と李言恭・郝杰共撰の「日本考」とが、同一書であることを考證してをられるのは、けだし譯註者の意を得たる點であらう。その內容については、詳細に紹介する紙幅をもたぬが、日本國志、倭國事略（巻一・二）、字書・以路法字樣・歌謠（巻三）、語音（巻四）、文辭・詩賦・山歌・琴法・棊格・雙陸・征行所禁（巻五）で、その範圍はすこぶる多方面にわたつてをり、日本人にたいして好意をもたなかつた時代の著作ではあるが、ある點については詳細精緻をきはめてゐると同時に、ある點では荒唐無稽の誤認ををかしてゐるのが注目される。附錄として「全浙兵制考」巻二・近報倭警の一部（許儀後の提報）がある。

なほ譯文について一言する。本書は漢文のいはゆる逐字書き下しではなく、原文を忠實に直譯する方針をとつてをられる。元來、漢文の飜譯については、（一）原文の逐字書き下しと、（二）意譯とがあらうが、兩者とも一長一短があり、前者の返點訓點にしたがふ書き下し文が譯文にならぬ場合があると同樣、後者の意譯・自由譯には原文に忠實ならず、時にはとりかへしのつかぬ誤譯のある場合もある。本書はいはば、その中間をゆく譯文として一考に値ひする。ただし私のやうに原文そのものを知りたいものにとつては、原文の附載されない場合には、書き下し譯文の方

が便宜が多い。とまれ、譯註といふ仕事は、元來きはめて地味で、しかも骨折り苦勞はすこぶる大きい。私も支那正史の日本傳、淸史稿の日本志などの譯註をこころみて、このことを痛感したが、譯者はさらに近く鄭舜功の「日本一鑑」を刊行する豫定といふ。私はいまからそれを樂しみにしてゐる。（A5判、三七八頁、定價四圓五十錢、大東出版社、昭和十八年二月）

（昭和十八年四月・歷史學硏究十三ノ四）

第三部　研究餘滴

明末清初の琉球請援

明末清初における外國請援の中、ローマ・日本などについては、つとに公にされたが、このほかに記事は零細であるが、安南・交趾・じやがたら及び海外某國への請援もこころみられた。琉球請援も、これら外國請援の一部である。

（一）魯藩の請援

「華夷變態」巻一にみえる請援書は、（1）建國公遣琉球書（2）自建公寄琉球咨文（3）監國魯王勅諭琉球國王世子尙質予で、年月日はいづれも監國魯四年＝慶安二年・順治六年（一六四九）五月二十一日と推定される。請援の貨物は長槍・大劍・衣甲・硝藥などであつた。（1）は前年十月十七日の建國公鄭彩の日本請援（求通商船――鄭彩寄書二篇の一）の延長とみられる琉球日本請援であり、（3）は表面請援の文字はみえないが、內容より推して請援書とみなさる。琉球は毅宗の殂後も、明の遺王に事大の禮をつくし、順治元年・三年、および請援書をおくつた前月の四月にも入貢してゐる。

（二）耿滿の請援

「華夷變態」巻四の福州求硫黄於琉球書四通（いづれも丙辰――延寶四年・康熙十五年・一六七六）は、（1）總統兵馬上將軍令諭（五月八日）（2）通官鄭斐らの書（七月一日）（3）咨琉球三法司（五月十六日）（4）福建閩安水軍聯絡營遊府造送隨帶出使員役水手花名冊（六月）であるが、（4）は求硫黄書ではなく鄭斐らの名簿である。これよりさき、康熙十二年に請援あり、琉球これに應じて渡海したが、清人に抑留された。同十六年春、琉球より再び赴いたが、前年十月、耿精忠の降清により無意義となつた。なほ琉球請援に關しては、同時に日琉・琉清關係をも考察する必要がある。

（昭和十一年六月・史學雜誌四七ノ六）

明末清初の南海請援

明末清初において、殘明の遺王・遺臣が明朝の恢復を志して諸外國へ請援したうち、日本・琉球にたいする請援については、さきにその一斑を發表したが、ここに記す南海諸國への請援も、これら外國請援の一部である。

（一）康永寧は隆武元年乙酉＝順治二年・正保二年（一六四五）十二月に安南借兵に赴いたが、風波のため目的を達しえず、翌年五月に歸國した（瞿共美＝粤遊見聞・徐鼒＝小腆紀年坿攷卷十一・川口長孺＝臺灣割據志など）。なほこの失敗の結果であらう、永寧は翌六月と八月とに黃徵明に從ひ、日本請援に赴いてゐる（林恕＝華夷變態卷一）。

（二）朱舜水は浙江の舟山を基點として、弘光元年乙酉（一六四五）には日本より交趾に轉じ、永曆五年辛卯＝慶安四年・順治八年（一六五一）には安南より日本へ航し、同七年癸巳＝承應二年・順治十年（一六五三）には日本・安南・暹羅の間を往來し、同十一年丁酉＝明曆三年・順治十四年（一六五七）正月には交趾に達したが、いはゆる「安南之役」のため抑留された。これら舜水の海外經營

は、明朝恢復の資をえんがためであつた（今井弘濟・安積覺＝舜水先生行實・翁洲老民＝海東逸史卷十八など）。

（三）鄭氏は芝龍・成功・經およびその一族も日本へ請援したが、芝龍は隆武二年丙戌（一六四六）六月に海外某國に兵を徵してをり（思文大紀卷八）、成功・經も芝龍の業を繼承して、日本・琉球・安南・交趾・柬埔寨・呂宋、臺灣のオランダ人などと通商し、糧餉の不足を補うてゐたことは、舜水の意圖と同樣であり、內外諸種の文獻にみえるところである（文獻省略）。

（四）時代はやや降つて康熙十六年丁巳＝延寶六年（一六七七）のころ、後三藩の一である靖南王方より、じやがたら（Jac tra）即ちジャワのバタビヤのオランダ人に軍船十隻の請援をなしたといふが、その後の消息は不詳である（華夷變態卷五）。耿精忠は前年の十五年九月に淸に降つてゐるから、靖南王方といふのは、精忠と相通じてゐた鄭經かもしれない。

なほ右の事情を理解するには、その背景をなす南海諸國の入貢の情況、およびこれら各國と明朝との關係を考察しなければならぬ。

（昭和十二年二月・史潮七ノ一）

明末淸初鄭氏の呂宋招諭

「國姓爺の呂宋招諭」については、幣原博士が論ぜられてゐるから、ここでは主として子の鄭經および孫の鄭克塽のときにも、なほ呂宋招諭乃至攻略の計畫を有してゐた事情をのべることとする。これには、まづ「國姓の臺灣攻略」を回顧しなければならない。この風聞はすでに隆武二年のころよりあり、ひきつづき永曆六・八・九・十一年などにもあつて、その計畫は同十二・十三年にも試みられ、つひに同十五年三月には、鄭成功みづから舟師二萬五千をひきゐて臺灣にむかひ、オランダ人を擊破して Zeelandia の開城をみたのが、同年十二月十三日（陽曆では翌年二月一日）であつた。

ついで國姓爺の雄圖は、ただちに呂宋にむけられ、その席の暖まる暇もなく、翌永曆十六年三月（陽曆四月）には Father Fray Victorio (Vittorio) Ricci を呂宋につかはし、イスパニヤ總督に招諭の圖書をおくつたが、その結果は呂宋に騷擾を釀し、この間臺灣にのがれた支那人の報告により、呂宋征伐を決行せんとするうち、熱病のために斃れ（西洋の傳聞は陽曆七月二日とし、支那

側では陰暦五月八日＝陽暦六月二十三日とす）、その効果をみずして挫折した。一方 Ricci は厦門より臺灣にかへり、翌康熙二年三月一日（陽暦四月八日）マニラに再來し、支那人の財産を恢復するための平和の使者として、Letters from the mandarins who were directors and guardians of Cot-sen's estate written by order q his son を齎した（これは華夷變態巻一にみえる「鄭經・鄭鳴駿訴論」と同様の意味があらう）。この要求は受けいれられ、Letters for the prince and the mandarins をあたへて歸國せしめたが、ここにいふ his son, prince とは、Cot-sen 即ち國姓の子鄭經をさしたものと思ふ（Blair and Robertson, The Philippine Islands, XXVI, Events in Manila, 1662—63）。

ついで康熙五年八月、呂宋國王は巴禮僧を臺灣につかはし、起院說教をもとめたが、鄭經はかへつて臣禮をとらしめ、もし進貢の約にそむけば問罪の師を發すとて、叩首唯々として遣はし歸した（臺灣外記巻十三）。康熙十一年正月にふたたび呂宋征伐の議がおこり、顏望忠・楊祥はこれを上言したが、馮錫范は三失と豐熟とをのべて、みだりに兵を用ふべからざるを明示したため中止された（同巻十五）。翌々十三年三月には李德を日本請援につかはす一方、楊賢は洋船を監督して

暹羅・咬𠺕巴・呂宋に往販し兵食に資した（同卷十六）。

康熙二十年、鄭經の歿後もなほ呂宋への關心はさらず、同二十二年六月二十四日、劉國軒が淸將施琅に破られて、澎湖より臺灣に至り、鄭克塽は文武を會して「戰守之策」を議するや、黃良驥・洪邦柱は「取呂宋爲基業」ことをいひ、鄭德瀟は地圖を示してその取るべき事宜を詳說した。（同卷二十八）。しかるに、澎湖を失ふの報は、淸軍に內應するものを出し、翌閏六月初四日には、さらに馮錫范が諸鎭と商議して、なほ呂宋征伐の雄圖を實現せんとしたにもかかはらず、訛言は四起し、百姓は驚惶懷疑し、そのうへ國軒は、澎湖すでに失ふをもつて、呂宋攻略を放棄して淸に降るの得策なることを力說した結果、錫范の「應分兵死守」の議も用ひられず、つひに鄭克塽以下、臺灣をあげて淸に降ることとなり（同卷二十九）、かくて鄭氏の呂宋招諭乃至攻略は、おほむね失敗したのである。

而して鄭氏が呂宋を目指したのも、唐突の間に計畫せられたものではなく、國姓爺の父鄭芝龍のときより、ひきつづき日本・南海方面と、たえず貿易を行つてゐたことは、諸書にみえるところである。

（昭和十二年七月・史學雜誌四八ノ七）

鄭錦舍の名字に就いて

鄭錦舍は、いふまでもなく鄭成功の長子鄭經のことである。錦舍てふ稱呼は「華夷變態」「顯宗實錄」「同改修實錄」等によつて日本・朝鮮にも知られてゐるが、その稱呼が何であるかは從來必しも明かにされてゐなかつた。

「南疆繹史摭遺」「小腆紀年」「小腆紀傳」等にみえる鄭經傳は、成功の附傳で記事も詳かでなく、「臺灣外記」も名字に關しては、字の元之を傳へるに過ぎない。されば魏源も「聖武記」卷八に「案鄭經官書作鄭錦、殆二名也」といひ、林紓も「吳鄭論」に漠然「名經、俗呼曰錦舍」と記し、Davidson が Chêng Ching (The Island of Formosa) と傳ふれば、Siebold は Tsching King Mai 鄭經舍 (Eroberung der Insel Formoso durch den Chinesen Koksenja im J. 1662)、Pfister は Tcheng Kingman 鄭經滿 (Notiees biographiques et bibliographiques etc.) と傳へてゐるやうな次第である。

之について從來三つの解釋があるやうである。第一に日本では川口長孺が「臺灣鄭氏記事本末」

卷上に「按錦經華音相近。故轉訛稱之耳。實非別名也。舍爺又音相近。錦舍蓋經爺而非別稱也」と註し、經爺 ching-yeh→錦舍 chin-shê と解した。第二に支那では郁永河が「僞鄭逸事」に錦舍に註して「即鄭經、閩俗父爲官、其子皆得稱舍」といひ、初めて舍に對する明確な解釋を下したが、第三に之をうけて朱希祖氏は「清代官書記名臺灣鄭氏亡事」の序に於て鄭經に註して「官書稱錦、即經小名」とし、「從征實錄」の序に於ては「官家子作舍、爲福建土語（……舍爲官家子。疑爲少爺二字縮音）」として、少爺 shaoyeh→舍 shê なる見解を述べられた。錦が果して小名なるかは未詳であるが、錦の名は「記明臺灣鄭氏亡事」・「清史列傳」卷十八逆臣傳・「聖武記」・市村博士の紹介せられた「清初臺鄭の鄭氏に關する文書」（史學雜誌十三編九・十號）・「華夷變態」卷一の「鄭經鄭鳴駿訴論」等にもみえ、又「從征實錄」にも經の諱を避けて京を用ひたと同じ意味で、錦の代りに金を用ひてゐる點などよりも、その用例を窺ふことができ、朱氏の御考説は概して當を得てゐると思ふ。錦・經改名の時期及び改名の理由が錦經近似音のためか否かについては不詳であるが、之は恐らく無關係であつたと思ふ（姚啓聖「憂畏軒奏疏」には錦經が混用されてゐる）。以上により前記經舍・經滿等は、錦舍の訛傳であることが知られる。

なほ「舍」を附された名は、鄭氏にも裕舍（經弟）・蔭舍・渡舍（芝龍第二・三子）奎舍（泰孫）・按舍（鳴駿子）等の類例があり、その他洪未舍（鄭泰配下）・趙賜舍（任甲）もあれば、かの明の太祖の義子のうちにも周舍（沐英）・道舍（何文輝）・柴舍（朱文剛）等があり、やはり同じ意味に於て用ひられたものであらう。また官名、王公貴顯の親近左右の通稱乃至その子弟の尊稱として用ひられた「舍人」「小舍」の名稱も、關係があるのではないかと思ふ。次に「爺」の附された名は同じく鄭氏に開爺（鳴駿）・祚爺（泰）等があり、この用例はかの國姓爺とか王爺・阿爺・老爺・太爺・爺々・爺孃（爺は耶にも作る）等のそれと相對照して「舍」「爺」と比較されるであらうし、また黄興老・陳震老の如く「老」の附された名もあるから、之らの用例意味も併せ考へねばなるまい。

（昭和十二年十二月・史潮七ノ四）

鄭成功の江南經略

國姓爺に關する史料はかなり豐富で、わが國においても二十數種の論著をみ、支那においても三十種以上もある。西洋でも、いはゆる Koxinga, Koxin Koxinja, Koksenja, Cot-sen 等々として十數種の記事があり、これらの關係史料を一應渉獵するだけでも、相當困難である。

江南經略に關する根本史料は楊英の「從征實錄」以下、支那側の記載であり、日本側のものは概してこれを襲ふにとどまるが、水戸義公の「朱舜水文集」や川口長孺の「臺灣鄭氏紀事」などは、翁洲老民の「海東逸史」以外に傳聞のない朱舜水の長江入りや、そのほか支那側にみえぬ新史實をつたへるものとして注目される。黃宗羲の「鄭成功傳」（鄭亦鄒の「鄭成功傳」と大同小異）は、當時の碩學のものとしては案外、月日などに杜撰な點が少くないし、江日昇の「臺灣外記」は稗史小說といはれてゐる割合に、史料的價値がたかい。總じてこれらの史料は、相互に比較檢討を要し、地理的・年代的考證に俟つべきところも、かなり多くある。

鄭成功が、明室の恢復を念願として活躍した大小幾多の征戰中、永曆十二・三年（順治十五・六

年）の南京攻略と、同十五年（順治十八年）の臺灣攻略とは、かれの一生を通じて特筆すべきもので、後者については幣原博士の御研究もあるが、前者にはまだ纏つた研究はないやうであり、またこれと聯關して、成功とともに長江入りをなし、長驅蕪湖に赴いて活躍した張煌言の江南經略のあることを忘れてはならない。

明朝復興運動の烽火は、崇禎十七年、北京陷落の翌々五月、まづ史可法・馬士英らによつて福王が南京に擁立せられたが、はやくも翌年五月に南京陷り、ついで唐王が福州に、魯王が紹興に、桂王が肇慶にそれぞれ擁立せられたが、やがて福州も陷り、成功の母は難に殉じ、父芝龍の淸に降るや、かれは永明王の正朔を奉じ、毅然として淸の招諭をしりぞけ、廈門・金門を根據とし、まづ主として福建の沿海地方を經略したが、ことに漳州、海澄などの攻略には力を用ひ、ついで浙江の沿海方面におよび、一意南京攻略への準備をおこたらなかつた。

永曆十二年五月十三日、中提督甘輝を首程、右提督馬信を第二程、後提督萬禮を第三程とし、成功は延平郡王招討大將軍として、みづから令後第四程をひきゐ、舟師約十萬、船艦三百餘艘をつらねて思明州を發船。沿海を攻略して、八月十日に羊山まで赴いたとき、不幸暴風雨のため覆

沒し、その出鼻をくぢかれたので一時ひきかへし、浙江の沿海各地で養兵派餉、造船製器に從事し、翌十三年四月に捲土重來、ふたたび長江に打つていで右地を攻略、ことに六月の瓜州・鎭江の戰は未曾有の大勝を博し、南京陷落も時日の問題かにみえたが、七月その攻城寸前において敗績し、甘輝・萬禮以下、多數の勇將猛卒をうしなつたので、あたら手中にをさめた瓜州・鎭江も放棄して長江を下り、八月最後に崇明を攻めたが、克たずして兵を收め、成功は血涙を呑んで後圖を期し、九月七日に思明州にかへつた。

右の攻略戰中、鄭軍に獨特な鐵人や倭銃隊が活躍し、また今の督戰隊にも比すべき陣後に長繩をはつて督戰したり、あるひは柴を積んで火攻の計をなし、雲梯・滾被・布袋などを用ひて攻城攻略すれば、一方淸軍にも、精鋭をほこる鐵騎あり、また長江などに滾江龍をはり、滿州木浮營をまうけて、鄭軍の遡航をはばみ、あるひは僞り降る苦肉の策や、穴城の奇謀、さては酒瓶中に火藥をつめて手榴彈にしたり、木馬釘叉を放置して防禦を嚴にするなど、興味ある兩軍虛實の駈引も行はれたし、また炎暑になやみ、水土にくるしみ、大雨・泥濘とたたかふこともあつた。

成功の敗因については、成功側はもとより、淸側の政治・經濟・思想など各方面より兩者を併

せ考察すべきであるが、十萬の大軍を提げて長江入りを敢行するには、經濟的にも不安があり、ひいて諸種の敗因を誘致した點もみとめられる。なほ南京の支那における政治的重要性、乃至鄭軍と「倭寇」との聯關なども、問題として取りあげられよう。成功は永曆十五年、臺灣攻略ののちも、呂宋を招諭してさらに南進をはかつたが、志をとげずして、翌康熙元年五月、臺灣に病歿した。

（昭和十三年五月・歷史學研究八ノ五）

張煌言の江南經略

國姓爺の史料が豐富なると同樣、張煌言に關しても、自著「北征錄」以下三十餘種の參考文献があげられ、その研究には、兩者の史料を比較檢討することが必要である。

張煌言の江南經略は、これを二部に分つことができよう。第一は定西侯張名振と行をともにしたもので、順治四年には舟山より崇明に至つて覆沒したが、同十一・二年の交には長江を遡つて金山におよび、あるひは瓜州・儀眞・燕子磯あたりまで侵入した。

第二は國姓爺と行をともにしたもので、順治十五年には舟山より羊山に赴いたが、またもや覆沒し、翌十六年五月、捲土重來の國姓爺軍の前驅嚮導として、ふたたび舟山・崇明をへて金山・瓜州を陷れ、ここより南京攻略の作戰上、長驅蕪湖にいたり、さらに九江まで赴かんとしたほどであつたが、やがて寧國において國姓爺軍の南京敗北をしり、七月二十九日、急遽蕪湖にかへつた。しかるに、たのむ國姓爺は鎭江・瓜州をすてて長江を下つてしまつたので、煌言は淸軍のためその退路をたたれて大いに窮し、再擧をはからんとして果さず、これより建德・休寧・徽州・

湄安・天台など各地を間行して、やうやく浙江の海岸地方に辿りつくことができた。こののち林門・桃渚・東甌などの間を往來して恢復をはかつたが、國姓爺はまもなく卒し、永明王・監國魯王も相前後して殂すなど、秋風落莫の感を深くしたのであつたが、煌言も康熙三年に懸嶴において清兵に捕へられ、九月つひに害せられた。

煌言の經略について注目すべき一つの點は、明室復興運動の立場より、まづ經略地方の地理的考證、個々の事實の闡明のほか、つねに國姓爺の行き方を煌言のそれとを對比しつつ、考察すべきことであり、そこにおのづから共通せる要素と、相反せる部分とを見いだすのである。なほ江南攻略の歴史的意義、その敗因などについては、これを明清兩方面より攷究しなければならない。

（昭和十三年七月・史學雜誌四九ノ七）

閩粤攻略の「倭寇」

「倭寇」の研究は、地域的に年代的にきはめて廣範圍にわたり、明側の史料だけでも數十種を下らず、その對象また多岐多方面におよび、種々なる觀點より研究が綜合されねばならないが、ここでは問題の所在を、日支交渉史上の立場より、明代における閩粤攻略の「倭寇」にかぎり、その基礎的段階として歴史地理的考察を試みた。

それは（一）「倭寇」といへば、江南江北に重點がおかれやすく、閩粤方面は比較的に等閑視されてゐること（二）從來「倭寇」は豐太閤の朝鮮の役をもつて大體終熄したとされてゐるが、福建の厦門を根據とせる明末清初の鄭氏一族らの明朝復興運動と、地理的・歴史的——たとへば攻略屯居の地方・軍隊の組織・戰術その他——に一聯の關係があるらしいこと（三）時局にたいする吾人の關心が、北・中支より南支に注がれだしたこと、等の見解によるものである。

攻略の地名を一々列擧することは省略するが、その活動期間、範圍、攻圍、攻陷、屯居などの情況を、他の沿海地方と比較して概觀する。福建では洪武より萬暦にいたる約二百五十年間に、

くりかへし無慮百數十ヶ所が寇掠され、攻圍八・攻陷九・屯居二。廣東ではほぼ同じ期間に、約七十ヶ所を寇掠、攻圍一、攻陷三となつてゐる。これを遼東の二十數年間の三回、山東の二百二十餘年間の二十數ヶ所と、江浙の各二百年間におけるそれぞれ二百ヶ所以上の寇掠、攻圍二一、攻陷一九、屯居七にくらべると、期間は閩粤がもつとも長く、かつ遲くまで行はれたが、その程度範圍は江浙のごとく甚だしからず、遼東・山東は明初、江浙・閩粤はともに明末にちかい嘉靖年間が甚だしい。

また「倭寇」と支那海賊との關係は、ことに密接であるが、著名な海盜百數十人について、その據地を分類してみると、福建六、廣東三、江浙一の割合となり、種々の示唆をあたへる。つぎに明側の防禦について一言すると、福建には衞六、千戸所一〇、巡檢司五二、瞭望臺三、水寨七、烽堠一八三あり、廣東には衞九、千戸所二七、巡檢司七四、烽堠一三二あり、注目されるのは、嘉靖の築城は別として、江浙には千戸所が多く、遼東山東には城・堡・墩などが多く、閩粤には巡檢司が多いことである。

（昭和十三年十二月・史潮八ノ四）

日本船の南支漂流と海南島

清代、日本船の南支漂流に關する史料は二十數種ある。まづ漂流の年代・回數・位置をのべると、年代は西暦第十七世紀の後期より第十九世紀の初期におよび、その間十七回ほどある。即ち康熙年間に九回（延寶二回・貞享一回・元祿三回・寶永一回・正德二回）、乾隆年間に七回（寶暦、安永各二回・天明一回・寛政二回）、嘉慶年間（文化）に一回。その位置は、福建省に四回――嵘嶼港・泉州に各一回、臺灣二回。廣東省に十三回――潮州・惠州・阿媽港に各二回、廣州三回、肇慶府・陽江縣・雷州に各一回、瓊州二回となる。また漂流人を國別にしてみると、陸奥・出羽・越後・伊勢・志摩・長門・筑後・薩摩など種々あるが、陸奥船が斷然多く、薩摩船がこれにつぐ。

さて右の漂流に關しては、反對に清船の日本漂流をはじめ、南海への漂流、日清貿易、天主教の禁制、武器の禁輸、日清兩國人の相互認識などの諸問題をあはせ考察せねばならぬが、ここでは、通航一覽卷二二一に「瓊州府の海南に漂到」したと考定されてゐる寶永三年（康熙四十五年）および正德三年（康熙五十二年）における、いはゆる海南島漂流にたいする疑問を提示しておきた

い。前者の史料には華夷變態・中村氏筆記抄、後者の史料には和漢寄文・長崎志・廣東漂流記などがあげられてゐるが、内容を検討すると、果して海南島に漂着したか否かは不詳なのであつて、結論だけのべると、ここにいふ海南とは、むしろ大陸の高州府（茂名）、電白縣附近に求めらるべきやうである。

（昭和十四年七月・史學雜誌五〇ノ七）

明末遺王の復興運動

特に若干の史料に就いて

まづ一般的の史料について考察すると、謝國楨氏の「晩明史籍考」のごときは、さしあたりその手がかりとなるものであるが、明清の鼎革は、その交渉影響の舞臺が、もとより支那のみにとどまらず、ひろくアジヤ各地より遠くヨーロッパにまで波及してゐるので、その史料の範圍もかなり廣汎である。すなはち支那における明・清側をはじめとして、日本内地・朝鮮・琉球・安南などより、オランダ・イギリス・スペインの諸外國・および來支宣教師の關係する各方面などにわたつてゐる。

つぎに私が今日までに研究しえた範圍内において、復興運動の大要をのべると、福・唐・魯・桂の各王各藩の恢復運動は、張・李ら流賊の歸趨、漢人の降清とその利用、日本・琉球・南海・ローマなどへの海外請援、とくに李朝・琉球・日本・在支宣教師などの對明清兩朝への態度、お

よび清廷各將の經略などとともに、相互に比較檢討すべきであり、また基礎的な年月や、歷史地理上からも、かなり考證を要する點がのこされてゐる。

なほ、明末は宋末とともに、許多の忠臣義士が輩出したにもかかはらず、復興運動の失敗した原因については、政治・軍事・經濟上にいろいろ理由のあるところであるが、遺王遺臣の間にしばしば內訌があつて、相互に一致協力しなかつたことも、要因の一として見のがしてはならない。因みに、ここにわれらの感興をそそる一事は、殘明の形勢と今次の支那事變における大陸の事情とが、歷史的にも地理的にも、一脈あひ通ずる點のあることである。

をはりに若干の特殊史料として、內閣文庫などの所藏にかかる稀覯本「華夷變態」、および「中興實錄」「中興偉略」などにつき、その成立・內容・異同・傳來などを考察した。

（昭和十四年八月・歷史學研究九ノ七）

明末における支那人の日本觀

日支交渉史の研究には、日本人の支那觀と支那人の日本觀との史的考察が、相互に注目されねばならぬが、後者の一斑を明清鼎革の時期にかぎり、その特異性を闡明しようとするのが本論の目的である。

唐宋時代の支那人は、日本をかなり好意的に觀察したが、それは主として唐初、日本が半島の經營を斷念して大陸親善策をとつたのと、當時の遣唐使、留學生に俊秀の多かつたためなどである。しかるに元明時代になると、日本人を狡詐殘暴と考へるやうになつたが、それは元寇を撃退してより日本人の意氣とみに揚り、かつ元末より明にかけて、いはゆる「倭寇」が朝鮮・支那の沿岸に繼續的に進出して、明朝の一大脅威となり、つひに秀吉の朝鮮の役にまで展開したのと、渡海した多くの日本僧も、必ずしも名僧智識ばかりでなかつたことにも原因があらう。

しかるに、明朝が新興の淸にとつて代られんとするや、その日本觀も一變した。すなはち、日支兩國は一家・叔姪・兄弟であり、「鄰誼可聯脣齒」といふに至つた。もつともこの親善提携論は、

明朝の安危存亡にかかはる際に、いかにもしてその恢復を圖らんと志し、はるばる日本に援兵や軍資を請ひにきた遺王遺臣たちの意見であるから、日支の脣齒輔車を强調することもむろん當然ではあるが、それにしても萬曆役後、五十年ならずしてこの論の擡頭したことは注目すべきであり、さらに後の日淸關係と思ひあはせて、その特異性を看取することができよう。

なほこのとき、明使が元寇を引あひにだして元淸を同一視し、淸にたいする日本の敵愾心を募らせるとともに、明にたいする同情をすこしでも深めんとしてゐる。むろん日本人が仁義を尊び智勇に富んでゐることを、あはせ强調するのを忘れてゐない。ただしここで留意すべきは、日支兩國は脣齒の關係にあらねばならぬが、それは日本がいはゆる太伯の後、徐福の裔であるから——といふ思想が傳統的に潛在してゐる點である。もつともわが國においてさへ、この傳說を肯定してゐた學者が、後世にもあつた位であるから、支那人のこの考へ方は、むしろ當然であつたらう。なほ右とあはせ考察すべきは、

（一）この日支提携論の背景には、支那人の以夷制夷の思想が底流してをり、これは「日本乞師」に際しても、唐代における郭子儀の回紇乞師や、宋末における陳宜中・張世傑の占城、海外乞師

などを引あひにだしてゐる點で明かである。ただし明廷において、この日本乞師の計畫には、多少反對するものもあり、その理由が「倭寇」の憂患と、呉三桂の「韃靼」乞師の失敗とを持ちだしてゐるのも興味ふかい。いはば北虜南倭の外患の延長を氣にしてゐるわけである。

（二）かかる支那にたいする江戸幕府の態度をみるに、幕府がこのとき、古來よりの日支交渉の跡を回顧し、ことに秀吉の朝鮮の役にたいする利害得失を檢討して現狀におよび、大陸出兵を斷念した。また請援使の上書には正京皇帝、上將軍、長崎王などの不得要領、無禮なる言辭があり、かつ平出・擡頭・缺字などに不滿な點があつて、はからずも稱號問題を惹起してゐることも、とくに注目すべきである。また當時、わが國の佛教・天主教にたいする寛嚴の態度を、明側が悉知してゐて、これらの日支交渉をめぐつて、支那側がこの兩教を利用し惡用し、幕府がまたこれを過信し、誤認し、欺瞞されたりした事情なども考慮に入れなければならぬ。

（三）この支那人の日本觀を日本以外の國、たとへば當時の琉球にたいする觀察と比較してみると一層明瞭となる。明は琉球にたいしても、わが國と同様軍資を乞うたが、その文面にも、明琉は「脣齒之邦」としるしてはゐるものの、さかんに恩義をきせ、全く藩屛屬國としての脣齒輔車

論であつて、家長と婢僕、君主と家臣との關係において言はれてゐるのであり、日本にたいする場合とは、その內容がよほど異つてゐる。明使が日本にたいする場合とは、その內容がよほど異つてゐる。明使が日本にたいして臣何某と記してゐるやうな語句は、琉球その他にたいしては、絕對に見出すことはできない。

（昭和十四年十二月・史潮九ノ四）

明末清初の海外請援について

明淸の鼎革に際して、殘明の遺臣らがその恢復を志して、援兵乃至軍資を海外諸國に請うたが、その事實をまづ國別にすると、日本・琉球・南海諸國・ローマなどとなり、その回數は考證の結果、それぞれほぼ三十一回(一六四五―八六)、四回(一六四九―七六)、十六回(一六四五―七七)、一回(一六五〇)となる。また年代にすると、明末五藩中の唐・魯・桂三藩の請援と、淸初三藩中の吳・耿兩藩のそれとに分れる。前者はもつぱら南明の遺王遺臣らにより、後者はかの三藩の亂を契機とし、興明討虜の名において試みられたものであつた。なほここにいふ南海諸國とは、主として安南、それに暹羅・交趾・古剌・車里・爪哇・咬𠺕吧・呂宋などで、このなかには琉球と同じやうに日本請援、日本の南海貿易などと關係の深いものもあり、鄭氏一族のやうに臺灣から、さらに呂宋へと南進を企てるものもあつた。

もつとも熱心に行はれたのは日本へであり、おのづから他の諸國とは區別して敬重信賴し、日支の脣齒輔車を强調し、ためにひそかに多少の應援をなしたこともあつたが、自餘の諸國は、同

情はしたものの、各〻自國內の情勢と、新興の淸の勢威とをおもんぱかつて、積極的の應援はしなかつた。ただし不成功の原因には、殘明復興運動の不統一、請援計畫の不備など、明國側にもその要因がみとめられる。

なほこれらの請援の事實からも、支那を中心とする東亞歷史圈の政治的影響を看取することができ、右の諸國と明・淸兩國をめぐる微妙な國際關係がとくに注目される。またこの請援に、來支宣教師やヴェニス共和政府、ローマ法王廳などの登場してくるのは、東亞の歷史圈がやうやくヨーロッパに波及し、交流してゆく情況を示すものといへよう。因みに外國請援の事實は、つとに唐宋元の時代においてみられ、淸代以後に至つても同樣である。

（昭和十五年七月・史學雜誌五一ノ七）

明末における桂藩のイタリヤ遣使

この事實は、明の永曆四年より同十二年（一六五〇―五八）におよぶ永明王の嫡母王太后、および內官龐天壽が、明の恢復を萬一に僥倖し、ポーランドの耶蘇會士卜彌格（M.Boym）を使者として、ローマ法王のもとに遣はした、その事實をさす。その文書については、かつて箕作・田中（義成）および坪井・桑原の諸博士によつて、學界に紹介されたが、王太后よりは、實は別に耶蘇會總統にあてた一書が、同時におくられたのであつて、これは「中西交通史料匯篇」にをさめられてゐる。ここで問題とするのは、その事實の究明を第一とし、つぎにその前後の事情を檢討して、近世における支那人の西力依存、乃至は以夷制夷の發端をこの事實となし、つぎにその推移をあきらかにして、淸朝における西力依存の發端にまで及ばんとする試論なのである。

淸末の名だかい事實としては、太平軍と伊犂事件とが考へられるが、さかのぼつて明末の天啓・崇禎のころ、澳門の耶蘇會士は、明のためにあるひは海盜を剿滅し、あるひはオランダ人を驅逐し、また滿洲軍の南下にたいして銃砲を鑄造し、あるひは援軍をひつさげて前線に出動し、なか

には戰死したものもあつたが、銃後に奔走しても、あるひは富商から火器製造の資を捐助せしめ、あるひは上疏して、軍需をゆたかならしむるために、礦脈を辨じ、西商に通じ、西銃を購ふことを進言するものもあつた。桂藩のイタリヤ遣使は、右のごとき事情を前提とし、とくに藩内における在支宣敎師との、ふかき交涉のもとに行はれたのであるが、その結果はまつたく失敗した。しかしその後といへども、これとは無關係に、臺灣の鄭氏のごときは、オランダ・イスパニヤ・イギリス人などと、ながく交涉をつづけてゐたのである。

つぎに明淸の鼎革と在支宣敎師の態度をくらべると、ほとんど變化なく、一方、淸もまたやがて前明のとつた西力依存の方針を踏襲した　康熙十三年（一六七四）以降におよぶ南懷仁（F. Verbiest）の製砲のごときは、淸朝におけるその發端といへる。ここに東洋近世史の黎明をみることができるが、爾來、中國が一衣帶水の日本と協力すること少なくして、鯨濤萬里の歐米に依存することと多きにいたつた事實は、われらの攷究を要する問題であらう。

（昭和十六年五月・史潮十一ノ一）

明末清初の南方經營

一、ここにいふ明末清初とは、明の天啓・崇禎より、清の順治・康熙におよぶ期間、すなはち崇禎十七年＝正保元年・順治元年（一六四四）における滿清の北京定鼎をさかひとし、その前後六十餘年間をさす。わが國では、寛永より天和にいたるところで、將軍家光・家綱・綱吉時代にあたる。

二、南方經營の推移は、北京定鼎の前後兩期にわけられるが、その内容を分類すると、（一）通商貿易（二）請援乞師（三）招諭攻略の三形態となる。

三、南方經營の中心となつたものは、はじめ東南海上に雄飛した海寇の徒であり、やがて明に歸順し、明廷覆滅ののちは、南明の遺王遺臣と協力し、明室恢復運動の一翼として展開していつた。鄭成功の一族のごときは、その尤なるものである。

四、經營の地方は、南方では臺灣・呂宋・安南・交趾・柬埔寨・爪哇などであつたが、東方では日本・琉球をはじめ、さらに遠くローマに遣使し、爾餘の西歐諸國とも通ぜんとしたほであつ

た。

五、以上のごとき南方經營の性格は、まづこれを日本との密接な關係において把握すべく、一「東夷」より一轉して、北虜とあひ對する「南倭」として認識されるにいたつた日本の、南方發展の一環として領解されるが、同時にまたこれを西力東漸、東西交渉史の一齣としてながむるときは、まさに東亞近世史の黎明であり、かつ西力依存の前景がみられるとともに、一方には、早くも西力驅逐の先蹤を見逃すわけにはゆかない。

（昭和十七年六月・日本諸學振興委員會第三回歷史學會要項）

元寇失敗の一面

元軍敗北の近因、もしくは直接の原因としては、從來（一）諸將の不和（二）蒙古兵の海戰不慣（三）降宋兵＝新附軍の戰意不充分（四）作戰の拙劣（五）日本上下の協力一致（六）いはゆる神風などが擧げられてゐるやうであるが、ここでは、その遠因、もしくは間接の原因として、（七）同じころ行はれた南方經略による勢力の分散牽制（八）日本認識の不足――ことに精神方面における輕視・誤認を指摘したい。

前者については、「元史」の世祖本紀・日本・劉宣・申屠致遠・張康の諸傳、また後者についても、同じく世祖本紀、高麗・日本・趙良弼・劉宣の諸傳などによつて、その一斑がうかがはれる。ことに國内における官民の擾攘・群盜の並起、および日本の險遠などを指摘して征日本の不可を諫止したものには、前記の劉宣・申屠致遠・張康・趙良弼をはじめ、昻吉兒・王磐・管如德・崔或の諸臣があり、不備不一致にして必然性の少ない征日本計畫を、虛榮心と時の勢とにうごかされて強行したところに、すでに失敗の原因を包藏してゐたと思はれる。いはば、孫子のいはゆる

「不知彼而知已、一勝一負」の一面もうかがふことができよう。

（昭和十七年七月・史學雜誌五三ノ七）

清史稿日本志について

「清史稿」の短所は日本志にも現はれてをり、日清交涉の大勢を概說したものとして、一應まとまつて便利ではあるが、史料の蒐集や論述の體裁などに不十分な點があり、邦人名の誤りも散見せられ、「明史」の舊型を脫せず、史料的價値を過大評價はできぬが、明治維新前の記事のうちには、貧弱ながら案外參考になるものがあり、また維新後にもまま注目すべきものあり、從來の二十五史の倭、日本傳と比較し、またいはば準正史に盛られた清代の日本觀などに留意しつつ檢討してみると、研究の端緒となるものが尠くない。

例へば、聖祖が織造の烏林達・麥爾林を商人に裝はして日本を探らしめたこと、鎖國下の日清貿易が沈滯せず、日本船が故意に漂到したこともあつたらしいこと、表面上、清は日清對等の友好關係はみとめるが、日本を歐米諸國より一段低きものと考へてゐたこと、日本では往復文書に自主的ならざる漢文のみを認める一方、兩國が英文を憑據としてゐたこと、日本に關する諸問題はすべて歐米諸國の例によつて解決せんとし、かつ歐米に依據し歐米をして日本を制せしめんと

してゐたこと、日本が傳敎と鴉片とを嚴禁してゐたこと、西南の役に日本より槍子百萬を請援し、清はこれにたいし十萬をもつて應ぜしめたと傳へてゐること、伊犂事件のとき俄人、日本を恃みて後路となすと考へてゐたこと、光緒二十二年（明治二十九年）七月に日本に留學生を送つたこと、等々。

（昭和十八年七月・史學雜誌五四ノ七）

第四部　史料點描

鐵人と象隊

「孝宗實錄」卷十四（李朝實錄第五一二册）の孝宗六年乙未＝順治十二年・永曆九年（一六五五）六月庚午の條の一節に

賫咨官黃埏、還自燕京到義州、馳啓曰、到高橋堡、逢我國被擄人。乃交河私奴應祥也。詳問彼中事情。則渠以甲軍於上年隨往南方戰所。南兵佯敗、誘引北軍挾擊之。北軍全沒、王子一人死焉。南軍大半步卒、以鐵甲褁頭及身手、手持大刀、俯身直趨、但斫馬足。先鋒則多有騎象者云。自廣寧至山海關、流民絡繹。問其所向、則皆曰、移居瀋陽云。漢人有鄭高同者、入來館所。問及明國形勢、則曰、淸國雖稱已得南京、而只蘇、杭州而已。明國行用之錢、以隆理（隆武の誤）號爲文云。

の記事がある（三十八葉前十三行――同後三行）。朝鮮側の傳聞には、周圍諸國の史實を補ふものも少くないが、右は明末淸初における大陸の形勢の一斑をつたへたものとして興味ふかい。當時、日本その他が內々明國を應援してゐた際に、被擄朝鮮人の從軍してゐること、流民が絡繹として南

滿に移居してゐることも注目されるが、なんづく南軍の歩卒が「鐵甲を以つて頭及び身手を裹み手に大刀を持ち、身を俯して直ちに趨き、但ゝ馬足を斫るのみ」とあるのは、黄宗羲および鄭亦鄒の「鄭成功傳」、「鹿樵紀聞」卷中の鄭成功之亂、鷺島道人夢蕣の「海上見聞錄」、計六奇の「明季南略」、江日昇の「臺灣外記」、魏源の「聖武記」など諸書にみえる、いはゆる鐵人の活躍をつたへたものと思ふ。

また「先鋒は則ち多く象に騎する者有りと云ふ」とて、象隊があつたやうであるが、寡見いまだ徵すべき記載をしらない。ただ順治十八年＝永曆十五年（一六六一）に李定國が緬人と戰つた際、緬人が象を用ひた記事が、楊陸榮の「三藩紀事本末」卷十九の檄緬取王の條にみえてゐる。

〔順治〕十八年辛丑四月、〔李〕定國至阿瓦（Ava）、使人入緬求王（永明王）。緬人不許。定國見緬人備禦已固、乃退兵三十里下營。明日緬人見定國退。即於城外立木城、日移而前、遂逼定國寨。五月、以象兵與定國於木城下。定國前隊稍失利。〔白〕文選引兵橫衝之。緬人大敗、退保新城。云云

因みに、李定國は康熙元年（一六六二）に車里・暹羅の諸國へ援兵を請ひ、殘明の興復をはかつ

てゐる。

（昭和十二年九月・歴史學研究七ノ九）

督戰に就いて

今次の支那事變において、いはゆる督戰隊の存在は、その敗軍退却に際して銃殺を敢行し、否應なしに死守進擊を餘儀なくせしめるといふ一種の戰術であると聞いてゐる。甚だしきは、鐵鎖などにて兵士の足を縛してゐることもあるといはれるが、元來、督戰とは、前記のやうな意味ではなく、督兵 tu-ping、督陣 tu-chên などと同じく、戰場で軍隊を統率するといふ意味である。古くこの語の用ひられてゐる例は、「舊唐書」卷一七〇・裴度傳の元和十二年（八一七）の條に、かれが憲宗にたいして「請身自督戰」と答へてゐるのがあげられる。因みに「新唐書」卷一七三・裴度傳には「請身督戰」とある。

古來、支那においては名だかい監軍があり、春秋時代齊の景公の寵臣莊賈が、はじめて監軍になつたといはれ、爾來、漢では監軍使者、魏晉では監軍・監軍事・軍師・軍司などがおかれ、南朝の宋齊にはみえぬが、隋末唐初には御史がこれに當つた。玄宗のころ宦官を監軍使とし、觀軍容使もおかれたが、唐末より宋にかけてまた置かず、遼には都監・監軍・監戰があり、金にも都

元帥府のもとに左右監軍・左右都監があつたが、元にはなく、明は監察御史を監軍として宦官をこれに充てたが常設せず、清もまた置かなかつた（杜佑「通典」巻二九職官一一武官下・馬端臨「文獻通考」巻五九職官一三・「欽定續通典」巻三三職官武官下の各監軍の條を參看されたし）。

さて、今次支那事變の督戰隊と聯想するのは、明末の復興運動に活躍し、日本とも關係のふかかつた鄭成功の配下に、周全斌といふ猛將がゐて、永曆十三年＝順治十六年（一六五九）における國姓爺の南京攻略の途次、瓜州・鎭江を席捲したが、その六月二十三日、鎭江銀山の拂曉戰において、長繩をもつて後に陣し、兵士の退いて繩に至るものがあれば、これを斬つたといふ傳聞である。すなはち鷺島道人夢菴の「海上見聞錄」（痛史一四）巻一には

> 〔六月〕二十二日二更（午後十時）、賜姓（鄭成功）移營到銀山下。寅時（翌二十三日午前四時）傳令登山站隊。天明滿兵見之大驚、分爲五路而來。賜姓親督右武衞周全斌・左虎衞陳魁迎敵。周全斌直衝其鋒、以長繩陣後、有兵退至繩者斬。於是奮勇爭先、滿兵披靡。諸將繼之。道路。狹而溝港多、自相踐踏、不計其數。餘皆遁走。遂令攻城。清總鎭高謙・知府戴可進獻城投降周全斌身帶重傷、特令鎭守。云云

とみえて興味ふかい。

なほ漢の三傑の一人、淮陰侯韓信がいまの河北省井陘の南門外において、綿蔓河を背にして、いはゆる「背水之陣」をしき、趙の軍を擊破したといふ故事も、たがひに關聯して想ひおこされる（「史記」巻九二淮陰侯列傳三二・「前漢書」巻三四韓信傳など參看）。

（昭和十三年四月・歷史學研究八ノ四）

日本國志と吾妻鏡補

清の出使日本參贊官黄遵憲の「日本國志」は、近世日本の國情をもつとも詳らかに支那につたへた史料の一つとして知られてゐる。十四冊本・十冊本などがあるが、德宗の光緒二十四年＝明治三十一年（一八九八）上海圖書集成印書局の刊本は、四六版の一帙十冊本である。卷頭には欽差大臣出使英法義比四國二品頂戴都察院左副都御史の薛福成が、光緒二十年（明治二十七年）に巴黎の使館において認めた序文があり、卷尾には同二十二年（明治二十九年）にものした梁啓超の後序があるが、黄遵憲の自敍は、光緒十三年＝明治二十年（一八八七）五月に書かれてゐるから、このときをもつて、本書の成立と考へて差支へあるまい。すなはち同書は日清戰爭直前に刊行されたもので、ほぼ當時における淸人の日本觀を代表したものであつた。

その内容目次をかかげてみると、卷首の中東年表以下、國統志三卷（卷一—三）・鄰交志五卷（卷四—八）・天文志一卷（卷九）・地理志三卷（卷一〇—一二）・職官志二卷（卷一三—一四）・食貨志六卷（卷一五—二〇）・兵志六卷（卷二一—二六）・刑法志五卷（卷二七—三一）・學術志二卷（卷三二—三三）・禮俗志四卷

(卷三四—七)・物產志二卷(卷三八—九)・工藝志一卷(卷四〇)の十二志四十卷である。

しかるに、同書の成立より七十餘年前に仁宗朝に、吳江(江蘇)の翁廣平が同名の「日本國志」なる一書を著はしてゐることは、ほとんど知られてゐないやうである。すなはち、ここに掲げた「吾妻鏡補」がそれであり、一名「日本國志」ともいはれる。

本書は靜嘉堂文庫の所藏にかかり、私のかねてより閱讀したいと願つてゐた圖書の一つであつたが、最近(昭和十三年秋)長澤規矩也氏らの御好意により、その機會をえた。凡て八冊三十卷。半葉九行、行二十一字の寫本。卷頭に嘉慶十九年=光格天皇の文化十一年(一八一四)閏二月望日の自序、および獨學老人石韞玉の後序がある。

いまここに、兩書を詳細に比較檢討することは許されないから、ただその目次をかかげて紹介にかへよう。すなちその內容は、卷首の序文・凡例・引用書目以下、世系表一〇(卷一—一〇)・繪圖一卷(卷一一)・地理志二卷(卷一二—一三)・風土志二卷(卷一四—五)・食貨志一卷(卷一六)、通商條規一卷(卷一七)・職官志一卷(卷一八)・藝文志七卷(卷一九—二五)・國書一卷(卷二六)・國語解二卷(卷二七—八)・兵事一卷(卷二九)・附庸國志雜記一卷(卷三〇)の十三項目につき述べたものであ

り、前書の明治維新後なるにたいし、後書の維新前における清人の日本研究として、注目すべきであらう。

因みにいふ、撰者翁廣平は字を海深といひ、書畫家としても著名であり、書は隷書を、畫は山水を善くした。本書以外に「金石集錄續」「松陵文獻」（吳江は唐の松陵）「聽鶯居文鈔」などの著作がある。かれの傳は、震鈞の「國朝書人輯略」卷七、竇鎭の「國朝書畫家筆錄」卷三、李濬之の「清畫家詩史」庚上などにも見える。

（昭和十三年十二月・歷史學研究八ノ一二）

〔附註〕　靜嘉堂文庫寫本「吾妻鏡補」八册の各册內容は次のごとくである。

第一册　序目・凡例・世系表
第二册　世系表
第三册　世系表
第四册　繪圖・地理志・風土志
第五册　風土志・食貨志・通商條規・職官志
第六册　藝文志

第七册　藝文志・國語解
第八册　國語解・兵事・附庸國志・雜記

海南島攻略の「倭寇」

皇紀二千五百九十九年の紀元節の前日、一大快報は天外より飛來した。曰く「わが陸海軍の精鋭部隊は、今曉、緊密なる協同の下に海南島の奇襲上陸に成功し、目下進撃中なり」と。また曰く「澄邁灣上陸の精鋭は首都瓊山を陷れ、ついで同島第一の都會海口を占領し、逐次、東西地區肅正の兵を進めつつあり」と。さらに相ついで報じて曰く「北方より南進する陸軍部隊に策應し、陸戰隊は十四日未明、海南島南部三亞港に敵前上陸を決行。〇〇方面に前進中なり」と。かくて二月十四日の正午には、はやくも東方の楡林を、翌十五日の午前零時には西方の崖縣を完全に占領したのである。海南島討つべし――とは、今次の支那事變の進展以來、しばしば論ぜられたところであつたが、いまやわが軍の籌略成り、國民の要望は容れられて「東洋の地中海のボタン」であり、「佛領印度支那の頭の上のランプ」である海南島も、やがて日章旗のあまねく光被するところたらんとしてゐる。

しかしこの海南島には、すでにいまから四、五百年の昔、はやくも「倭寇」の進出した地方で

ある。その最切の攻略は、明の成祖の永樂九年＝應永十八年（一四一一）三月のことであり、昌化所を陥れ、千戸の王偉はこれがため戰死した。「籌海圖編」巻三の廣東倭變紀には

時副總兵李哇等、擁兵不救城、遂陷。王偉力戰而死。軍士死者甚衆、城中人口粮食軍器、皆被劫掠。

と當時の事情を、他書よりも詳かにつたへてゐる。わが軍の奇襲上陸した澄邁灣や瓊州なども、やはり攻略されてゐて興味ふかい。左に「雍正廣東通志」巻九の海防の條によつて、その後における攻略の事實を、年代順に列記してみよう。

宣德八年（永享五年・一四三三）倭犯儋州・昌化。指揮高昇等禦之。

成化二年（文正元年・一四六六）倭寇澄邁。百戸項欽死之。

宏治四年（延德三年・一四九一）倭犯陵水。

正德十二年（永正十四年・一五一七）倭犯澄邁・臨高。指揮徐爵討平之。

嘉靖十三年（天文三年・一五三四）海賊許折桂寇瓊・雷。指揮王守臣討平之。

萬曆八年（天正八年・一五八八）廣海瓊・廉倭番入寇。總督劉堯誨討平之。

康熙十九年（延寶八年・一六八〇）海賊楊二寇文昌。總兵蔡璋擊走之。

これら「倭寇」にたいし、明朝では廣東の兵防官として整飭瓊州兵備使、分守瓊崖參將をおき、沿海の衞所として海南衞をまうけ、清瀾（籌海圖編に清閑とするは誤りか）・萬州・南山の三所を備へて、それぞれ旗軍五百八十七名・四百六十九名・二百十五名をおいた。また沿海の巡檢司として瓊州府に清瀾・舖前・澄邁・青藍・調囂・藤橋・牛嶺・抱歲・巡德・鎭南・安海・田牌をおき（諸書により多少異り、博舖・通遠の加はるものもある）、清瀾と澄邁には弓兵各三十名、他は凡てそれぞれ六十名を備へた。また衞所の戰船として瓊・雷二府の海港に、東莞の烏艚各六隻と、新會の橫江船四隻とを用意してゐた。

（昭和十四年三月・歷史學研究九ノ三）

異稱日本傳の海外流傳

寛永十四年＝崇禎十年（一六三七）に生れ、元祿十六年＝康煕四十二年（一七〇三）に六十七歳で歿するまで、すなはち、支那でいへば明末から淸初にかけて、生涯、筆硯にしたしみつづけた松下見林が、奈良朝のむかし、舍人親王が「日本書紀」御修撰に際して採らせられた、外國の文獻をひいて考據の資とするの御態度を範とし、三十餘年の半生を傾倒して、元祿戊辰元年＝康煕二十七年（一六八八）にやうやく完成した大著「異稱日本傳」がこの種の成書として第一に指を屈せられることは言ふまでもないが、この書が朝鮮に流傳された徑路について注目すべきことがある。

それはこの書が、日本人の手によらず、かへつて淸の商人によつて李朝にもたらされてゐるといふ點である。その證據は、松崎復の「慊堂全集」卷二十三にをさめられてゐる「接鮮瘖語」上——朝鮮通信正使金履喬・同副使李勉求とわが林述齋との答問を、正使書記金善臣と侍書松崎慊堂とが筆錄したもの——に次のやうな筆語のあることによつて窺はれる。

貴國（日本）近時印出諸書、俺等（金・李二使等）欲見而未及者、我國（朝鮮）諸書、行中無帶來者耳。〔善臣筆〕

曾見異稱日本傳、有恨不令朝鮮人見吾國史之語。而近者、貴國（日本）文物、益就彬蔚、亦有可傳隣國之好文字耶。〔同筆〕

右の記事も大いに參考になるが、さらにこの少し後のところをみると

聞、唐山（支那）禁史書流入貴國（朝鮮）、非史書內、有關係史最之言、亦不得收買、明・淸俱是一律。然否。

といふ問にたいして、次のごとく答へてゐる。

初無是禁、如貴國（日本）書異稱（日本）傳之類、皆從淸肆出來。豈有禁史書之事耶。〔善臣筆〕

善臣筆とあるのは、むろん正使書記金善臣のこと。因みに、金・李二使の來朝は、わが文化辛未歲——八年、李朝の純祖十一年＝淸の仁宗十六年（一八一一）であり、その六月二十一日に前記の林述齋と筆語半日に及んだものであつた。

右の事實をもつて、ただちに全斑を律することは、もとより危險であるが、とにかく「異稱日本傳」など、日本の史籍類の海外流傳について、かかる事實のあつたことは興味あることであらう。

（昭和十五年七月・歷史學研究一〇ノ七）

禦侮儲言に見えたる「倭寇」

「禦侮儲言」は江戸後期の經濟學者として名だかい佐藤信淵（一七六九―一八五〇）の述である。東京文理科大學圖書館所藏の寫本によれば、上中下三卷と附錄とよりなり、半葉十行・百十葉の分量である。上卷は叢會篇、中卷は取捨篇、下卷は自得篇で、主として本邦における水軍法のことを記し、ところどころに圖も挿入してある。

「倭寇」に關する記事は、上卷の叢會篇の冒頭にみえる「永正・大永ノ頃ヨリ伊豫ノ國野島・久留嶋・因ノ島等地士、外國ニ出テ海賊ヲ働キタル始末、並ニ九鬼嘉隆、三嶌海賊等ノ仕方ヲ得テ水軍ノ法トナシタル說」のなかに窺はれるが、南海・南洋方面への活躍をつたへてゐることが、刻下のわが南方への關心とあひ俟つて、とくに注目される。

……爰ニ永正・太(大)永ノ頃、伊豫國海中野島・久留嶋・因ノ島等ノ地士可(河)野・村上・飯田・北浦等相共ニ議シ、一族家人ヲ率テ海賊トナリ、船ヲ乘出シ、外國ニ渡コト(リテ?)ヲ海濱ヲ剽掠ン、財物ヲ奪ヒ取來テ各自家ヲ富ンヿヲ欲シ、大島領主村上圖介ヲ盟主トシテ、家々ノ人數並ニ

土浪人・浮浪人等ヲ集メ都合三四百人、大小十餘艘船ニ乘組テ大洋ヲ渡リ、南海中呂宋・巴辣・臥亞等諸島ヨリ西ハ印度ノ東坡塞城（カンボチヤンバレ）（東埔寨・占城？）・安南・廣南ヲ（ソ）ノ他大明國ノ廣東・廣西・福達（建）、寧彼（波）等諸州ニ至リ、海邊諸地ヲ侵シ、種々財物器械ヲ奪ヒ取來テ各々其家ヲ富セリ。以後此ヲ家業ノ如シテ年月ヲ送ケル。此事ヲ聞及テ四國・中國・九州海邊ノ諸浪人、其他漁士・船方ノ遊混共、漸々此ニ增加リテ人數次第ニ大勢トナレリ。

永正（一五〇四―二〇）、大永（一五二一―二七）はともに後柏原天皇の御宇。臥亞（goa）が南海の島であつたり、東埔寨（Cambodia）が印度にあつたりするやうな誤りも、かへつて參考になる。

由是、外國モ海邊警護ノ軍卒ヲ備ヘ置テ、海賊ノ剽掠ヲ防禦スルヿトナレリ。此ニ因テ海賊等亦豫メ武備ノ（ヲ）嚴重ニ調行テ彼防禦ノ兵卒ヲ手痛ク打破ニ非サレハ、分捕ノ大利ラ得ルヿ能ヘサルヲ以テ、各皆鐵砲、石火矢マデヲ悉ク備テ外國ヲ攻侵セリ。故ニ西南海濱ノ外國及大明ノ福州・寧波・平海等、甚此ニ困タリ。大明諸吏倭寇ト稱シテ畏タルハ即此海賊ノ事ナリ。

これまでが項目にみえる「海賊ヲ働キタル始末」であり、つぎに九鬼嘉隆がこれに暗示をえて、

「水軍ノ法トナシタ」次第がのべられてゐる。

其後、毛利元就、中國ニ推タルニ及テ強兵ヲ師テ伊豫諸島ヲ經略セリ。此ニ困(因)テ海賊練(棟)梁等、過半毛利家ニ屬セリ。是時、志摩國ノ住人九鬼大隅守嘉隆、海賊共外國ヲ亂妨シ、沼(沿)海警固ノ水軍ト船中ニテ血戰シ、敵ヲ打拉タル仕形ヲ取テ水軍ノ法ト爲セリ。西國諸大名、又皆此ニ效ヘリ。然レハ船手ノ將士ヲ海賊ト唱?ルヿハ此ヨリ起タル名義ナリ。故ニ豐臣大閤ノ海賊ノ將ハ九鬼嘉隆ヲ頭取スト仰ラレタルヿ朝鮮征代(伐)ニ見エタルニテ察スヘシ。又其後水軍法ハ野島・久留?ノ三流ヲ合タリト雖トモ、固一手ノ海賊ノミ。其他高妙ナル異傳アルハ、皆後人ノ虚造ナリ。……

(昭和十五年九月・歷史學研究一〇ノ九)

洗禮を受けた鄭芝龍

一官の名で內外にしられてゐる鄭芝龍が、をさないころ澳門におもむいて洗禮をうけ、Nicolas といふクリスチャン・ネイムをもらつたといふことは、日本側の史料にも、支那側のそれにも見あたらない一寸耳あたらしいことである。

しかるに、清の穆宗の同治六年＝わが慶應三年（一八六七）に支那にきた Louis pfister 費賴之（一八三三—九一）著はすところの Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancienne mission de Chine. Tome I, Chang-hai, 1932 の第四十九、湯若望（Le p. Jean Adam Schall von Bell）傳によると、芝龍の子にして、經（錦舍——經滿とあるは訛誤）の父なる鄭成功に關する註（P. 173）に、つぎの一文があり、右の事情がうかがはれる。こと成功について述べたものであるが、便宜上、馮承均氏の漢譯にしたがひ、二三補注をくはへ全譯してみよう。

成功は芝龍の子、世稱して國姓爺（C. xinga）と爲す者なり。芝龍は泉州南安縣の貧戶の子、幼にして澳門に至り、入敎受洗す。敎名は Nicolas なり。人と爲り聰敏幹練、經商して富を

致し、多く海船有り。初め盜と敵と爲るも、後ち自ら海盜となる。一日本婦人〔田川氏――支那人のいはゆる翁氏〕を取りて成功を生む。成功、幼年にして或ひは西班牙人と偕に馬尼剌〔Mni-la〕に至り、或ひは荷蘭人と偕に台〔臺の誤、以下同じ〕灣に至る。然れども未だ受洗せざるに從ふ。品性、其の父〔芝龍〕と同じ。滿人、芝龍を殺せし後、成功は海上を往來し、沿海の諸城を抄掠し、至つて長江に入り、圍みて南京を攻む。一六六二年〔康熙元年〕二月十二日、台灣を荷蘭人の手より奪ふ。同年七月二十三日、台灣に死す。成功に關する事蹟は Rouge-mont Hist. tartaro-sinica 第一編を參看す可し。

因みに、この漢譯は民國二十七年六月、商務印書館の發行で、「入華耶蘇會士列傳」と題して第一冊が刊行された。明末清初における來支宣教師四百六十三人のうち、まづ最初の五十人を飜譯したもの。寡聞にして、いまだ第二冊以下の刊行をしらぬ。

（昭和十五年十月・歷史學研究一〇ノ一〇）

東瀛詩選と東瀛詩記

歴史學研究一〇ノ一一に、佐藤三郎氏の勞作「明治維新以後日清戰爭以前に於ける支那人の日本研究」を拜見したが、そのうち、光緒九年＝明治十六年（一八八三）刊の兪樾の「東瀛詩選」と「東瀛詩記」とに言及されたところがあつた（七一頁・七六頁）。同氏は「詩選」はみてをられぬとのことであるから、余の知つてゐる四十卷、補選四卷の十二冊本につき、「詩記」二卷（春在堂全書七一）と内容を比較して、讀者の御參考に供しよう。

「詩記」の自序には、「……是爲東瀛詩選。余每讀一集、略記其出處大概、學問源流、附於姓名之下。而凡佳句之未選者、亦或摘錄焉」とあるが、この「詩選」にみえたる各詩人の略傳と評論とをぬきだして、二卷にまとめたのが、すなはち「詩記」なのである。

自序は兩書とも、光緒九年癸未六月となつてゐるから、「詩記」の編著も「詩選」とほとんど同時になされたものである。しかし、實際にその內容にあたつてみると、「詩選」にをさめられてゐる詩人を、全部「詩記」に網羅してゐるわけではなくて、かなり省略してゐるところがある。す

なはち、まづ「詩選」巻一――巻三八までについて調べてみると、左の十八人は、「詩選」にあつて「詩記」にみえない人々である。

田革（巻四）西山□（巻九）朝川鼎・中山鼂（巻一〇）杉岡道啓・高橋順・磯邊貫（巻一五）山地正誠（巻二一）青山延昌・青山延之・青山延壽（巻二五）山田□（巻二七）神宮□・玉□成（巻二八）松本政信（巻三一）小爾行簡・兒□□（巻三三）平塚眞賓（巻三五）

つぎに巻三九をみると、ここは「詩記」巻二に「自元政至全亭方外一百有六人」としるされてゐる部分に相當するのであるが、元政から全亭までは實は一百四人であつて、つぎの僧岳・僧蒙の二人をあはせて一百六人なのである。「詩記」には、一百六人目の僧蒙一人をかかぐるのみで、元政――僧岳にいたる一百五人を省略してゐる。

つぎの巻四〇は、おなじく「自井上通至大崎榮閭秀三十四人」（詩記巻二）としるされてゐる部分であるが、實は三十六人のあやまりであり、また「詩記」には、そのうち十人をかかぐるのみで、他の二十六人は、やはり省略されてゐる。

補遺四巻、（巻四一―四四）は、これもおなじく「自大友皇子至那珂通高補遺二百七十七人」

（詩記卷二）の部分にあたるが、これも余の數へたところでは二百六十人しかみえない。そして「詩記」には、那波守之以下の十一人をさむるのみで、他の二百四十九人（詩記どほりの計算では二百六十六人）は省略されてゐるし。かもこの十一人は、卷四一―四二に屬する人たちで、卷四三―四四にみえる人たちは、一人もをさめられてゐない。

佐藤氏が「詩記」について「東瀛詩選を縮めた如きもの」（七六頁、註26）といはれてゐるのは、右のやうに解すべきであらう。

（昭和十六年三月・歷史學研究十一ノ三）

南海の倭寇

名高い支那人のいはゆる「倭寇」が、朝鮮より山東・江浙・閩粤各地の沿岸にわたつて進出したのは、元末から明にかけてのことであつたが、明の正德・嘉靖の交――すなはちわが永正・大永のころには、さらに南下して安南・占城・柬埔寨や呂宋などの南海諸島にまで進擊していつた。このことは傳聞に多少誤りがあるが、佐藤信淵の「禦侮儲言」上卷にも言及されてゐる。

世上ややもすれば、日本人の海外發展の素質に、疑ひをさしはさむ向きもあるが、その後においても、御朱印船貿易の躍進とともに、日本人の南洋移住はすこぶるめざましく、殊に呂宋・暹羅・柬埔寨・交趾などには、人口三百から三千に達する純然たる日本町が發生し、軍事・宗教・經濟の各方面にわたつて活躍してゐたのである。

フランス人は海南島を佛印の頭の上のランプといひ、臺灣とならび稱して「東洋における地中海の二つの眼」とよんでゐるが、今日われわれが東亞新秩序の建設といふのも、つまり地域的には、廣義の東洋の地中海――南海をめぐるアジヤ諸國を包含するものであり、ことに刻下、われ

らの關心を高めてゐる南海南洋の對策經營についても、一應歷史的に回顧さるべきであらう。

（昭和十五年七月二十五日・東京朝日新聞朝刊）

富士山の詩

お隣りの中國においては、富士山が古來、どんな風にみられてきたか。

古くは五代後周の「義楚六帖」にみえ、降つては、元の成廷珪の句が「元詩選」にみえてゐるが、ここには明・淸時代の左の二句を引用する。

明の宋濂は「日東曲十首」を賦してゐるが、その一に曰く

絕二入層霄一富士岩。　蟠根直壓三州間。
六月雪花翻二素毳一。　何處深林覓二白鷴一。

三州とは、いふまでもなく伊豆、駿河、相模のこと。六月は、むろん舊曆である。

これには、北齋がゑがいたやうな、圓錐形の姿態美にはかけてゐるが、雄渾の氣にあふれてゐる。

つぎに明治十年（皇紀二千五百三十七年）、日本にも來使した淸の黃遵憲は「日本雜事詩」のうちにかう詠んでゐる。

拔地摩天獨立高。　蓮峰湧出海東濤。
二千五百年前雪。　一白茫茫積未レ消。

これは單なる姿態の美や、雄渾の氣のみを詠じたものではない。中國人が「一系の天子、富士の山」を聯想するわが國體の崇高、尊嚴にも、詠じおよんだものとして、注目に値ひする。

（昭和十六年六月十四日・東京朝日新聞朝刊・甲鳥書林版「學界餘滴」所收）

蘭人を驅逐した鄭成功

國姓爺として内外に名だかい鄭成功が、大陸より戈を轉じて臺灣にむかひ、四十年ちかくも、ここに雄據してゐたオランダ人を擊破したのは、いまからちやうど二百八十年まへのことであつた。

すなはち明の永曆十五年、わが寛文元年の春、子の鄭經を福建の廈門にとどめ、成功みづから舟師二萬五千、數百艘をひきゐて海をわたり、蘭人の根據ゼーランジヤ（安平）城を攻略した。蘭人はこれよりジヤワのバタビヤに退いた。かれが三十八歲のときである。

不幸、この間、鄭成功が主君と仰ぐ永明王は淸兵にとらへられ、さきに淸に降つた父の鄭芝龍も刑せられ、やがてみづからも三十九歲の若さをもつて、風土病に斃れた。しかし、子孫あひ傳へ、二十餘年間なほ臺灣を保つたのである。

鄭成功が、もしオランダ人を驅逐してゐなかつたら、現在、臺灣は蘭領東印度の一部として、海南島とともに「東洋の地中海における二つの眼」となつたかもしれぬ。今日、わが平戶の田川

氏を母にもつ鄭成功の雄圖を回顧することも、あながち謂はれなきことでもあるまい。

（昭和十六年六月十五日・東京日日新聞夕刊

報時自鳴鐘

わが國が機械時計を輸入したのは德川家康のときで、そののち木製の齒車を用ひた精巧な國產品も造られるやうになつたが、お隣りの中國では、この時計は、いつたい何時ごろ齎らされたか。いまから丁度、三百四十一年まへ、明の萬曆二十八年（一六〇〇）、わが慶長五年、國內では天下分け目の關ケ原合戰のあつた、その年である。名だかいイタリヤの宣敎師マテオ・リッチ（利瑪竇）が、北京にきたり、神宗皇帝に謁見したことがあつたが、そのとき天主像、十字架、萬國圖誌、西琴（オルガン）などとともに、報時自鳴鐘二架をたてまつつた。

これは略して自鳴鐘ともいはれるが、文字のしめすやうに、現在の時計のことである。神宗は、大そう喜ばれて宴勞し、また邸宅をもたまはつた。

われわれは、時計とかいて、これをトケイと讀んでるのも、一寸氣のつかない妙な慣習であるが、中國人は、時計のことを現在、鐘（チュン）といつてゐる。

（昭和十六年七月三十一日・東京朝日新聞朝刊、甲鳥書林版「學界餘滴」所收）

附錄　東亞史關係邦書目錄

一、排列は著者名（もしくは發行所名）首字五十音順により、はじめに記念論文集、その他の論文集、及び雜誌を收錄す

一、飜譯書はすべてこれを省略し、現代に關するものは簡略にす

一、共著書は何れか一著者の部にのみ記す

一、雜誌は東洋史・支那哲文學を主とするもののみを掲げ史學雜誌・史林等に及ばず

○市村博士古稀記念東洋史論叢

○白鳥博士還曆記念東洋史論叢

桑原博士還曆記念東洋史論叢

○池內博士還曆記念東洋史論叢

加藤博士還曆記念東洋史集說

○山下先生還曆記念東洋史論文集

○內藤博士頌壽記念史學論叢

內藤博士還曆祝賀支那學論叢

高瀨博士還曆記念支那學論叢

狩野敎授還曆記念支那學論叢

○服部先生古稀祝賀記念論文集

常盤博士還曆記念佛敎論叢

小川博士還曆記念史學地理學論叢

小川博士還曆記念地學論叢

○三宅博士古稀祝賀論文集

○小田先生頌壽記念朝鮮論集

○稻葉博士還曆記念滿鮮史論叢

○藤岡博士功績記念言語學論文集

松崎先生還曆祝賀記念論文集

齋藤先生古稀祝賀記念論文集

○東西交渉史論（史學會創立五十年記念）
○本邦史學史論叢（同　前）
○京城帝大創立十周年記念論文集史學篇
東北帝大法文學部十周年記念史學文學論集
九州帝大法文學部十周年記念哲學史學文學論文集
立命館三十五周年記念論文集
佛教學の諸問題（佛誕二千五百年記念學會）
×各大學年報紀要
○東方文化史叢考（京城帝大）
○朝鮮支那文化の研究（同前）
○朝鮮社會法制史研究（同前）、
○朝鮮經濟の研究（同前）
大陸文化研究（同前）
蒙疆の自然と文化（同前）
（イスラム
（回教圏
（回教事情○
○漢學會雜誌
○（漢學論叢）
北亞細亞學報
藝　文
○（支　那）
支那學
○（支那學研究）
支那研究
支那佛教史學
○斯　文
書　香
新亞細亞
○青丘學叢
善隣協會調査月報

○大東文化
○中國文學
○朝　鮮
○東　亞
○東亞學
○東亞經濟研究
東亞經濟論叢
○東亞研究所報
東亞人文學報
東亞問題
○東亞論叢
○東方學報（東京・京都）
○東　洋
○東洋音樂研究
東洋學研究
○東洋學報
東洋建築
○東洋史會紀要
東洋史研究
○東洋思想研究
東洋美術
東洋文化
南支南洋研究
○南方土俗
日華佛教研究會年報
日本諸學研究報告（歷史學）
奉天圖書館叢刊
滿洲學報
滿洲史學
滿洲國古蹟古物調查報告
滿鮮地理歷史研究報告
滿鐵調查月報

滿　蒙

滿蒙史論叢

南亞細亞學報

蒙　古

蒙古學

蒙古學報

露西亞月報

足立喜六　法顯傳、長安史蹟の研究、大唐西域記の研究

青木富太郎　○東洋學の成立とその發展、蒙古の民族と歷史

青木文教　西藏文化の新研究

青木正兒　支那文學概說、支那文藝論藪、支那近世戲曲史、元人雜劇序說

青山定男　支那歷代地名要覽

赤松智城　滿蒙の民族と宗教（秋葉隆共著）

赤松啓介　東洋古代史講話

秋山謙藏　○日支交涉史研究、○日支交涉史話、歷史と現實、日本世界觀

淺井虎夫　○支那法制史、○支那に於ける法典編纂の沿革、○支那日本通商史

東川德治　○支那法制史研究

姉崎正治　印度宗教史、印度宗教史考、上世印度宗教史

天野元之助　支那農業經濟論

鮎澤信太郎　東洋地理思想史研究、日本文化史上における利瑪竇の世界地圖、鎖國時代の世界地理學、大日本海、新井白石の世界地理研究、西川如見の世界地理研究

有高巖　概觀東洋通史、興亞國民東洋史

元代の婚姻に關する法律の研究
大東亞現代史、概說東亞史（山崎宏共著）

安藤正次　日本文化史

伊豆公夫　日本史學史

伊波普猷　○古琉球、古琉球の政治

伊藤銀月　日本海賊史

伊東忠太　東洋建築史、支那建築史（東洋史講座）、南海古陶瓷（鎌倉共著）、支那北京城建築、伊東忠太建築文獻、北清建築調査報告

伊能嘉矩　臺灣文化史

飯島忠夫　支那曆法起原考、天文曆法と陰陽五行說、支那古代史論、支那古代史と天文學

池內　宏　○文祿慶長の役（正編別編第一）○元寇の新研究、○滿鮮史研究（中世）、通溝（滿洲國安東省輯安縣高句麗遺蹟）

池田靜夫　支那水利地理史研究

石井菊次郎　外交餘錄

石井研堂　漂流奇談全集、異國漂流奇譚集

石田幹之助　○歐人の支那研究（史學大系）○長安の春、○歐米に於ける支那研究、○東洋學叢編（石濱純太郎共著）○東洋歷史參考圖譜（岩井大慧共著）

石原道博　鄭成功、日本乞師の研究

板倉眞伍　滿洲土地法

板澤武雄　南方圏文化史講話、昔の南洋と日本

市古宙三　近代日本の大陸發展

市村瓚次郎　○東洋史統、○東洋史要、○支那史研究、○支那論集、○文敎論集

出石誠彥　支那上代思想研究、東洋學研究

稻葉岩吉　清朝全史、支那帝制論、近世支那十講、支那の軍制と兵制、支那政治史綱領、近代支那史、最新支那史講話、支那社會史研究、○朝鮮文化史研究、光海君時代の鮮滿關係、增訂滿洲發達史、滿洲國史通論、○前滿洲の開國と日本、○支那近世史講話、舊老城、滿洲國史通論、釋椋
新東亞建設と史觀

今關天彭　日本流寓の明末諸士

今西龍　朝鮮史の栞、百濟史研究、新羅

史研究、朝鮮古史の研究

入江啓四郎　○支那邊疆と英露の角逐、○中國に於ける外國人の地位

岩井大慧　印度西藏の文化

岩生成一　○南洋日本町の研究

岩佐精一　○岩佐精一郎遺稿

岩垂憲德　○東亞年號總覽、日支文化交涉史

岩波書店　○岩波講座東洋思潮、○岩波講座日本歷史、西洋人名辭典

岩村忍　○支那關係歐米名著略解、○十三世紀東西交涉史序說、蒙古の西征、蒙古史雜考

岩村成允　○安南通史○日本・滿洲・支那の國號に關する研究

宇井伯壽　東洋哲學史(岩波講座哲學)、印

度哲學史、印度哲學研究、支那佛教史、印度大乘佛教中心思想根本佛教概觀、攝大乘論研究、禪宗史研究

宇田尚　日本文化に及ぼせる儒教の影響

宇野哲人　○支那文明記、○儒學史、○支那哲學概論、○增訂支那哲學史講話、○支那哲學の研究、○二程子の哲學

上田穰　石氏星經の研究

上野菊爾　東洋文化史概說、東洋史概說

植田捷雄　○在支列國權益概說、○支那外交史論、○支那租界論、○上海租界概論

内田銀藏　日本海上史論、○日本と泰國との關係

内田吟風　古代の蒙古

内野熊一郎　秦代に於ける經書經說の研究

梅原末治　支那考古學論攷、古代北方系文物の研究、銅鐸の研究、鑑鏡の研究、歐米に於ける支那古鏡、河南安陽遺寶、河南安陽遺物の研究、柉禁の考古學的考察、殷墟出土白色土器の研究、漢以前の古鏡の研究、戰國式銅器の研究、紹興古鏡聚英、古銅器形態の考古學的研究、洛陽金村古墓聚英

江上波夫　内蒙古長城地帶（水野清一共著）

遠藤隆吉　○支那思想發達史、○支那哲學史、○支那倫理學

小笠原長生　海戰日錄

小川晴暘　日本美術史
小川貫道　漢學者傳記及著述集覽
小川琢治　支那歷史地理研究
小倉進平　○諺文の起原及び朝鮮語の特質○鄉歌及び吏讀の研究、○增訂朝鮮語學史、○朝鮮語に於ける敬語と謙讓語
小田省吾　○朝鮮小史
小野玄妙　佛書解說大辭典
小柳司氣太　東洋思想の研究、續東洋思想の研究、宋學概論、道敎概說、老莊哲學、老莊の思想と道教
愛宕松男　忽必烈汗
織田得能　佛教大辭典
及川儀右衞門　參考東洋史、滿洲通史
大川周明　米英のアジヤ侵略、回教概論
大谷光照　唐代の佛教儀禮
大谷光瑞　西域考古圖譜、新西域記
大原利武　滿鮮に於ける漢代五郡二水考
大村西崖　東洋美術史、支那繪畫小史、支那古美術圖譜、佛書解題（中野義照共著）
大類伸　日本城郭史（鳥羽正雄共著）
太田亮　日本古代史新研究、漢韓史籍上に現はれたる日韓上古資料
王樞之　孫文傳
岡井愼吾　玉篇の研究、日本漢字學史
岡崎文夫　支那史概說、魏晉南北朝通史、南北朝に於ける社會經濟制度、江南文化開發史（池田靜夫共著）
岡田正之　○日本漢文學史
岡野一朗　支那經濟辭典

岡本良知　十六世紀日歐交通史の研究

奥平武彦　○朝鮮開國交渉始末

鴛淵一　奉天と遼陽

加藤繁　○支那經濟史、○唐宋時代に於ける金銀の研究、○支那古田制の研究

加藤常賢　○支那古代家族制度研究、禮の起源と其發達

狩野直喜　支那學文藪

鹿島守之助　○帝國外交の基本政策

回教圈研究所　回教圈史要、概觀回教圈

外交時報社　○增補支那及び滿洲國條約及公文集、○支那の外交關係

外務省　○條約彙纂、○舊條約彙纂、○日支間並支那に關する日本及他國間の條約、○英米佛露の各國及支那國間の條約、○外務省公表集、○滿洲及支那に於ける歐米人の文化事業、○現代支那人名鑑、○孫文主義、○江南の經濟史的考察（清水泰次）大日本外交文書

風間阜　○近世中華民國史

桂五十郎　○漢籍解題

葛城末治　○朝鮮金石攷

金井之忠　唐代の史學思想

金倉圓照　印度古代精神史、吠檀多哲學の研究

金子大榮　佛教の諸問題

神尾弌春　契丹佛教文化史考

樺太廳　○樺太沿革史

關東廳　考古圖錄

川島元次郎　徳川初期の海外貿易家、朱印船貿易史
河出書房　○世界歴史、○世界地理
木下杢太郎　大同石佛寺
木宮泰彦　○日支交通史
木村泰賢　木村泰賢全集、印度六派哲學、佛教概論、印度哲學、佛教思想史
木村增太郎　○支那財政論
喜田貞吉　齊東史話
北一輝　○支那革命外史
北山康夫　北支那と戰爭地理
京都帝大　考古圖錄
清原貞雄　日本古代史論
金原省吾　支那繪畫史、支那上代畫論研究、東洋畫、東洋畫概論、東洋美學、東洋美論、東洋美術論
金永鍵　印度支那と日本との關係
久米邦武　日本古代史
久保天隨　徳川時代の日暹國交、東洋歴史辭典（西山榮久共著）
楠田斧三郎　○朝鮮天主教小史
黒川春村　北史國號考
黒田亮　○朝鮮舊書考
桑原隲藏　東洋史說苑、東洋文明史論叢、支那法制史論叢、東西交通史論叢、蒲壽庚の事蹟、增補東洋史教授資料
倉野憲司　古事記の新研究
郡司喜一　十七世紀に於ける日暹關係
啓明會　支那と日本に於ける古代と近代
慶松光雄　支那地震史の研究

小竹 文夫 ○現代支那史
小葉田 淳 中世南島通交貿易史の研究、中世日支通交貿易史の研究、日本と南支那
小林 太市郎 支那思想とフランス、支那と佛蘭西美術工藝、支那陶瓷圖説
古城 貞吉 ○支那文學史
兒島 獻吉郎 支那大文學史、支那文學史綱、支那文學概論、支那文學雜考、支那諸子百家考
幸田 成友 日歐通交史、史話東と西
後藤 朝太郎 ○支那文化の研究
後藤 守一 古鏡聚英
後藤 末雄 ○支那四千年史、○支那文化と支那學の起原、支那文化のフランス西漸、○東西の文化流通、○康熙帝傳、乾隆帝
後藤 富男 蒙古政治史
光風館 近代支那文化讀本
黑龍會 ○日支交渉外史、○東亞先覺志士記傳
國民精神文化研究所 元寇史料集
近藤 杢 支那學藝大辭彙
三枝 茂智 ○支那の外交、財政
佐藤 種治 滿蒙歷史地理辭典
佐藤 安之助 滿蒙問題を中心とする日支關係
佐野 袈裟美 ○支那近代百年史
佐伯 富 王安石
佐伯 好郎 ○景教の研究、○景教碑文研究
崔 虎鎭 近代朝鮮經濟史
齋藤 良衞 近世東洋外交史序説、○外國人の對支活動の法的根據

齋藤　晌　日本的世界觀
坂本太郎　大化改新の研究
境野　哲　支那佛教精史、支那佛教史講話、支那佛教史綱、支那佛教史の研究、印度支那佛教小史、中國人日本留學史稿
實藤惠秀　○日本文化の支那に及ぼしたる影響、近代日支文化論、明治日支文化交涉
澤村專太郎　東洋美術史の研究
三省堂　○模範最新世界年表
支那問題研究所　支那事典
支那史學會　弘安文祿征戰偉蹟
志田不動麿　○東洋史上の日本
椎川龜五郎　日韓上古史の裏面
清水盛光　支那社會の研究
鹽谷　溫　○支那文學概論講話、○元曲選
重澤俊郎　周漢思想史
幣原　坦　○朝鮮史話、○南島沿革史論、○南方文化の建設へ
篠田治策　○白頭山定界碑、○日露戰役國際公法
信夫清三郎　近代日本外交史
上智大學　○カトリック大辭典
春陽堂　日清交戰錄
白坂義直　大南洋史
白鳥　清　○東洋史概說
白鳥庫吉　西域史研究
白柳秀湖　日支交涉史話
新城新藏　東洋天文學史研究、こよみと天文
人類學會　日本民族

菅沼貞風　大日本商業史

杉本直治郎　阿部仲麻呂傳研究、印度支那に於ける邦人發展の研究（金永鍵共著）

鈴木小兵衞　滿洲の農業機構

鈴木虎雄　支那文學研究、支那詩論史、賦史大要、業間錄

瀬野馬熊　○瀬野馬熊遺稿

誠文堂　○東洋文化史大系

關儀一郎　近世漢學者著述目錄大成

關野貞　支那の建築と藝術　支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾、支那碑碣形式の變遷、支那文化史蹟（常盤大定共著）支那佛教史蹟（常盤大定共著）熱河（竹島卓一共著）遼金時代の建築と其佛像（竹島卓一共著）高句麗時代の遺蹟樂浪郡時代の遺蹟、朝鮮美術史朝鮮の美術工藝（東洋史講座）韓國建築調査報告

創元社　國譯魏志魏人傳

曾我部靜雄　宋代財政史、開封と杭州

創元社　○アジア問題講座

園田一龜　○韃靼漂流記の研究、滿洲金石志

田川孝三　○毛文龍と朝鮮との關係について

田口卯吉　○支那開化小史

田崎仁義　支那古代經濟思想及制度

田島錦治　東洋經濟學史

田中萃一郎　○東邦近世史、○田中萃一郎史學論文集

田中忠夫　支那經濟研究、支那經濟史研究
田邊　泰　○琉球建築
田邊尙雄　○東洋音樂史、○現代支那の音樂
田保橋潔　○近代日支鮮關係の研究、○近代朝鮮史總說、○近代日本外國關係研究
田村幸策　○最近支那外交史○支那外債史論
大東文化學院　經學史
太平洋協會　○佛領印度支那、○大南洋、文化と農業
對支功勞者傳記編纂會　○對支回顧錄
臺北帝大　○臺灣高砂族傳說集、○臺灣高砂族系統所屬の研究
臺灣總督府　○淸國行政法、○臺灣私法、○

支那關稅制度の由來、○支那內國關稅制度
高楠順次郎　印度哲學宗教史(木村泰賢共著)、アジア民族の中心思想、釋尊の生涯、佛教の眞髓、大東亞海の文化
高桑駒吉　東洋歷史詳解、東洋歷史通覽、東洋近代史十講、支那文化史講話、印度五千年史、大唐西域記に記せる東南印度諸國の研究
高須芳次郎　東洋思想十六講、東洋文藝十六講、支那文學十五講
高瀨武次郎　支那哲學史、日本の陽明學、楊墨哲學、陽明學講話、陽明學叢話、陽明學楷梯、熊澤蕃山、陸象山

高田眞治　○日本儒學史、○支那思想の研究、○支那哲學概說、○儒教の精神、○支那思想と現代

高村象平　日葡通交史

高柳松一郎　○法律より見た支那國民性、支那關稅制度論

瀧川政次郎　○支那法制史研究、○滿支史說史話

竹越與三郎　倭寇記

武内義雄　支那思想史、儒教の精神、老子原始、老子之研究、論語之研究、老子と莊子、諸子概說、輕雲外山翁傳、儒教思潮（世界思潮）、支那文字學（岩波講座日本文學）、東洋哲學史（岩波講座哲學）

橘樸　支那社會研究、支那思想研究

龍山章眞　印度に於ける佛教と外教との交渉

巽來治郎　○日清戰役外交史、○極東近時外交史

玉井是博　支那社會經濟史研究

中央公論社　支那問題大辭典、世界史的立場と日本

朝鮮古蹟研究會　樂浪彩篋冢、樂浪王光墓

朝鮮史學會　○朝鮮史講座

朝鮮總督府　○朝鮮古蹟圖譜、○古蹟調查報告、○朝鮮金石總覽、○朝鮮史
○朝鮮土地制度及地稅制度報告
書、○李朝法典考、○李朝の財產相續法、○朝鮮祭祀相續法論序說、○朝鮮風俗資料集說、○朝鮮人名辭書

津田左右吉　○左傳の思想史的研究、○道家の思想と其の開展、○儒教の實踐道德、○支那思想と日本、○支那思潮（世界思潮）、○日本に於ける支那思想移植史（岩波講座哲學）

塚本善隆　唐中期の淨土教、支那佛教史研究

辻善之助　○增訂海外交通史話、○（日支文化の交流）

常田力　日支共存史

外山軍治　岳飛と秦檜

東亞經濟調査局　○南洋叢書

東亞研究所　○支那近代百年表草稿、○印度年表草稿

東亞同文會　○東亞關係特殊條約彙纂、支那省別全誌

東京帝大　考古圖錄

東方文化研究所　東亞大陸諸國疆域圖

道端良秀　支那佛教史概說

常盤大定　支那佛教の研究、支那に於ける佛教と儒教道教、後漢より宋齊に至る譯經總錄、寶林傳の研究、支那佛教史蹟踏査記、佛教史蹟記念集、印度文明史、古賢の跡へ、佛傳集成、佛典の解說、佛性の研究

德富蘇峰　近世國民史

登丸福壽　倭寇研究（茂木秀一郎共著）

鳥居きみ子　土俗學上より見たる蒙古

鳥居龍藏　人類學上より見たる西南支那、人類學及人種學上より見たる北

東亞細亞、滿蒙を再び探る、遼の文化を探る、極東民族、南滿洲調査報告、有史以前の日本

鳥養太一郎　○和蘭の南洋植民史

鳥山喜一　黃河の水、東洋史觀、渤海史考、滿鮮文化史觀、（渤海東京考）、北滿の二大古都址、東京城と白城

那珂通世　那珂東洋小史、支那通史、那珂通世遺書、成吉思汗實錄

奈良靜馬　日本と比律賓

內藤虎次郎　玉石雜陳、燕山楚水、支那論、新支那論、研幾小錄、讀史叢錄、東洋文化史研究、日本文化史研究、支那繪畫史、明四大家畫譜、近世文學史論、宋元版の話、解說東洋史、清朝衰亡論、清朝書畫譜

中山久四郎　○支那の人文思想、讀史廣記、○史學及東洋史の研究、支那史籍史上の日本史、○參考東洋歷史（佐藤惠共著）、東洋歷史辭典

中村孝也　日華明治維新史

永尾龍造　支那民俗誌

長井眞琴　南方所傳佛典の研究

長野朗　○支那事典

長澤規矩也　○支那學術文藝史、○支那文學史綱要（內田泉之助共著）、○支那學入門書略解、○支那書籍解題（書目書誌之部）、

南洋協會　○南洋の華僑

仁井田陞　○唐令拾遺、○唐宋法律文書の研究、支那身分法史

丹羽正義　○現代支那の性格
日本學術振興會　○東亞經濟研究
日本國際協會　支那各省經濟事情、日本歷史地理學會日本海上史論
西晉一郎　東洋道德研究
西村朝日太郎　馬來編年史研究
西村眞次　日本海外發展史、南方民族史
沼田賴輔　○日滿の古代國交
根岸佶　支那ギルドの研究
根本誠　上代支那法制の研究
能田忠亮　周髀算經の研究
羽溪了諦　西域之佛教
白南雲　○朝鮮社會經濟史
白揚社　支那及滿洲國現勢地理（支那地理歷史大系）、支那社會史（同前）支那政治史（同前）

橋川時雄　○中國文化界人物總鑑
橋本增吉　○日本上古史研究
博文館　日清戰爭實記
旗田巍　○支那民族發展史
服部宇之吉　○清國通考、○北京誌、○東洋倫理綱要、○支那研究、○孔子及孔子教、○儒教と現代思潮、○支那の國民性と思想、○北京籠城日記、○孔夫人の話、○佚存書目、○孔子教大義
羽田亨　西域文明史概論、元朝驛傳雜考、敦煌遺書（ペリオ共編）
濱田耕作　考古學研究、東亞考古學研究、東亞文明の黎明、赤峰紅山後（水野清一共著）、新羅古瓦の研究（梅原末治共著）、南山裡（島田

貞彦共著)、慶州の金冠塚、慶州金冠塚と其遺寶、樂浪彩篋塚遺物聚英、貔子窩、支那古明器泥象圖說、新羅古瓦の研究、百濟觀音東洋美術史研究

濱名寬祐　日韓正宗溯源

林謙三　隋唐燕樂調研究

林泰輔　○朝鮮通史、○近世朝鮮史、○支那上代之研究、○周公と其時代

原田淑人　○東亞古文化研究、○漢六朝の服飾、○支那唐代の服飾、○西域發見の繪畫に見えたる服飾の研究、○樂浪(田澤金吾共著)○支那古器圖攷(駒井和愛共著)○牧羊城(同前)○東京城(同前)

肥後和男　日本神話研究

日野開三郎　支那中世の軍閥

比屋根安定　○支那基督教史

美術研究所　○印度及南部アジア美術資料

平川清風　○支那共和史

廣池千九郎　東洋法制史序論、東洋法制史本論、廣池博士全集

冨山房　國史辭典

深谷博治　日清戰爭を陸奥外交

藤田豐八　○劍峰遺草、○東西交涉史の研究

藤田元春　○日支交通の研究、○大陸支那の現實

佛敎大學　佛敎大辭彙

平凡社　東洋歷史大辭典、世界歷史大系

逸見梅榮　世界歷史大年表、史籍解題
　印度佛教美術考、印度に於ける禮拜像の形式研究

星　斌夫　○支那地名辭典

細川龜市　近代日本外交史研究

本庄榮治郎　先覺者の南方經營

本田成之　支那經學史論

牧野謙次郎　○日本漢學史

牧野義智　○支那外交史

松井　等　○東洋史概說、○支那近代史、○東洋史精粹（史學大系）○東洋文化觀、○傳說之支那、○支那社會思潮（世界思潮）○支那史學名著解題

松田壽男　○東洋史序說（野原四郎共著）
　○乾燥アジア文化史論（小林元共著）漠北と南海

松本榮一　○燉煌畫の研究

松本忠雄　近世日本外交史研究

松本信廣　○古代文化論（史學大系）印度支那の民族と文化

松本文三郎　支那佛教遺物、印度の佛教美術東洋文化の研究、佛教藝術とその人物、佛教史の研究、佛教史論、佛典批評論

丸山國雄　日本近代の外交史

三浦周行　○明治維新と現代支那、元寇に關する新研究

三上次男　金代女眞の研究、支那古代の土器（駒井和愛共著）

三木　清　日支文化關係史

三木　榮　日暹交通史考

三品彰英　○朝鮮史概說
三宅米吉　考古學研究、三宅米吉著述集
水谷國一　支那に於ける家族制度
水野清一　北滿風土雜記（駒井・三上共著）響堂山石窟（長廣敏雄共著）、雲岡石窟とその時代
溝口靖夫　○東洋文化史上の基督教
南滿洲鐵道株式會社　滿洲舊慣調査報告
宮川尙志　諸葛孔明
宮崎市定　東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社會、日出づる國と日暮るる處
宮崎正義　○近代露支關係の研究
宮下忠雄　支那貨幣制度論
村田四郎　八幡船史
村田治郎　滿洲佛教建築史概說、支那の佛塔、奉天昭陵調査報告書
村山智順　朝鮮の類似宗教
村上直次郎　六昆王山田長政
目黑禧一　東洋歷史辭典
百瀨弘　○近代支那と英吉利（沼田鞆雄共著）○露國の極東侵略に關する報告書（吉田金一共著）
守屋美都雄　亞細亞史概說、中世（龍野、岸邊、淺野共著）
森谷克己　支那社會經濟史、東洋小文化史
諸橋轍次　支那の家族制、儒學の目的と宋儒の活動、經學研究序說、經史八論、孔子の生涯、論語人物考
八木奘三郎　滿洲考古學、滿洲舊蹟志、支那住宅志、滿洲都城址沿革考
矢內忠雄　○南洋群島の研究

矢野仁一　○東洋史大綱、○近代支那外國關係研究、○近世支那外交史、○アヘン戰爭と香港、○アロー戰爭と圓明園、○日清役後支那外交史、○近代支那論○現代支那研究、○近代支那の政治及文化、○滿洲國歷史、滿洲近代史○近代蒙古史研究、○近代西藏史研究（東洋史講座）、○近代支那史、○現代支那概論（動く支那動かざる支那）、○支那の歷史と文化（內藤熊輔共著）

矢野春隆　華北地券（契）制度の研究

矢吹慶輝　三階教の研究

箭內亘　蒙古史研究、東洋讀史地圖（和田清補）

安井小太郎　日本儒學史

山口察常　○東洋倫理學史概說、○仁の研究

山崎達夫　支那教育史

山崎宏　支那中世佛教の展開

山下寅次　（老子年代考）

山田安榮　伏敵編

山田孝雄　漢文の訓讀により傳へられたる語法

結城令聞　心意識論より見たる唯識思想史

雄山閣　東洋史講座、異說日本史

吉田東伍　日韓古史斷

吉田虎雄　兩漢租稅の研究

吉野作造　支那革命小史、○支那革命史（加藤繁共著）

六盟館　民族叢書

和田清　內蒙古諸部落の起源、○支那地方自治發達史、支那官制發達史
東亞史論藪
和辻哲郎　日本古代文化
渡邊勝美　○朝鮮開國外交史研究

出版會承認い四一〇四三四號

昭和十九年七月十日印刷

昭和十九年七月十五日發行（二千部）

『東亞史雜攷』

㊫定價三圓
特別行為税相當額三拾錢
合計三圓參拾錢

著者 石原道博（いしはらみちひろ）

發行者 鐵村大二
東京都神田區須田町二丁目十七番地

印刷者 倉島清高
東京都芝區田村町四丁目二番地

印刷所（東京六五）東都印刷株式會社
東京都芝區田村町四丁目二番地

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地

發行所 株式會社 生活社
東京都神田區須田町二丁目十七番地
電話浪花(67)一一四五八・一一六一四
振替口座東京四三三〇一
會員番號一一四五一〇

40—

購入
昭和二十 一 月 日

Oak Street
UNCLASSIFIED